
Calling

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Calling

【Nコード】

N3371Q

【作者名】

チェリ↓

【あらすじ】

サッカー部の三年生・大地はテニス部の一年生・鈴の事がちよつと気になっていた。

しかし、鈴は親友の重幸と付き合う事に……

P r o l o g u e (前書き)

コチラの作品は元々ケータイ小説文庫『野いちご』様にて公開していた作品で

ケータイ小説として書いた原稿を再編しておりますので一話が他より短めになっております。

Prologue

「あーっ！」

フェンスを越え、大きな弧を描いて女子テニス部のコートの中に入っていた

サッカーボールを見つめ、思わず俺・和泉沢大地いずみさわだいちは声を上げた。

ゴールに向かって思いっきりシュートしたはずのボールが俺の予想を見事に外して飛んで行ったのだ。

何度もバウンドを繰り返し、サッカーボールは勢いを衰えながらコロコロと転がって、

球拾いをしている女の子の足元に当たった。

「悪いーっ、ボール取ってーっ！」

その女の子に向かって叫ぶと、その子はすぐにサッカーボールを拾い上げ、そして俺の方に振り向いた。

背が低くて真新しいジャージを着ているところを見ると、つい先日入学したばかりの新入生のようなだ。

右目の下にある小さな泣きボクロが印象的だ。

「投げてー」

「あ、はい」

「ありがとう」

「いえ……」

一言、二言だけのとても短い会話。

これが俺と彼女の出会いだった――。

第1話 彼女の名は…… — 1 —

それから俺は名前もクラスもわからない彼女をたまに学校で見かけたり、

すれ違うようになった。

……だけど、ただそれだけだった。



——そして俺は中学を卒業し、三年が経って彼女の事も忘れかけていた頃、

思いがけない再会をした。

放課後、俺達サッカー部が使っているグラウンドの隣にある女子の

テニスコートに

俺が蹴ったボールが入り込んだ。

それを彼女が拾ってくれたのだ。

あの時とまったく同じ。

彼女も俺と同じこの高校に先日入学したのだ。

しかし、俺は最初彼女だとはまったく気が付かなかった。

十二歳だった女の子が十五歳になると、こうも変わるものなのか――
|。

あの頃の彼女は小学校を卒業したばかりのまだまだ“子供”で、

身長だって140センチくらいでとても小さかった。

髪もショートカットで胸だって全然ぺったんこ。

だけどさっきボールを拾ってくれた彼女は身長は150センチくらいになっていて、

髪も肩まで伸びてて胸だってそれなりにあった。（……と思う）

幼かった顔もほんの少しだけ大人になってて正直『可愛い子だなー』
って思った。

俺が“あの子”だって気が付いたのは部活が終わってからだった。

あの右目の下にある泣きボクロで思い出したのだ――。



そして更に一ヶ月後――。

俺は彼女の名前を予想外の出来事で知る事になった。

部活が終わり、いつものように同じサッカー部で部長の高津重幸と
たかつしげゆき

一緒に部室を出ると、ちょうど女子テニス部の部員達も部室から出てきた。

その中にあの子の姿もあった。

「おっ」

すると、それを見たシゲは何を思ったのか、突然ツカツカと

女子テニス部の部室の方に近づいて行った。

「おい、シゲ」

シゲは俺の声にも反応しなかった。

ズンズンと足を進め、そしてあの子の前でピタリとその足を止めた。

（え……）

俺は思わず慌てて駆け寄った。

「ねえ、君、名前何？」

いきなり名前を聞かれた彼女は半歩後ずさりしながら小さな声で答えた。

「こ、小峯鈴……です」

完璧に怯えているみたいだ。

（鈴ちゃんか……可愛い名前だな）

「へえー、可愛いね。俺と付き合ってよ」

シゲの言葉に俺も彼女もそして周りにいた女子テニス部の部員全員が固まった。

（ええええええーっ!?!?）

第1話 彼女の名は…… — 2 —

「シ、シゲッ」

こいつがこんな大胆な事をする奴だとは思わなかった。

俺は告白された本人よりも慌てていた。

「ん？」

シゲは『どうかしたのか？』と言った顔を俺に向けながら小峯鈴の反応を待っていた。

しかし、彼女は固まったまま動かない。

それはそうだろう。

突然、よくわからない人物にみんなの前で告られたんだから。

「ダメ？」

シゲはそう言うとき少しだけ身を屈めて彼女の顔を覗き込んだ。

「……あ、あの……」

「いいじゃん、付き合っちゃえぼ？」

彼女がとても困った顔をしていると横からそう言ったのは女子テニス部の

部長・織田慶子おだけいこだった。

ちなみに俺と同じクラスでしかも隣の席に座っているヤツだ。

「高津君、いいヤツだよ？」

(い、いや……確かにシゲはいい奴だけど……)

「……」

だが、彼女は無言のまま俯いている。

「はい」とも「嫌です」とも言わずに。

「黙ってるって事はOKじゃない？」

「そうかな？」

シゲと織田ちゃんは彼女が黙っているのをいい事に勝手に話を進めている。

(いやいやいや、そうとも限らんだろう)

「あー、ところでまだ名前も言っていなかったよな？」

俺、サッカー部の高津重幸。よろしくねー♪」

シゲはすっかりもう彼女と付き合う事になったつもりなのか、にんまり笑って言った。

「イズミ」

呆然としていると織田ちゃんに呼ばれた。

「“邪魔者”はとっとと退散しようよ」

そう言うとな彼女は俺の二の腕を掴んでスタスタと歩き出した。

（邪魔者……か。そりゃそうだよな……）

俺はシゲの方に振り返った。

笑みを浮かべたまま無言で『またな』と手を振っている。

俺はシゲに手を振り返しながら小峰鈴にちらりと視線を移した。

「……」

困ったように、でも恥ずかしそうな表情で俯いていた。

（けど、何も言わないって事はやっぱりOKて事なのか）

正直、ちょっと気になっていた子が親友と付き合う事になったのは微妙だけど、

俺だって別に彼女に声を掛けるチャンスが全然なかった訳じゃない。それでも、声を掛けられなかったのは元々彼女とは縁がなかったのか、

それとも、俺に勇気がなかったのか――。

「イズミ、寂しいの？」

気が付くと織田ちゃんが俺の顔を覗き込んでいた。

「へ？」

「今までずっと高津君と一緒に帰ってたもんねー？」

「ああ、そう言われればそうだな」

俺とシゲはサッカー部に入部してからずっと一緒に駅まで帰っていた。

今までお互い“彼女”がいなかったから。

だけど、それは別にまったくモテなかったという訳ではない。

俺もシゲも実は女の子から告白された事はあったりする。

特にシゲは二年の後半に“サッカー部のキャプテン”という肩書きだけで

告ってきた子がいるくらいだ。

それでも、その告白に応えなかったのは俺もシゲもサッカーの事で

頭がいっぱいだったからだ。

「明日からあたしが一緒に帰ってあげようか？」

「はあっ！？　なんでだよ？」

「だって寂しいんでしょ？」

「別に寂しくねえしっ」

確かに、いつもシゲと歩いていた駅までの道を明日からは一人で歩くのは

“寂しい”と感じてしまうのかもしれない。

俺が思っている以上に。

まあ、それは明日になってみないとわからない事だけれど。

「ならいいけどー」

でも、今は隣でクスクス笑っている織田ちゃんがそんな気持ちを少しだけ

和らげてくれていた――。

第2話 彼の名は…… — 1 —

結局、私はサッカー部の高津先輩と付き合う事になった――。

一体、何故？

どうして？

……なんで、私？

いくら考えてもわからない。

だけど、私が何も反応出来なかった事でもうすっかり“そういう事”になっていた。

「じゃあ、さっそく一緒に帰ろうか♪」

「え？ あ……は、はい」

頭上から聞こえた高津先輩の声に応え、一緒に歩き始めた。

気が付くと、いつも駅まで一緒に帰っていた織田先輩と、さっきまで高津先輩と一緒にいた

サッカー部の先輩がいつの間にかいなくなっていた。

おそらく私が放心している間に先に帰ったのだろう。

そして、いきなり二人きりになった私と高津先輩は特に会話もないまま駅に向かって歩いた。

何か話さなきゃ……と思うけれど、何も話題が浮かばない。

「鈴って、中学もテニス部？」

すると、しばらくして高津先輩の方から話し掛けてきてくれた。

「はい。先輩は？」

「俺も中学からサッカー部だよ」

「そう、ですか……」

緊張し過ぎて上手く喋れない。

「……」

「……」

しかも、会話が続かない。

(……き、気まずいよ)

けど、駅に着いて再び高津先輩が口を開いた。

「鈴は何線？」

「山手線です」

「じゃあ、俺は東横線だからここで」

「はい」

私はちよつとだけホツとした。

これで電車まで同じだと、どう間を持たせていいのかわからなかったから。

（東横線で事は、織田先輩と同じなんだ）

いつも駅まで一緒に帰ってくれている織田先輩も東横線だと言っていた。

織田先輩と別れるのもいつもこの場所だ。

「鈴、携帯の番号教えて？」

「すみません。私、携帯持ってないんです」

「あっちゃー、そうなんだ」

「す、すみません……」

「あー、いや、鈴が謝ることないよ」

高津先輩はそう言うのと、レポート用紙とシャーペンを出して何かを書いて私にくれた。

「それ、俺の携帯だから」

「ありがとうございます」

受け取ったレポート用紙には高津先輩のフルネームと携帯番号とメールアドレスが書いてあった。

「電話とかメール、いつでもいいから、鈴のしたい時にして？」

「は、はい」

小さく笑みを浮かべた彼にそう言われ、とりあえず『はい』と返事をしたけれど……、

電話は会話が続きそうにないし、メールも私は自分専用のパソコンを持っていないから難しい。

レポート用紙を四つ折にして鞆に仕舞う。

けれど、私がこのレポート用紙を再び開く事は当分ないだろう。

……おそらく。

「じゃあ、また明日な」

高津先輩は私にバイバイと手を振った。

「はい、失礼します。また明日……」

私がぺこりとおじきをすると、彼はにっこり笑って東横線のホームへと歩いて行った。

こうして、私と高津先輩の交際第一日目が終わった――。



――翌日。

午後のHRで約二週間後にある体育祭の実行委員を決める事になった。

男子と女子の一名ずつの計二名。

しかし、誰も面倒臭がってやりたがらないから当然立候補する人なんていない。

そんな訳でクジ引きという至って公平な手段で決める事になった。

私は嫌な予感がしていた。

とっても。

だって……クジ運がないから。

そして、そういう悪い予感ほだいたい当たるもので……。

私は見事に“当たり”を引いてしまった。

（最悪……）



放課後――、

さっそく体育祭実行委員会のミーティングがあった。

同じくクジ引きで選ばれた大橋君と一緒にミーティングルームに行くど、

そこには“あの人”もいた。

(あ……)

昨日、高津先輩と一緒にいた人だ。

あの人の隣には織田先輩もいた。

（織田先輩、あの先輩と同じクラスなんだ？）

あの人の名前がわかったのはそれから数分後だった――。

「三年二組の和泉沢大地です。よろしく」

実行委員の全員が揃ったところで、それぞれ自己紹介が一年生から順番に始まり、

ほんの少しだけ口角を上げて椅子から立ち上がった彼は180センチ近くはあるであろう長身で、

耳障りの良い少し低音の爽やかな声の人だった。

キラッとした眉に切れ長の目。

だけど、優しそうなその黒い瞳に私は惹きつけられていた。

“和泉沢大地”

それがあの人の名前だった――。

第3話 集団下校 — 1 —

——三日後。

「おいっすー」

昼休憩、俺のところにシゲがやって来た。

「おう、シゲ」

「あのさー、大地。ちょっと頼みがあんだけど」

「んっ？」

なんだか深刻な顔をしているシゲにちよつと驚いた。

「帰りさ……一緒に帰ってくんねえ？」

「は？」

「俺と鈴と一緒に……」

「え？ え？ なんで？」

（どうして俺が付き合い始めのカップルの間にわざわざ入らなきゃいけないんだ？）

「いや、それがさー……鈴と付き合い事になって一緒に帰るのはいいんだけどー、

どうも会話が弾まなくて……」

「会話が続かないのか？」

「続かないどころか会話すら成り立ってないと言うか……」

「小峯ってそんなに無口な子なんだ？」

確かに彼女は見た目大人しそうだけど。

「鈴ちゃん、別に無口じゃないよ？」

そう言って横から入ってきたのは隣の席に座っている織田ちゃんだった。

「まだ付き合い始めたばかりだから緊張してるだけじゃない？」

「んー、そうなのかな？」

「そうよ」

「じゃあさ、鈴が慣れるまででいいから大地、俺達と一緒に帰ってくれっ」

シゲはそう言うのと両手を合わせて拝んだ。

「なら、あたしも一緒に帰ってあげる♪」

すると織田ちゃんも一緒に帰ると言い出した。

「なんで、おまえまで？」

「イズミと高津君が話してる時、鈴ちゃんが暇なんじゃないかなあし？ って」

「あー、なるほど」

「んじゃ、決まりっ♪」

織田ちゃんはなんだか楽しそうに言った。

……で、何故か俺達四人での“集団下校”が決定した。

「て、俺と大地が喋ってたんじゃ意味ないし」

「けど、最初はあるまり深く考えずに普通に四人で喋りながら帰る方が良いんじゃないか？」

「確かにその方が鈴ちゃんも気が楽かもね。それに四人横並びで歩く訳じゃないし、

高津君と鈴ちゃん、あたしとイズミで歩けば普通に会話出来るんじゃない？」

「え、俺、帰る時まで織田ちゃんの隣っ？」

「何？ あたしが隣で何かご不満？」

「いや、そーゆーワケじゃないですヨ」

「うわー、不満いっぱい言い方……」

「てか、部活以外ずっと一緒だなと思って」

「夫婦みてえー」

シゲはクスクス笑った。

でも、ホントにその通りだ。

学校にいる間中、ずっと織田ちゃんと一緒に。

（この上、帰りまで一緒って……）

「つーか、夫婦じゃねえしっ」

「けど、俺は大地と織田ちゃん、結構いいコンビだと思うけどなー？」

付き合っちゃえば？」

シゲは本気なのか冗談なのかにやにやしている。

「あたしは全然OKだけどー？」

織田ちゃんまでこの調子だ。

「……」

俺は何も言葉を発する事が出来なかった。

別に織田ちゃんの事は嫌いじゃない。

だけど“ノリ”で付き合ったりなんかすると、後々彼女を傷付ける事になるかもしれないし、

かと言って、『俺は嫌だ』なんて言い方をするのもどうかと思った。

（この場合、どう答えればいいんだろう？）

「……イ、イズミ、そんな考え込まないでよ。冗談なんだからー」

すると、俺が余程考え込んでいるように見えたのか、織田ちゃんが苦笑いしながら言った。

「大地は時々、冗談が通じないんだよな。ま、そこが俺的にはまた好きだけど」

「……もし、からかうなよ」

逆に俺はこの二人が“いいコンビ”だと思う。

だって、こうして時々結託して俺を苛めて楽しんでいるんだから――。

第3話 集団下校 ― 2 ―

――高津先輩と付き合い始めて五日。

「鈴、お待たせー」

部活が終わった後、部室棟の前で高津先輩を待っていると和泉沢先輩も一緒に来た。

ちなみに今日は私の方も同伴者がいる。

織田先輩だ。

「帰ろ」

「はい」

そして私の隣に高津先輩、その後ろに和泉沢先輩と織田先輩が並んで一緒に歩き始めた。

ここ数日、高津先輩と二人きりだったからこんな風に四人で帰るの

はちよつとホツとした。

だって和泉沢先輩と織田先輩が一緒なら、無理矢理私が高津先輩に話しかけなくても

なんとか間が持てそうだから。

「そういえば大地も山手線だったよな？」

私がそんな事を思っていると高津先輩が和泉沢先輩の方に振り返りながら言った。

「ああ、そうだけど？」

「鈴もだよな？」

「はい」

私は首を縦に振りながら答えた。

うん……やっぱり、高津先輩と二人きりで帰るより全然緊張しなくて済む。

「田町だろ？」

すると、何故か和泉沢先輩は私が降りる駅を知っていた。

「は、はい」

（なんで私が降りる駅、知ってるんだろ？）

「大地、なんで鈴が降りる駅、知ってたんだ？」

「俺、小峯と同じF中だったし」

「えっ!？」

（和泉沢先輩も？）

「大地、鈴の事知ってたのか？」

「知ってたって言うか、なんとなく覚えてただけ」

和泉沢先輩はそう言ったけれど……

「鈴は？ 大地の事、覚えてた？」

「あ……え、と……」

私は覚えていなかった。

「覚えてないんだろ？」

和泉沢先輩はクスツと笑った。

「す、すいません……」

「いいよ。俺が覚えてるほうが不思議なくらいなんだから」

「……」

（でも、和泉沢先輩、どうして私の事覚えてたんだろ？）

「イズミはなんで鈴ちゃんの事、覚えてたの？」

私の疑問を代わりに口に出したのは織田先輩だった。

「いや、俺もそんなハッキリとは覚えてなかったんだけど……」

和泉沢先輩の答えに高津先輩と織田先輩は同時に「ふうん」と返した。

私は必死で脳内の全記憶を辿ってみた。

でも、思い出せない……

和泉沢先輩と会った記憶がないのだ。



そして、そうこうしている内にあっと言う間に駅に着いた。

高津先輩と二人で帰っている時はもつと長く感じた距離も今日はとても短く感じた。

「鈴、大地、またな」

「イズミ、鈴ちゃん、バイバイ」

高津先輩と織田先輩は東横線。

山手線の私と和泉沢先輩は改札の前で二人と別れた。

山手線のホームに行くところちょうど電車が後数秒で発車するところだった。

「小峯、走るぞ」

「はいっ」

発車ベルが鳴り響く中、私と和泉沢先輩は電車に駆け込んだ。

帰宅ラッシュと重なるこの時間の電車内はとても混んでいた。

私と和泉沢先輩の体は自ずと密着し、抱きかかえるように持っているラケットが

辛うじて二人の間を隔てる壁になっている。

「……」

「……」

和泉沢先輩も私と目を合わせることもなく、ただ無言で乗っていた。

（早く、着かないかな……）

でも、高津先輩と二人きりの時よりはあまり“苦痛”に感じていなかった。

そして次の駅に着いてかなりの人が降りた。

普段なら降りた人の数だけ乗ってくる人の数もいるのだが、今日は乗ってくる人が少なかった。

おかげで私と和泉沢先輩の間にすこし空間が出来た。

ドアが閉まり、電車が動き出すと右手にカバン、左手にラケットを持って、

つり革にも掴まっていなかった私は発車の衝撃で足元がふらついた。

「きゃっ!?!」

すると、和泉沢先輩が咄嗟に私の二の腕を掴んで支えてくれた。

「大丈夫か?」

「は、はい、ありがとうございます」

ちよつとびっくりした。

「ラケットがあるから大変だな」

先輩は小さく笑いながら「こっち」と、スタンションポールの近くに移動して私に手招きをした。

「?」

不思議に思いながらついて行くと、「これがあれば少しはマシ?」先輩は

スタンションポールに片手を置いた。

「あ、はい」

先輩はカバンとラケットで両手が塞がっている私を気遣ってくれたのだ。

（和泉沢先輩って、優しいな——）

第4話 笑顔と嫉妬 — 1 —

——翌日。

再び、体育祭実行委員会のミーティングが放課後にあつた。

HRが終わった後、織田ちゃんと一緒にミーティングルームに入ると小峯と小峯のクラスのもう一人の実行委員・大橋が前回と同じ席に座っていた。

その時、俺は初めて彼女の笑顔を見た。

大橋と楽しそうに喋って笑っている。

その笑顔にちよつとドキツとした。

(……て、小峯はシゲの“彼女”だぞ？ 何ドキドキしてんだっ)

「イズミ、どうしたの？」

不意に隣から織田ちゃんの声がした。

「あ？ えっ？ いや、なんでもない……」

あぶない、あぶない。

小峯の笑顔にドキドキしてるのを危うく織田ちゃんにバレるところだった。

昨日の電車の中での“密着事件”以来、なんかおかしい……。

電車が揺れて彼女が転びそうになって、腕を掴んで助けた時も少しだけ顔を赤くしながら

俺の顔を見上げた彼女にまたドキッとした。

しかし、俺はふと思った。

女同士の織田ちゃんの前ではともかく、俺とシゲの前で笑った事がないのは

“きつとまだ心を開いていないって言う事じゃないのか？”

……と。

大橋の隣で笑っている彼女の笑顔を見つめながら、俺は大橋に嫉妬していた。

未だ俺やシゲに向けられた事のない彼女の笑顔。

それが今、惜しげもなく大橋に向けられている。

（いや、だから小峯はシゲの“彼女”だっつーの！）

自分で自分に突っ込みを入れながら、なんで嫉妬しているのか理由がわかっているはずなのに

知らないフリをしようとしていた。

「鈴ちゃんて、可愛いよね」

気が付くと織田ちゃんも小峰の事を見つめていた。

「高津君が告ったのも、なんかわかるな」

「……そうだな」

「もしかして、イズミも“彼女”が欲しくなっちゃった？」

「どうかな……」

とりあえずそう答えるけれど、そりゃあ、小峰みたいな可愛い子なら欲しいと思う。

俺じゃなくてもきつと。

だから、シゲも告ったんだろうし。

（てか、シゲって結構勇気あるよなー、入学して一ヶ月の子にいきなり告るんだから）

今まで誰に告られても、それには応えなかったシゲがまさか自分から告るなんて

思ってもみなかった。

そんな行動力があるシゲが俺は時々羨ましいと思う――。



体育祭実行委員のミーティングが終わり、俺と織田ちゃんが立ち上がるのと、

同時に小峰と大橋も立ち上がった。

仲良くミーティングルームを出る二人。

さらさらのポニーテールの髪が左右に揺れる小峰の後姿をしばし見

つめる。

(やっぱり、俺……)

第5話 事件 ー1ー

――数日後。

体育祭の前日、実行委員の俺達は放課後から翌日の準備を始めた。

いつもサッカー部と野球部が使っているグラウンドも今日は使えない。

その為、部活が休みになった。

――
――
――
――
――
――

図書室で待ってるから

終わったら携帯鳴らしてくれ

――
――
――
――
――
――

HRの後、俺の携帯にシゲからメールが来ていた。

いつ終わるかもわからないし、一緒に帰ったとしても駅までのほんの十数分なのに。

それでも小峯と一緒に帰りたいと思うのは、彼女が携帯を持ってい

ないから

夜も電話やメールが出来ないからだろう。

しかも小峯の方からもシゲに電話を掛ける事もしないらしい。

だから全然“付き合ってる感”がまるでないんだとこの間ボヤいていた。

しかし、どうやら小峯の方は昼休憩にシゲのクラスまで行って

『今日は準備で遅くなるから先に帰って下さい』と言ったらしい。

俺が「シゲ、図書室で待ってるって」と言うと、

「今日は先に帰って下さいって言ったんですけど……」と困った顔をしていた。

そして“事件”は起こった――。

それは俺と小峯、織田ちゃん、大橋、後は体育の男性教諭の五人で

テントを組み立てている時だった。

鉄パイプで組んだ鉄骨にテントを被せて柱を起こそうとした時、突然強風が吹き、テントが煽られて傾いた。

「うわっ!？」

「きゃっ!？」

一緒に柱を起こしていた俺と小峯はそのまま同時に倒れた。

俺が小峯を押し倒す格好になり、彼女の唇にちょうど俺の唇が重なった。

あろう事か俺は小峯に“キス”をしてしまったのだ。

「っ!？」

俺は慌てて小峯から離れた。

「……」

小峯は顔を真っ赤にしながら半身を起こして俺から目を逸らした。

「……ご、ごめん」

とりあえず謝ってみたものの、非常にマズいよな？

「おーい、大丈夫か？」

すぐに先生と織田ちゃんと大橋の三人がテントを退かして助けてくれた。

「二人とも怪我はないか？」

「イズミ、鈴ちゃん、大丈夫？」

「怪我は？ 大丈夫？」

二人ともテントの下敷きになったものの幸いにも怪我はなく、誰にもキスシーンは見られなかった。

しかし、俺と小峯の心はある意味“大怪我”を負った――。



翌日、体育祭当日――。

「ねえ、鈴ちゃんと何かあったの？」

昨日の“キス事件”以来、俺と小峯はすっかり気まづくなり、ギクシヤクしていた。

小峯とはあれから挨拶以外の会話を一言も交わしていない。

しかも、目が合うとすぐに彼女は目を逸らす。

織田ちゃんはそれを鋭く察知したのだ。

「……いや、別に」

不可抗力だったとは言え、シゲの“彼女”とキスしてしまったのがバレてしまうと

一体何を言われるか……。

俺が言われるのは全然構わないけれど、シゲがカッとなって小峯に何か言ってしまうかもしれない。

彼女は何も悪くないのに……てか、俺も悪くないけど。

（つーか……シゲと小峯っでもうキスしたのかな？）

俺はふと、そんな事を思った。

（……いや、あれはまだ何にもしてねーな）

シゲと小峯は一緒に帰っている時も相変わらず会話がなない。

あつたとしても一言、二言。

手だって俺と織田ちゃんがいるからか、まったく繋ごうとしない。

この間の日曜日だって小峯とデートの一つでもしたのかと思ってい
たら、会話が成り立たないから

気まず過ぎて誘えなかったと言っていたし。

そんなんだから当然、キスなんてしているはずもなく……。

(てことは俺……シゲよりも先にやっちゃったのかっ!?)

第6話 葛藤 ー1ー

「鈴ーっ」

体育祭の午後のプログラム・学年別の『クラス対抗リレー』に出る高津先輩が、

次のプログラムの出場者の列で待機している私に手を振っていた。

私が小さく手を振り返すと、高津先輩の隣の列に和泉沢先輩が並んでいるのが見えた。

すると、和泉沢先輩も私に気が付き、ちらりとこちらを一瞥した。

でも、私は咄嗟に目を逸らした。

（ファーストキスだったのに……）

「はぁー……」

思わず深い溜め息が出た。

昨日、ファーストキスを奪われてしまったから。

……和泉沢先輩に。

先輩は「ごめん」で謝ってくれたけど、なんて答えていいかわからなかった。

（別に先輩が悪いわけじゃないのに……）

わかっているけれど、その後もずっと目を合わせる事が出来ない。

それに和泉沢先輩だって私とキスなんてしたくなかっただろう。

——パァーンッ！……

不意に乾いた音がした。

その音の大きさに私の体がビクンと小さく跳ねた。

顔を上げると学年別の『クラス対抗リレー』が始まっていた。

さっきの音はスターターピストルの音だったのだ。

三年生の『クラス対抗リレー』が始まり、アンカーの高津先輩と和泉沢先輩がトラックの中に入った。

「鈴、ちゃんと応援しててね♪」

高津先輩は私に視線を向け、小さく笑った。

「はい」

高津先輩は私の“彼氏”。

だから応援するのは当たり前なワケで……

高津先輩と和泉沢先輩のクラスはほぼ同時にトップでバトンタッチした。

後は高津先輩と和泉沢先輩の一騎打ち。

（先輩、頑張って……っ！）

私は心の中で祈るように呟きながら見つめていた。

……和泉沢先輩を。

無意識のうちに目が和泉沢先輩の姿を追っている。

私の“彼氏”は高津先輩なのに……

でも、目で追っているのも、心の中で応援しているのも和泉沢先輩だ。

高津先輩と和泉沢先輩は最後まで接戦だった。

「先輩！ 頑張って！」

私は必死で叫んでいた。

和泉沢先輩に向かって――。



結局、学年別『クラス対抗リレー』は和泉沢先輩が制した。

「あゝあ、せっかく鈴が応援してくれたのにな……」

“先輩！ 頑張っ！”

高津先輩はどうやら私が言ったあの言葉が自分に向けられた応援だったと思っているらしい。

「ちつくしょー、勝てると思ったのにー」

高津先輩はラスト3mで和泉沢先輩に抜かれたのだ。

「……」

なんて声を掛けようか？

心の中で応援していたのは和泉沢先輩。

そして……

声に出して叫んだのも……。

本当ならここで「それでもカッコ良かったです」とか言えればいい
んだろうけれど、

私はそんな気の利いた言葉の一つも言えないでいた。

寧ろ、“カッコいい”と思ったのは和泉沢先輩の方。

一生懸命に走る彼の姿にものすごくドキドキしていた。

なんか……私、おかしいよ……――。

第7話 君が好き ― 1 ―

帰りの電車の中――。

なんとなく、彼女の様子が気になった。

体育祭が終わって、俺達実行委員が後片付けをしている最中も小峯はおかしかった。

いや、おかしいのは昨日からだけど、さらに輪をかけておかしい気がした。

「小峯」

「は、はい？」

「何か、あったのか……？」

もしかしたら、昨日の“キス事件”がシゲにバレてそれで何か言われたのかとも思った。

「いえ……」

彼女は静かに首を横に振った。

「ホントに？　もし、昨日の事でシゲになんか言われたんだったら……」

「大丈夫です」

俺の言葉に被せるように小峯は否定した。

「昨日はすみませんでした……」

そして、彼女は俯いたまま言った。

「なんで小峯が謝ってんだよ？」

「だって……」

「あれは……不慮の事故みたいなモンだろ？　だから……おまえが謝る必要なんてないよ。」

俺も気にしてないし」

この時、俺って意外に平気で嘘つける奴だったんだな、と自分で思った。

「はい……」

どうして、シゲの“彼女”が小峯なんだろう？

どうして、あの時もって本気でシゲと彼女の間に割って入らなかったんだろう？

どうして、もっと早く自分の気持ちに気が付かなかったんだろう？

どうして……」。。

本当はそんな思いがずっと俺の中にあった。

シゲが小峰に告った時からずっと――。

それなのに、今俯いている彼女の横顔を見つめる事しか出来ないのは、

俺の勇気の無さが招いた結果だ。

（こんな事なら、再会したあの日に告つときゃ良かったな……）

中学を卒業してからもずっと小峰の事が気になっていた。

そして、ようやく忘れかけた頃に再会した。

考えてみれば彼女が俺と同じ高校に入学した事だけでもすごい偶然。

“運命の再会”

……と言ってもいいくらいだろう。

それなのに俺は“密着事件”や昨日の“事故”が起きるまで、自分の中にある

小峰への想いにちゃんと気が付かなかった。

いや……気付けなかった。

だけど、もっと考えてみれば俺が先に告ったところで小峰に断れていた可能性の方が大きい。

だって、そもそもシゲと付き合うのが嫌ならその場で断っていただろうし。

それに……

“先輩！ 頑張って！”

あんな風に大声でシゲの事を応援していたし――。

第8話 先輩が好き ― 1 ―

それから――、

私と和泉沢先輩は電車の中でもずっと無言だった。

私は初めて彼と同じ空間にいるのが苦しいと思った。

「それじゃ、気をつけてな」

駅に着いて一緒に改札を出ると、和泉沢先輩はいつものようにそう言って歩き出した。

「はい、失礼します」

そして、私も少しだけ先輩の後姿を見送って踵を返す。

二人の距離が段々離れて行く……。

私が振り返ってみると、先輩の後姿はもう見えなくなっていた――。



家に帰ってから和泉沢先輩の言葉がずっと頭の中でグルグルしていた。

“俺も気にしてないし”

（そっか……先輩は気にしてないんだ……そりゃ、そうよね？）

和泉沢先輩の言うとおり、あれは不慮の事故みたいなものだった。それに先輩はきっと私よりキスの経験だってあるはず。

あんな風に突然の出来事とかじゃなくて、もっとちゃんと……

「……うーっ」

思わず和泉沢先輩と“誰か”のキスシーンを想像して頭をブンブンと振った。

最近、和泉沢先輩の言葉や仕草の一つ一つにドキドキしている。

それがまた“キス事件”以来、さらに増長していた。

（高津先輩、ごめんなさい……）

和泉沢先輩の事を考える度、罪悪感が沸き起こる。

和泉沢先輩にドキドキしている事。

和泉沢先輩とキスしてしまった事。

そして……

和泉沢先輩が好きだという気持ちを隠して高津先輩と付き合っている事――。

第9話 そろそろ…… — 1 —

体育祭が終わって二週間――。

シゲと小峯が付き合い始めて一ヶ月が経った。

しかし、この二人には相変わらず会話がない。

小峯からはシゲに話し掛けないし、シゲから話し掛けてもどうにも会話が続かないのだ。

駅でシゲ達と別れて俺と二人になった時はそれなりに会話もあるのに。

俺と小峯はまた元に戻った。

“キス事件”から数日はさすがにお互い気まずくて話しかけられなかったけど、

それを乗り越えた（？）今は寧ろ前より仲良くなった気がする。

確実に縮まっている俺と小峯の距離。

一方、確実に広がっていると思われるシゲと小峯の距離……これ如何に？

（なんか、おかしい事になってきてるなあー）

なんて事を思いつつ、今日も今日とて一緒に帰った夜、シゲから電話が掛かってきた。

「ういっす、どうしたー？」

『うーん、あのさー……鈴の事なんだけど……』

「……うん？」

『そろそろ、二人だけで帰ってみようと思うんだけど、どう思う？』

「どうって……」

（まだ無理だろ）

そう思ったけど言えなかった。

『大地と織田ちゃんにずっと一緒に帰って貰ってるけど、なんかそれじゃあ二人に甘えて』

いつまで経っても同じかなあー？　　って……』

「うん、そうかもな」

そろそろシゲがこんな事を言い出すんじゃないかと思っていた。

『鈴と二人きりになっても、まだまともに話せる自信ないけど』

「でも、さすがに最初の頃よりはマシなんじゃないか？」

『そうかな？』

「……と、俺は思うけど」

だって実際、俺と小峯がそうだし。

少しずつだけど、小峯は俺と話す時も笑うようになっている。

「頑張ってみろよ。まあ、どうしてもダメだったら、また俺と織田ちゃんが一緒に帰ってやるから。」

毎日じゃなくても時々とか……俺らが一緒に帰る回数を徐々に減らしていくとか」

『うん、そうだな』

“頑張ってみろよ”

一体、どの口が言ってるんだか。

本当は「まだ俺らがいないとダメなんじゃないか？」とかかんとか言って一緒に帰りたいと思っていた。

だけど口では正反対の事を言ってシゲを応援している。

第9話 そろそろ…… — 2 —

——翌日。

部活が終わって待ち合わせ場所の部室棟の前に行くと、高津先輩の方が先に来ていた。

「先輩、お待たせしました」

私が声を掛けると、高津先輩は小さく笑って手を振ってくれた。

しかし、いつも一緒にいるはずの和泉沢先輩の姿がない。

「帰ろ」

高津先輩はそう言うのと正門に向かって歩き始めた。

「で、でも和泉沢先輩が、まだ来てませんよ?」

「あー、あいつならもう先に帰ったよ」

「……そうですか」

（和泉沢先輩、先に帰っちゃったんだ……）

今日は織田先輩もいない。

つい十分程前に先に帰ったのだ。

高津先輩と二人きり。

付き合い始めてもう一ヶ月も経っているんだから普通なら全然平気なはず。

しかし、私はというと、まだ慣れてはいなかった。

今までは和泉沢先輩と織田先輩がいてくれたおかげで高津先輩と並んで帰っていても平気だった。

それがまた二人きりになって、こんな気まずい事になっている。

（とりあえず……頑張ろう！）

……てっ？

（“頑張る”って何を？）

“彼氏”と二人きりになるだけなのに、一体何を頑張るつもりなんだろうか？

ただ普通に話して、

ただ普通に一緒に歩いて、

ただ普通に一緒に帰るだけなのに。

「鈴？」

「はいっ？」

不意に先輩に呼ばれ、びっくりした。

「なんで、そんなにびっくりしてんの？」

「あ……いえ……」

「？」

高津先輩はクスッと笑いながら首を傾げると、なんとなく私に視線を向けながら

ゆっくりと手を伸ばした。

先輩の掌が私の手の甲に触れ、軽く包み込むように握られた。

初めて高津先輩と繋いだ手。

掌と掌が重なっている訳でもなく、強く握られている訳でもない。

先輩が私の手の甲を掴み、私もただ握られているだけだった。

（普通ならドキドキするもんなんだろうなあー）

ちょっと変な繋ぎ方だけど“彼氏”と初めて手を繋いでいる訳なんだし。

でも、私は全然ドキドキなんてしていなかった。

（相手が和泉沢先輩だったら、きっとドキドキするんだろうな……）

第9話 そろそろ…… — 3 —

久しぶりに一人で帰る道はなんだか長く感じて、電車の中もとても退屈だった。

家に着いてからもなんか物足りないというか、寂しいというか……。

そんなだから夕飯の後、自分の部屋でボーッとしていたから携帯が鳴っている事にも

しばらく気が付かなかった。

……RRRRR、RRRRR……—、

「はいっ」

散々鳴っていたと思われる着信音がやっと俺の耳に届き、慌てて飛び起きて携帯に出た。

『ごめん、寝てた?』

携帯の向こうから申し訳なさそうなシゲの声がした。

「あ、いや、ボーツとしてた。どうしたんだ？」

『それがさー、今日、鈴と二人で帰ったんだけどー』

「うん？」

シゲの声が明るくなり、きっと小峯と何か進展があったんだな……と、直感した。

『手、繋いだ♪』

「おー、よかったじゃん」

『めっちゃ緊張してさー、ドキドキしたよ』

「あはは、でもちゃんと進展したんなら俺らも放って帰った甲斐があったよ」

『うん』

シゲはちよつと照れたように笑った。

俺はちよつと胸がチクツとした。

小峯と手を繋いだけで嬉しくてわざわざ俺に電話をしてきた事を考えると、

キスした後はもつとテンション高いんだろうな。

でも、俺はその話を今みたいに平静を装って聞いてやれるだろうか――？

「てか、手を繋いだって事は小峰の方もシゲに心を開き始めたって事じゃないか？」

『いや、それがー……実は、俺が一方的に無言で鈴の手の甲を上から握ったというか……、

厳密に言うと手を繋いだと言うよりは……』

「そ、それって、つまりは何の前触れも無く小峰を“捕獲”した様な感じ？」

『うん……』

「その様子じゃ、会話もまだ成り立ってないっぽいな……？」

『うん……』

俺はシゲの答えにホッとしているのが自分でもわかった。

“親友の恋を応援してやりたい自分”と“そうじゃない自分”

「……でも、さ……、明日はきっと普通に手を繋ぐ事、出来ると思うぞ？」

それでも口では相変わらずこんな事を言っている俺は、きっと“偽善者”だ――。

第10話 限界 ー1ー

和泉沢先輩と織田先輩は次の日も、そしてまたその次の日も先に帰った。

そして高津先輩は私と手を繋ぐようになった。

（もうこれからずっと高津先輩と二人きりで帰らなきゃいけないのかな……？）

駅で高津先輩と別れる時に手が離れる瞬間、ちょっとホッとする。

山手線のホームに行き、電車に乗って走り出した時、溜め息が出る。

（和泉沢先輩と話したいな……）



次の日、私の願いが少しだけ叶った。

「ごめーん、ボール取ってーっ！」

背後から聞こえた声に少しドキッとした。

（あ……）

和泉沢先輩だった。

「小峯、それ投げて」

和泉沢先輩は私の目の前に転がっているサッカーボールをつんつんと指差した。

「はい」

私がサッカーボールを投げると先輩は「サンキュー」と言って笑顔
を向けてくれた。

……キュン……——

胸が鳴ったのがわかった。

ちよっただけ先輩と話せた。

“会話”とは言えないかもしれないけど嬉しかった——。



「鈴、明日会えない？」

土曜日、部活の帰りに高津先輩にそう訊かれ、私は言葉に詰まった。

明日は特に予定はない。

でも、先輩とは会いたくなかった。

毎日駅までの十数分の帰り道でさえ苦痛に感じているのに、これで日曜日に数時間なんて、

とても耐えられそうもない。

「ごめんなさい、明日はちょっと……」

私は嘘を吐いた。

「……そっか」

「すみません……」

「いや、予定があるなら仕方ないよ」

先輩はそれ以上、何も言わなかった。

理由も特に聞いて来ない。

「……」

しかし、明日は誤魔化せたけどこれから先、そう毎週断れないだろう。

「……あの……、先輩……」

（もう無理……）

「鈴」

「……はい」

「その“先輩”って呼び方、やめてくれない？」

「え？」

「下の名前で呼んで？ 後、敬語も」

「……」

「なんか“先輩”って呼ばれて、ずっと敬語のままだとさ、いつまで経っても

先輩後輩のままのような気がして」

「……」

「いきなりは無理なら、少しずつでもいいから俺はそうしてほしい」

「はい……」

私はそれ以上、何も言えなかった――。



「鈴、来週の日曜日は空けておいてね？」

駅に着いて高津先輩と別れる時、手を繋がれたまま顔を覗き込まれた。

「……」

まさかこんなに早く来週の約束をされるとは思わなかった。

言い訳が思いつかない。

「もしかして、来週も何かあるのか？」

何も答えないで黙ったままの私に高津先輩は怪訝な顔をした。

「鈴？」

「……」

「俺と会うの……嫌？」

「……」

私は否定できなかった。

先輩の事は嫌いじゃない。

でも……

「ごめんなさい……私、これ以上、先輩とはお付き合いできません

……」

「え……なんで……？」

「ごめんなさい……」

「俺の事が嫌いになった？」

「……違います」

「じゃ、なんで？　ちゃんと言ってくれないとわかんないよ」

「ごめんなさい……」

「鈴」

「……」

「鈴っ」

「ごめんなさいっ」

私は居た堪れなくなって繋いでいた手を振り解き、逃げ出した――。

第11話 共犯者 ー1ー

部活の休憩時間、シゲがボーツとしながらテニスコートを見つめていた。

その視線の先には小峯がいる。

（おいおい……いくら休憩時間だからって“彼女”に見惚れてんじやねえよ）

「シゲ」

「……」

シゲは俺の声が聞こえていないのか、まったくの無反応だ。

「シゲ」

俺は遠くから声を掛けているわけでもなく、すぐ隣にいる。

小声で呼んでるわけでもないのに。

「おい、シゲ！」

今度はペチンとおでこを叩いてやった。

すると、さすがにこれには反応した。

「な、何だよ？」

「何、ボーツとしてんだよ？」

「……」

「さっきも全然シュート決めてなかったし、パスも通らねえし、ボールキープも出来てねえし、

なんか今日はおまえおかしいぞ？ 小峯と何があったか知らねえけど部長なんだから

しっかりしてくれよな」

「おう……悪い」

シゲはそう言おうと溜め息を吐いた。

（うわぁー……絶対コレ、小峯となんかあった顔だ……）

シゲの深い溜め息と覇気のない横顔で俺はピンときた。

そして、その勘は見事に当たった。

部活が終わった後、部室に入ってもシゲは着替えもしないで座ったままだった。

だが、他の部員達が帰って俺とシゲの二人だけになった時、

「フラれた……」

シゲがぽつりと呟いた。

「へ？」

(フラれた？)

「土曜日の帰りにさ、鈴に日曜日会いたいって言ったんだけど予定があるって断られて、

それは俺もいきなり前日に言ったから仕方ないと思ったんだけど……、

『来週の日曜日は空けておいてね？』って言ったら、鈴、返事をしなかったんだ」

「……」

「それで、『俺と会うの嫌なのか？』って訊いたら……『ごめんなさい』って謝られて

俺とはこれ以上付き合えないって言われた」

「な、なんで？」

（嘘だろ？）

「その時は結局、何も答えなかったんだけど、今日の昼休憩に鈴と
もう一回話をしたらさ……断れなかったんだってさ」

「何を？」

「俺が鈴に付き合ってくれて言った時、俺とおまえと織田ちゃんの
三人に囲まれて

怖くて何も言えなかったって。それに他の部員達も見てたし」

「……」

（てコトは、俺も共犯……？）

「鈴、他に好きな奴がいるんだってさ」

「えっ!？」

「本当は好きな奴がいるのに、俺と付き合ってるのが苦しかったって……泣きながら何度も謝られた」

「それって……誰なんだ？」

「名前は言わなかった。でも『俺が知ってる奴?』って訊いたら黙ったまま否定もしなかったから、

多分知ってる奴」

「そっか……なんか、悪かったな。何も知らずにボーツとすんなとか言ってる」

「いや、おまえの言う通りだよ。部長なんだからしっかりしないとな? 試合も近いんだし」

シゲはそう言うのと、やっと立ち上がって着替え始めた。

「でも、鈴には悪い事したな……いきなり鈴の気持ちも訊かずに付き合う事になったんだから」

「俺達、そんなに怖かったのかな？」

「んー……先輩三人に囲まれると嫌だとは言えなかったのかもな」

そして、シゲと小峯は“恋人同士”から“先輩後輩”に戻った。

意外に……早かった。

なんだかんだと言っても、てっきり二人はうまくいってるんだと思っていた。

“偽善者”の俺はシゲと小峰が別れた事を聞かされて複雑な思いだった。

（それにしても、小峯が好きな奴って誰なんだ？）

第12話 後悔 — 1 —

——二週間後。

「イズミ、明日暇？」

休憩時間、織田ちゃんは何やら明日は暇かと訊いてきた。

明日は日曜日。

けど、誰かと遊ぶ予定は入っていない。

「今んトコ、暇だけど？」

「明日、テニス部の試合があるんだけど応援に来てよ？」

「はあ〜？」

「どーせ、暇なんでしょ？」

「いや、まあ、そーだけど……」

（何故、俺がテニス部の応援なんか？ あ、でも、待てよ……）

テニス部の試合という事は小峯もきつというはずだ。

試合には出ないかもしれないけれど、それはそれでいい。

「考えとくよ」

……なーんて、ホントはもう行く気満々。

「んじゃ、時間と場所、後でメールで送っとく」

「うん」

シゲと小峯が別れてから俺も彼女とは顔を合わせていなかった。

テニスコートに態とボールを蹴り入れるのも、そうそう頻繁に使い

る手じゃないし。

部活帰りに駅のホームで彼女を待ってみたりした事もあるけれど、
タイミングが合わず一緒に帰る事が出来なかった。



そして翌日、日曜日――。

織田ちゃんとの約束通り、俺は女子テニス部の試合の応援に行った。

ちなみにこの日は男子テニス部の試合も同じ会場である。

「織田ちゃん」

十二時半過ぎ。

試合会場に着くとすぐにうちの高校のテニス部の連中を見つけたことが出来た。

「イズミ、来てくれたんだ？　ありがとうー♪」

「暇人だからな」

（ホントは小峯に会いたくてだけど）

その小峯はというと、他の一年生の部員達と一緒にいた。

一年生は何かと忙しい。

こういった試合の時とかは特に。

いろんな雑用があるから。

だから俺は敢えて彼女に声は掛けなかった。

「高津君は？　今日は一緒じゃないの？」

「あー、シゲには今日の事言ってない。小峯の事もあるからまだ顔を合わせるの

気まずいんじゃないかと思って」

「うん……そうだね」

シゲと小峯が別れた事は織田ちゃんも知っていた。

小峯本人から聞いたみたいだ。

「次の試合、何時から？」

「十三時から」

「んじゃ、もうすぐだな」

「うん」

「なんか余裕だな？」

「だって、次の試合はあたしじゃないもん」

「誰？」

「鈴ちゃん」

（なにいつ!?!）

「小峯、出るのか？」

（一年生なのに、よく出られたなー）

「出場予定だった子が怪我しちゃってね、数日前に急遽出る事になったの」

「ふーん」

そういえば織田ちゃんの後ろに腕を怪我した女の子がいる。

（あの子の代わりかな？）

小峯の方をちらりと見ると意外にも落ち着いていて、黙々とストレッチをしながら

アップに入っていた。

（小峯、頑張れよ）

「て、ところで織田ちゃんの試合は？」

「一回戦で負けちゃった♪」

織田ちゃんはそう言うのとぺろりと舌を出して「てへっ♪」と笑った。

「……おい」

「もおー、イズミが早く来ないからー」

「俺の所為かよっ」

「そうじゃないけど、朝から来るものだと思ってたから」

「いや、いくら暇人でも日曜日くらいはゆっくり寝たいし」

「お父さんみたい」

「……」

「でも、イズミ、来た意味なくなっちゃったね？」

「いいよ、別に。暇人だし」

（それに元々、小峯に会いたかったからだし）

第12話 後悔 一 2 一

――十三時ジャスト。

小峯の試合が始まった。

相手は都内でも有名な女子テニス部の強豪高でしかも三年生。

今大会の優勝候補らしい。

（相手が悪いな）

正直、そう思った。

先攻は小峯。

ベースラインの外側に立ち、トントンと数回ボールをバウンドさせた後、

トスをしてサーブを打った。

ボールは対角線上のサービスコートのラインぎりぎり内側に入り、

相手はそのスピードの速さに手も足も出なかった。

（いきなりサービスエースかよっ!？）

俺がぼかんと口を開けていると隣にいた織田ちゃんがクスツと笑った。

「鈴ちゃんの武器は実はあのサブなのよ」

「へえー、そうなんだ？」

「ほぼ確実にファーストを決めるし、かなりのスピンがかかってスピードも速いのよ。」

「見た目からは全然想像出来ないでしょ？」

「うん」

小峯はサーブだけじゃなく、ストロークも普段の彼女からはまったく想像出来ない動きをしていた。

相手が返してくるボールにも素早く反応している。

そしてその度にひらひらと揺れるスコートの裾。

(……て、俺、どこ見てんだっ!?)



「あれ？ 小峯は？」

試合が終わり、気が付くと小峯の姿が消えていた。

「顔洗ってくるって言ってたけど」

「にしては遅くね？」

試合が終わってからかれこれもう三十分以上経っている。

結局、小峯は試合に負けた。

1セットマッチで最初の1ゲームは取ったものの、後のゲームは全て負けてしまった。

それでも優勝候補の相手からサービスエースまで取ったんだから

俺からしてみればすごい事だと思う。

「そのうち帰って来るよ」

織田ちゃんはそう言ってあまり気にしていないみたいだった。

（おまえ、部長だろ。もうちょっとちゃんと心配してやれよ）

小峯の事が心配になった俺は「トイレ行ってくる」と誤魔化して捜しに行く事にした。

（どこに行っただろう？）

顔を洗いに行ったという事は更衣室がある管理棟の方かもしれない。

しかし、管理棟に着く前に俺は彼女を見つけた。

植え込みの影から小峯のスコートが見えた。

「小……」

だけど俺は声を掛けようとしてやめた。

小峯が泣いていたから。

それと一人じゃなかったから――。

「あれだけの人を相手によくやったと思うよ？　1ゲーム取っただけでもすごいって」

泣いている小峯の傍に男が立っていた。

うちの学校の男子テニス部のチームジャージを着ている。

「俺なんか試合にも出られなかったんだからさ」

(……て、事はコイツは一年生か下手くそな二年生か)

隠れて話を聞いていた俺は、その男が誰なのか知りたくて窺っていた。

しかし、背中がこっちに向いている所為で顔が見えない。

小峯はそいつの言う事に小さく頷きながら泣いていた。

試合に負けたのが悔しかったんだろう。

こんな時、普通は声を掛けて慰めるところなんだろうけれど“慰め役”はもうすでにいる。

そんな訳で俺はただ立ち聞きしているだけの奴になってしまっていた。

（何やってんだろ？ 俺）

二人に見つかったらカッコ悪い事この上ない。

何も見なかった事にして立ち去ろう……そう思っていた時、その男が小峯の頭をポンポンと撫でた。

「岩井君、ありがと……」

（“岩井” って奴か）

小峯が“君” 付けで呼んでいると言う事は一年生か。



それから小峯は俺が織田ちゃん達のところに戻ってから十分後くらいに戻ってきた。

岩井とかいう奴と一緒に。

(むー……)

「あたし、鈴ちゃんの好きな人って岩井君の事じゃないかなって思ってたよねー」

俺が目で小峯と岩井を追っていると隣から声が聞こえた。

織田ちゃんだ。

「そうなの？」

「だって、ほら、鈴ちゃんの顔、高津君と話してる時と全然違うでしょ?」

「うん、そうだな……」

織田ちゃんの言うとおり小峯の顔は全然違っていた。

シゲと話している時とも、俺と話している時とも……。

「さて、と……帰ろっかなー」

「え？　もう帰るの？」

「ああ、だってもうおまえらの試合はないんだろ？」

小峯が敗退してうちの女子テニス部は全滅したのだ。

「でも、男子はまだあるみたいよ？」

「え……いいよ、男子は。知り合いいねえし」

それに……来るんじゃないかって思った。

小峯に会いたくて、小峰と話したくて来たのに……。

別に、小峯の好きな奴の顔を拝みに来た訳じゃないのに――。

第13話 交換 ―1―

「イズミ、学食行くの？」

翌日、週明けの月曜日。

昼休憩、弁当を食べ終わって学食にコーヒー牛乳でも買いに行こうと席を立った俺に

織田ちゃんが声を掛けてきた。

「うん。もしかして、ついでに何か買って来い？」

「ううん。じゃなくて、昨日応援に来てくれたからお礼に

コーヒー牛乳でもどうかなー？ って」

「お、マジで？ でも、俺、結局おまえの試合見れなかったけど」

「あはは、そうだけど、わざわざ来てくれたしね」

……という訳で、俺と織田ちゃんは学食にやって来た。

自販機の前には男子と女子のカップルがいた。

上履きの色からして二人とも一年生みたいだ。

「鈴ちゃん♪」

すると、織田ちゃんがその女子の肩を軽くトントンと後ろから叩いた。

（えっ？）

「あ、織田先輩、和泉沢先輩、こんにちはー」

女の子が振り返り、俺と織田ちゃんの姿を認めるとニコツと笑った。

(小峯っ!?)

俺はいつもポニーテールにしている小峯しか知らない。

しかし、今は髪をおろしていた。

(……全然気が付かなかった)

「ちわっす」

男子の方はあの岩井とかいう奴だった。

(またこいつと一緒かよ……)

「イズミ、好きなの押してー」

俺がムツとしていると、織田ちゃんはチャリン、チャリンと自販機に

小銭を入れながら振り返った。

「サンキュー」

ポチッと【コーヒー牛乳】のボタンを押し、自販機の中に手を突っ込んだ。

すると、ガラコンツと音を立てて出てきたのは何故か“牛乳”だった。

「あれっ？」

「イズミ、どうしたの？」

「コーヒー牛乳のボタン押したのに牛乳が出てきた」

「押し間違えたんじゃないの？」

「いや、確かにコーヒー牛乳のボタン押したって」

「「んー？」」

そして、織田ちゃんと二人で首を捻っていると、今度は隣の自販機の前にいた小峯が

「あれえー？」と言った。

「どうしたの？」

「牛乳のボタン押したのにコーヒ―牛乳が出てきた」

「押し間違えたとか」

「ううん、確かに牛乳のボタン押したんだけど……」

「「……？」」

小峯と岩井は俺達と同じ様に顔を見合わせて首を捻っていた。

どうやら自販機の業者がコーヒ―牛乳と牛乳を入れ間違えたようだ。

「小峯、牛乳がよかったの？」

「はい。和泉沢先輩はコーヒ―牛乳ですか？」

「うん」

「「……」」

俺と小峯はしばしの間見つめ合い、ニッと笑った。

どうやらお互い同じ事を考えたようだ。

「「はい♪」」

俺が差し出した牛乳を小峯が受け取り、小峯が差し出したコーヒー牛乳を俺が受け取った。

利害一致で交換終了。

「俺、牛乳嫌いだから助かったー」

「えっ、そうなんですか？」

「うん、コーヒー牛乳は好きだけど牛乳は無理」

「それなのにそんなに背が高くなったんですか？」

小峯はそう言っていると俺を見上げた。

俺の身長は183cm。

150cmくらいしかない小峯とは約30cmの身長差がある。

「私なんて毎日牛乳飲んでもこれなのに……」

小峯は恨めしそうな顔で俺を見つめた。

「でも、これから伸びると思うよ？ まだ高一なんだし」

そう言って小峯に優しい笑みを向けて慰めたのは横で話を聞いていた岩井だった。

（出たー、 “ 慰め役 ” ）

第13話 交換 ―2―

教室に戻り、席に座った私は自分の手の中にある牛乳を見つめた。

和泉沢先輩と交換した牛乳。

なんだか飲んでしまうのがもったいない。

でも、夏も近いこの季節、飲まずに置いておいたら間違いなく教室の中が

“異臭騒ぎ”になってしまうだろう。

……プスー、

ストローを牛乳パックに刺して一口飲むと、いつもと同じはずの牛乳は

ちょっぴり甘い味がした――。



「ようっ」

部活が終わった帰り、駅のホームで電車を待っていると私の隣に誰かが並んだ。

「あ」

和泉沢先輩だった。

「今日は女子テニス部、コートにいなかったから休みなんだと思ってた」

「視聴覚室で反省会してたんです」

「あー、昨日の試合？」

「はい……て、先輩、どうして昨日、試合があったの知ってるんですか？」

（織田先輩に聞いたのかな？）

「え……俺、昨日居たじゃん、試合会場に」

「へっ!？」

（ウソッ!？）

「気が付かなかった？」

「はい……」

「嘘だろぉー？ 俺、小峯の試合も見ただ。てゆーか、小峯の試合しか見てないけどな」

（ええっ！？）

「他の人の試合は見なかったんですか？」

「織田ちゃんに応援に来てって言われて昼頃行ったら、ちょうど小峯の試合があるって言うから」

「あっさり負けちゃいましたけど……」

「でも、自分の力を目一杯出せたんだろ？」

「はい」

「なら、いいじゃないか。力を出し切れずに負けるよりはずっといい。」

それにおまえの対戦相手って優勝候補だったんだろ？

だったら逆にそんな相手と対戦出来てよかったじゃないか」

「?」

「だいたい優勝候補にぶち当たるのは、それこそ準々決勝以降くらいだし、

それが早々に当たって対戦出来たのはいい経験だと思うぞ?」

(先輩……)

彼がそんな事を言うなんて、少し意外だった。

「あれ? 俺、今、なんか変な事言った?」

「いえ……そうじゃなくて、なんか他の人とは違う事言ったから」

「何それ？」

「周りのみんなは『優勝候補が相手じゃ仕方がない』とか『よくやっただと思う』しか

言わなかったんですけど、先輩はなんか別の角度からって言うか……、

みんなとは違う目線って言うか……なんか、そんな風に考えられるのってすごいなって思いました」

「ははは、そうかい？」

先輩は照れ隠しなのか笑って誤魔化した感じだった。

だって、耳が赤くなっていたから。

（先輩ってなんか可愛い♪）

第14話 すれ違う想い ― 1 ―

――数日後。

「こらあーっ！ イズミーツ！」

その日の部活。

女子のテニスコートに向かって蹴り込んだサッカーボールを取りにいくと、

織田ちゃんの声がコートに響き、サッカーボールを小脇に挟んで仁王立ちしていた。

「悪い、悪い」

（あっちゃー……今日は織田ちゃんが拾ったかー）

ボールはいつもだいたい小峯が拾ってくれていた。

たまに他の部員が拾う事もあるけれど、小峯が拾う率は高かったんだけだなー。

「ちょっと、最近なんかボールが飛んでくる回数が増えてない？」

「え？　そうかあー？」

最初は月二くらいのペースで態とテニスコートに向けてボールを蹴り飛ばしていた。

それが最近、小峯の顔を見たさに週一にしたのがまずかったか。

「二年の時まではせいぜい三、四ヶ月に一度くらいだったと思うけど？」

「気のせい」

「三年になってボールが飛んでくる回数がやたら多くなったのはどうして？」

「さあ？　俺、サッカー下手になったのかも？」

「もしかしてテニス部の一年の中に好きな子がいたりしてー？」

織田ちゃんはそう言うのにやりと笑った。

（ぐは……っ、見抜かれてる）

「たまたまだよ、たまたま」

「イズミってわりと古典的な手段を使う人だったんだねー？」

「だから、気のせいだってば。次からは気をつけるよ」

「まあ……別にいいけど」

織田ちゃんはそう言うのとサッカーボールを高く放り投げた。

それをリフティングで受け取る。

（ヤバイな。とりあえず月二に戻すか）

「大地、またやらかしたのか？」

グラウンドに戻るとシゲが苦笑いしていた。

「ああ、織田ちゃんに怒られた」

「一年に取りに行かせればいいのに」

「まあ、そうなんだけど……自分が蹴り込んだボールを取りに行かせて今みたいに

怒られたりなんかしたら可哀想だしな」

（だいたい態と蹴ってんだし）

「確かに。俺等もそういうので散々怒られた事があったしな。

けど、最近テニスコートによく飛ばすよな？」

「う……織田ちゃんにも同じ事言われたよ」

「織田ちゃん、鋭いからな」

「何が？」

「女の勘は鋭いって話」

「？」

俺はシゲが言った言葉の意味がさっぱりわからなかった――。

第14話 すれ違う想い ― 2 ―

織田先輩の怒鳴り声が聞こえ、顔を上げると和泉沢先輩がサッカーボールを取りに来ていた。

（あゝあ……今日は和泉沢先輩のボール拾えなかったな……）

そして、何を話しているか気になっていると、ちょうど織田先輩達の近くに

テニスボールが転がっていた。

二人に近づくようにそのボールを拾いに行くとちよつとだけ会話が聞こえた。

「イズミってわりと古典的な手段を使う人だったんだねー？」

「だから、気のせいだってば。次からは気をつけるよ」

「まあ……別にいいけど」

織田先輩はボソツと呟くように言うと、サッカーボールを高めに放り投げた。

和泉沢先輩はそのボールを右足でポンとりフティングで受けると、

織田先輩にバイバイと手を振って踵を返した。

（和泉沢先輩と織田先輩、仲良いな……）

私は和泉沢先輩がサッカーボールをわざわざ取りに来るのはきつと織田先輩の事が

好きだからなんだと思っている。

だって、普通は球拾いしている一年生のサッカー部員が拾いに来るはずだ。

現に他の先輩が蹴ったボールがこっちに飛んできた時は一年生が取りに来てるし。

そして、織田先輩も多分、和泉沢先輩の事が好きなんだと思う。

グラウンドに戻って行く和泉沢先輩の背中をずっと見つめていたから。

「ハァー……」

溜め息が出てきた。

和泉沢先輩と織田先輩は同じクラスで席も隣同士。

いつも一緒にいて仲も良い。

私はと言うと和泉沢先輩がボールを取りに来た時か、帰りが一緒に
ならない限り

まともに顔を合わせる事もない。

織田先輩は身長もそれなりにあるし、スタイルもいい。

だから背が高い和泉沢先輩と並んでいるところを見るとホントにお
似合いなんだよね……。

それに比べて私は毎日牛乳も飲んでいるのに身長は155cmもな
いし、胸だってAカップ。

同じ“女の子”というカテゴリなのに私と織田先輩じゃどうしてこ
んなにも違うのか？

（男の子なら誰でもみんな織田先輩みたいな女の子の方がいいんだ

ろくなあー)



――翌日。

雨が降っていた。

真夜中から降り始めた雨は段々と激しさを増して、午後になってもまったく止む様子もなかった。

そんな訳で今日は部活もなくなった。

(サッカー部も今日はお休みかな?)

教室の窓からグラウンドを見ると、土砂降りの雨の所為でとても使

える状態じゃなかった。

だから“もしかしたら和泉沢先輩と帰りが一緒になるかも？”そんな淡い期待を抱きながら

学校を出ると、目の前を和泉沢先輩と織田先輩が並んで歩いていた。

「……」

私は思わず歩く速度を落として二人と距離をとった――。

第15話 救出 — 1 —

——七月に入り、夏休みも近づいてきた頃。

今日から一週間、期末考査があつて午後からは授業も部活もない。

久しぶりに“帰宅部”と同じ時間帯の下校だ。

そして駅前に辿り着くと、前方から軽そうな女子大生が近づいてきた。

「ねえねえっ、ちよっといひ？」

「？」

「今、カットモデルを探してるんだけど、あなたやってくれないかな？」

「あー、いや、そーゆーのいいです」

「絶対、悪いようにしないし、今よりももっと格好良くなるよ?」

「急いでるんで」

「今日、時間ないなら明日でも」

「明日も時間ないっす」

「じゃ、いつならあるの?」

「ずっとない」

俺がそう言って再び歩き始めても女子大生はまだついて来ていた。

「一日くらいは時間あるでしょ？」

（しつこいなー）

ふと周りを見てみると俺以外にも何人かが同じ様に捕まっていた。

男子は女子大生に、女子もやはり大学生と思われる男に捕まっている。

どうも新手のキャッチセールスみたいだ。

“カットモデル”だとか何とか言って店に連れ込んで適当にカットした後、

「お手入れにはコレがいいですよ」とか言ってやたら高いシャンプーとか売りつけるんだろうな。

そして駅の構内に入ろうとした時、小峯の姿が見えた――。

小峯は男二人に挟まれ、困った顔をしていた。

(あっちゃー……もしかして逃げられないのか?)

俺は後ろからついて来ながらまだ何か言っている女子大生を無視して小峯に近づいた。

「カットモデルくらいいいじゃん」

「絶対、今よりすんげえ可愛くしてあげるからっ」

男二人は小峯を壁際にして逃がさないようにその前に立っている。

ゆるゆると断っているうちにジリジリと追い詰められたのか?

(っーか、さっき俺に絡んできた女子大生と同じ事言ってるし)

俺はどうにも逃げ場のなさそうな小峯を救出する為、男共の間を割って入った。

「お待たせーっ」

「……せ、先輩っ!？」

「ごめんな、待たせて。行こうか」

「えっ? えっ?」

小峯は啞然としていた。

「あれー? 何? 彼氏?」

「彼氏もカッコいいじゃん。 ねえ、彼氏もカットモデルどお?」

俺が小峯の手を引いて立ち去ろうとしていると男共は俺の前を塞いだ。

「いえ、結構です」

「なんで? いいじゃん」

「そうそう、悪いようにはしないから」

（だから、バカの一つ覚えかって）

第15話 救出 ―2―

「俺達、急いでるんで」

和泉沢先輩はそう言うと、訳がわからずオロオロしているだけの私の手を取って踵をあげた。

「いいじゃん、ちょっとくらい」

しかし、大学生のお兄さん二人もなかなかしつこい。

「いいけど、兄さん達、さっきからずっと撮られてるのわかってる？」

すると和泉沢先輩は大学生達の方に視線を移した。

「防犯カメラ」

「「え……」」

「ここ、駅前だから防犯カメラでばっちり警察とかから監視されて、

あんまりしつこいと“悪質な勧誘”と見做されて捕まっちゃうよ？」

「「……」」

大学生達は無言で顔を見合わせた。

そして、その様子を見た和泉沢先輩はそのままスタスタと歩き始めた。

「あ、あの……っ、ありがとうございました」

駅の構内に入り、私がそう言うと和泉沢先輩がピタリと足を止めて振り返った。

「小峯」

「は、はいっ」

(怒られる……っ)

私はてっきり先輩に叱られると思い、ぎゅっと目を閉じていた。

だけど……

「大丈夫か？」

先輩は優しい声でそう言ってくれた。

「……は、はい」

ちよつと意外だった。

でも、次の瞬間、先輩は溜め息をついた。

「しっかし……おまえはホントに“嫌”って言えない性格なんだな？」

「すみません……」

（先輩、きつと呆れてるんだろうな……）

自分でもこういう性格が時々嫌になる。

「やっぱり……呆れてます、よね？」

「うん、ちょっと……」

「……」

（あー……）

「まあ、小峯のそーゆートコ、俺は嫌いじゃないけど？」

「ほえ？」

「でも、次から勧誘に遭った時は『興味ありません』て、ハッキリ言うんだぞ?」

「あ……は、はいっ」

「そうすれば、だいたいは『そうですか』って言って、くつついて来ない。」

けど、さっきみたいな性質の悪い勧誘の場合は……ホラ、あそこに交番が見えるだろ?」

和泉沢先輩はそう言って構内からも見える駅前にある交番を指差した。

「頑張ってダッシュであそこに入っちゃえ。さっきの兄さん達みたいに二人くらいなら、

なんとかなるだろ?」

「はい」

「まあ、ああいうのは滅多にないとは思うけど、一応逃げる手段な？」

「はい」

和泉沢先輩はすごく優しい目で言った。

“ちょっと呆れてる”と言ったけれど、決して私の事をバカにしているとかなんじやなくて、

なんて言うか……私の事を本当に心配してくれている感じがした。

……多分、私の思い込みなんだろうけれど。

第16話 存在 — 1 —

「ねえ、イズミ、昨日鈴ちゃんと一緒に帰らなかった？」

翌日、朝一で織田ちゃんに訊かれた。

「あ？」

「駅で見かけた」

「あー……」

どうやら織田ちゃんは昨日、俺と小峯があの人さん達から逃げた後、一緒に帰っているところを目撃したようだ。

「あれは、小峯がなんかヘンな勧誘に捕まってさ、ちょっと助けただけ」

「それって、『カットモデルになりませんか？』ってやつ？」

「そそ。てか、織田ちゃんも捕まっただんだ？」

「うん、まあ。あたしはそんなの完全無視して通り過ぎたけど、鈴ちゃん捕まってたの？」

「ああ、例によって“嫌”って言えなかったみたいでさ、男二人の鴨にされてた」

「うっわー」

「そんなワケで俺が“ヒーロー”の如く、助けに入っただってワケ」

「ヒーローねえー」

織田ちゃんはクスクスと笑った。

そして少しの間を空けて「……イズミ、鈴ちゃんの事、どう思ってる？」と訊いてきた。

「どうって……」

俺にとって小峯はもう“ただの後輩”とは言い切れない存在になっている。

でも、それを口にするわけにはいかない。

もし、その事が織田ちゃんからシゲに伝わって耳に入ったらややこしい事になる。

「好き？」

織田ちゃんはズイツと顔を近づけて、やや小声で言った。

「え!？」

びっくりした。

(突然、何を訊く?)

「ねえ、どうなの？」

「……」

（だから……そんな事言えるわけねえだろっ）

俺は何も答えず黙っていた。

「じゃあ、質問変える。イズミはなんで鈴ちゃんと同じ中学だった事を覚えてたの？」

すると、今度はさっきと違って遠回しな感じの質問をしてきた。

「なんでって……、中学の時もテニスコートに飛んで行ったサッカーボールを取りに行ってたし……」

「ふーん……そっか」

織田ちゃんはそう言う前を向き、頬杖をついて黙り込んだ。

一体、何が聞きたかったんだ？

そういえば、シゲがこの間、“女の勘”がどうとか言っていた気がする。

今の質問と何か関係があるのかな？

いや、だとしても俺が小峰の事を好きだという素振りは見せていないはずだ。

……多分——。

第17話 陰謀 — 1 —

——数日後。

「サッカー部、今日は遅くまでやってるねー」

期末考査が終わった日、部活が終わって織田先輩と一緒に部室を出ると、

グラウンドではまだサッカー部が練習していた。

「期末で部活がなかったからですかねー？」

「それもあるかもだけど、試合が近いんだってイズミが言ってたからねー」

「そうなんですか」

サッカーコートに目を向けると和泉沢先輩がボールを追いかけていた。

汗だくになって。

泥だらけになって。

（試合、いつかな？ 見に行きたいな）

「ところで、鈴ちゃん」

「はい？」

「この間イズミが言ってたんだけど、あいつ中学の時もよくサッカーボールを」

「テニスコートに飛ばしてたんだって？」

「んー、確かにテニスコートの隣でサッカー部が部活してたから、

たまにボールが飛んできてましたけど、和泉沢先輩が取りに来た記憶がないんですよ」

「それはよっぽどイズミの印象が薄かったのかしら？」

織田先輩はププツと笑った。

でも、そうじゃないと思う。

和泉沢先輩の印象が薄いとかじゃなくて多分きつと私の記憶力が悪いだけ……かな。



——翌日。

部活の後、私は昨日と同じ様に織田先輩と帰っていた。

「鈴ちゃん、今週の日曜日って暇？」

すると織田先輩がサッカーコートの中にいる和泉沢先輩を見つめながら口を開いた。

「はい、空いてます」

私も同じ様に和泉沢先輩に視線を移す。

「じゃあ、日曜日サッカー部の試合があるから一緒に応援行こう？」

（えっ）

「この前、イズミがテニス部の応援に来てくれたしね。」

そのお返しで行こうと思うんだけど一人じゃ行き難くて……だから、一緒に行こ？」

「は、はい」

（そっか……この間の試合、和泉沢先輩来てくれてたって言ってたっけ）

本当はきつと織田先輩の試合の応援だったんだろうけれど、

和泉沢先輩が応援に来てくれたのには変わりはない。

今週末のサッカー部の試合だって和泉沢先輩は織田先輩に応援に来て欲しいって思ってた。

言っただろうな……。。

そう思いながら「一緒に行こう」と言ってくれた織田先輩の言葉に私は甘えてしまった。

和泉沢先輩に逢いたいから――。



——そして、日曜日。

織田先輩と一緒に試合会場のスタジアムに行くと、和泉沢先輩達が控室からコートに出てきた。

第17話 陰謀 ―2―

「イズミ、スタメンだって言ってたよ」

そう織田先輩が言ったとおり、和泉沢先輩はスタメンの輪の中にいた。

顧問兼監督の小川先生の指示を他の部員達と聞いている。

もうすぐ、キックオフ……

（和泉沢先輩、頑張って……っ！）

それから間もなくして主審のホイッスルがスタジアム全体に鳴り響き、キックオフ。

試合が始まった。

白いシャツに紺のラインと紺のパンツ。

背番号10。

私はその人を必死で目で追いかけていた。

サッカーのルールとか全然よくわからないけれど、和泉沢先輩にパスが回される度、

私はぎゅっと両手を握った。

おかげで手に持っているハンカチはもう汗が滲んでいた。

「行けーっ！ イズミ、そこ！」

隣に座っている織田先輩は私とは対照的に大声を出していた。

（私もこんな風に思いつきり応援出来たら……）

織田先輩の手前、私が和泉沢先輩の応援をする訳にはいかない。

だって、織田先輩が好きなのは和泉沢先輩だから……。

それに私の元彼・高津先輩に私が和泉沢先輩の応援をしていたのが耳に入ってしまったら

和泉沢先輩に迷惑が掛かるかもしれない。

だから、あんな風に大声で好きな人の事を応援出来る織田先輩が羨ましかった――。



ピッピッピ―ッ……―、

試合終了を告げるホイッスルが鳴り響き、フィールド上にいた選手の動きが止まった。

2
v
s
1

一点差でうちの高校が勝った。

二点のうち一点は前半に高津先輩が決め、後の一点は和泉沢先輩が後半でゴールを決めた。

フィールドにいる和泉沢先輩は相手チームに一礼をしてコートを出ると、

笑顔で小川先生と控えの選手達に駆け寄っていった。

——キュン……

きらきらして光ってさえいるその笑顔にキュンときた。

試合中の真剣な顔やゴールが決まった瞬間の笑顔や声も……全部。

でも、その笑顔が私だけに向けられることはない——。

そして、試合を見に来ていた人が帰り始めた頃――、

「鈴ちゃん、あたし知り合いがあっちにいたからちょっと話してくるね。ここで待っていてくれる？」

そう言って織田先輩が立ち上がった。

「はい」

織田先輩は小走りで通路の階段を昇るとあつという間に見えなくなった。

第17話 陰謀 — 3 —

「イズミ」

試合が終わってシゲ達と一緒に控室から出ると、織田ちゃんが外で待っていた。

「おう、ホントに応援来てくれてたんだ？」

「うん」

「二人？」

「ううん、後輩一人連れて来た。ねえ、ところで今日はみんなと一緒に帰るの？」

「いや、反省会は明日やるし、今日はもう解散」

「じゃあ、一緒に帰ろうよ」

「いいけど、おまえ、後輩はどうするんだよ？」

織田ちゃんの傍には後輩らしき子がいない。

先に帰ったのか？ と、思っていると織田ちゃんがとんでもない事を言い出した。

「イズミ、迎えに行ってきた？」

「はあっ!？」

「五番ゲートを入れてすぐの観客席にいるから」

「なんで、俺がっ？」

「あたしは高津君達と先にスタジアムの外に出てるから」

織田ちゃんはそう言うとしゲと一緒にスタスタと歩き始めた。

「おいっ、こら、ちょっと……!」

「あたしの“可愛い後輩ちゃん”が待ちくたびれて帰っちゃう前に早く迎えに行ってねー♪」

俺の声に振り返る事もせず、織田ちゃんは手をひらんひらんと振りながら見えなくなっていた。

（“可愛い後輩ちゃん”と言うなら、何故自分で迎えに行かない？）

「まったく、意味がわからん……」

俺は仕方なく五番ゲートに向かった。

五番ゲートを抜けるとすぐに一人の女の子の姿が目に入った。

髪の毛の長い、あまり背も高くなさそうな子で誰かを待っているのか観客席に一人で座っている。

（あの子かな？）

俺はゆっくりその子に近づいた。

そして後姿から徐々に横顔が見えてきて、それは小峯だと気が付い

た。

「小峯？」

「……せ、先輩っ!？」

小峯は俺の声に気付き、視線を向けるととても驚いた顔で俺を見上げた。

「こんなところで何してんだ？」

「あ、はい。えっと……織田先輩にここで待ってるように言われて……」

「織田ちゃん？」

（じゃあ、織田ちゃんが連れて来た後輩って……）

「あの……織田先輩見てませんよね？」

「いや、俺、織田ちゃんに言われておまえを迎えに来ただけどー」

「ほえ？」

小峯はキョトン顔でヘンな声を出した。

それが可笑しくて俺はつい噴き出してしまった。

（確かに“可愛い後輩ちゃん”だな）

「織田ちゃんに後輩を迎えに行ってくれて言われてさ、まさか小峯だとは思わなかった」

「そうでしたか。あの、それで織田先輩は……？」

「先にスタジアムの外で待っ……」

……RRR、RRR……

小峯に事情を説明しているとポケットの中で数回着信音が鳴った。

メールだ。

—
—
—
—

このまま高津君と帰るね。

イズミは鈴ちゃんを

連れて帰ってね♪

よろしくー（ ー ）ノ

—
—
—
—

織田ちゃんからだった。

（……ハメられた）

「……」

「先輩、どうかしました？」

「ん？ あー、なんでもない。てか、織田ちゃんからメールだった。

このまま俺達二人で帰ってさ」

「えっ！？」

「ほら、コレ」

俺はたった今来た織田ちゃんからのメールを見せた。

「つーか、この顔文字なんかムカつくなー」

……なーんて、ホントはかなり嬉しかった。

まさか小峯が応援に来てくれるとは思わなかったし、まんまと織田ちゃんの“陰謀”に

ハマられたワケだけど久しぶりに彼女と二人きりになれたんだから。

第18話 何の話? — 1 —

「おっはよ♪」

翌朝、教室に入るとやけに織田ちゃんがにやにやしていた。

「ういーす」

「昨日はお疲れー」

「あー、うん……て、コラ」

「ん? 何?」

「『何?』じゃねえだろ。なんだあの“仕込み”は」

「えー、別に仕込んでなんかないのにいー」

「嘘を吐け」

「で? 鈴ちゃんのハートにシュートは決められた?」

「はあーっ!?!」

（朝っぱらから何の話だよ?）

「まさか、あたしが回したパスをスルーしちゃったワケ？」

「だから、一体何の話だよ？」

「イズミと鈴ちゃんの話」

「まったくもって意味がわからん……」

「イズミって意外と鈍感なのねー？」

「……」

（そうなのか？ いやいやいや、違うだろっ）

「なんかさー……こんな近くにいるのに全然眼中にないみたいだし、振り向いて貰えなさそうだから諦める事にした」

「え？ 何が？」

「それに、あの子可愛いし」

「おーい、俺の声聞こえますかあ〜？」

「あの子が好きなのは別の人だって言ったりして、意地悪もしちゃったし」

「……」

もう突っ込む気にもなれなかった。

きつと今は俺が何を言っても無駄だろう。

「そろそろ受験体勢に入らなきゃいけないし、気持ちの整理をきちりつけようかなーっと思っ」

織田ちゃんはまだなんか喋っていた。

しかし、相変わらず俺には何の話か、誰の話なのかわからない。

「でもねー、二人とも周りに気を遣ってなかなか自分の気持ちを素

直に言わないんだよねー。

昨日だってあの子、ずっとハンカチを握り締めたまま見つめてただけだし」

（昨日？）

「夏休みが終わったらもう部活も引退だしねー」

（あー、そうか……てことは、テニスコートにボールを取りに行く
っていう常套手段も

使えなくなるな）

「だからその前にくっつけちゃおうと思ったのに」

「……誰を？」

「わかんない？」

「まったく」

「あ……そう」

織田ちゃんはそう言うとき軽く溜め息を吐いた。

「誰の事か言おうと思ったけど、やーめた」

「なんでっ？」

「イズミのその鈍感さ加減がもうちょっとマシになったら言う」

「あー？」

（なんだよ、それ？）

第19話 個人授業 ー 1 ー

――数日後。

今日も朝から雨、雨、雨。

昨日もずっと雨で夜になって一旦止んだけど、明け方からまた降り始めた。

おかげで二日連続で部活もなし。

(図書館にでも寄って帰るかなー)

一応、今年は受験生。

まだ夏休み前だけど、普段部活ばかりやっているから時間がある時に

少しずつ勉強しておかないと。



図書館の中はさすがにシーンと静まり返っていた。

俺と同じ様に制服を着ている人もたくさんいる。

そして勉強を始めて三十分くらい経った頃――、

……R R、R R、R R……

誰かの携帯が鳴った。

短いメールの着信音だけど物音一つしない図書館の中、耳を劈くように響いた。

（おいおい、ちゃんとマナーモードにしとけよー）

図書館の中にいる誰もが同じ事を思っているだろう。

俺は少しだけ顔を上げた。

すると、カバンの中から慌てて携帯を出している女の子がいた。

（あの子か）

足元からゆっくり顔を確認するように視線を上に向けていくと、

紺のハイソックスと紺のスカートが見えた。

上はセーラー服……て、うちの学校の制服じゃん。

しかもテニスラケットを持っている。

（ん？ テニスラケット？ まさか……）

「小峯っ」

俺は思わず声をあげた。

図書館の中にいる人達が一斉に振り返る。

(あ、やば)

「せ、先輩」

「よう」

俺と小峯は小声で話し始めた。

「小峯、携帯持っていないって言ってなかったっけ？」

彼女の手にはさっき鳴った携帯が握られていた。

「はい、そうなんですけど、昨日買って貰ったんです」

そう言うと彼女の手の中でまた着信音が鳴った。

そしてまたみんなが振り返る。

「マナーモードにしとけば？」

「はい、そうしたいんですけど……」

「？」

「やり方がわからなくてー……」

（え……）

「説明書が分厚すぎて、昨夜読んでるうちに寝ちゃったんです」

（ぶっ、可愛い）

「ちょっと貸して」

「はい」

小峯の携帯は俺と同じ携帯会社で同じメーカーの最新機種だった。

「この機種なら俺のと同じメーカーだから説明書がなくてもある程度は教えてやれるぞ」

「ホ、ホントですか？」

「ああ、とりあえず場所を変えよう」

そんな訳で俺と小峯は図書館を出る事にした――。



「さてと、じゃあまずマナーモードのやり方から」

俺と小峯は図書館のすぐ目の前にあるファーストフードに入り、並んで座った。

「はい、よろしくお願いします」

「マナーモードはここ、“#”ボタンのところ。“マナー”って書いてあるだろ？」

「あ、ホントだ」

「ここを長押し」

「はい」

小峯はさっそくマナーモードに設定し、「できたーっ」と嬉しそうに言った。

「で、普通に戻したい時はもう一回“#”を長押しすると解除されるから」

「うわあ、簡単ですねー」

「うん、基本的に操作は全部簡単だよ」

「うー、こんなので一日中悩んでたなんてー……」

「あはは、最初は誰でもそうだよ」

（二日中悩んでたのか……）

「じゃー、次は……何が知りたい？」

「えーと、メールの打ち方を教えてください。今朝からさっそくメールが来てるんですけど」

まったく知らない人からで『今日、会えませんか？』とか『私の事、覚えてますか？』とか……、

多分、誰かと間違えてるんだと思うんですけど、そういうのってやっぱり

『間違えてますよ』って返してあげた方がいいですよね？」

小峯はそう言うとメールを開いて俺に見せた。

「んー？ て、コレ……」

俺はメールの内容を見て絶句した。

第19話 個人授業 ー2ー

「スパムメールだぞ」

「え？」

「早い話が迷惑メール」

「えーっ」

「メールアドレスの設定はした？」

「いえ……それもよくわかんなくて、まだしてないです」

「じゃあ、先にメアドの設定からするか。メアドはもう決めてあるのか？」

「いえ、全然決めてないです。どんなのがいいんですかねー？」

「んー、俺は名前と生年月日の組み合わせだけど、女の子はわりと好きな俳優とか

アイドルの名前を使ってる子が多いみたいだな」

（やっぱり先輩、女の子の知り合い多いみたいだから詳しいな……）
ちょっと胸がズキンとした。

「小峯の好きな奴って誰？」

「えっ！？ あ、えーと……」

本人が目の前にいるのに言える訳がない。

「好きなアイドルとか俳優とか」

(あ、そっちな……)

「特にいいです」

「そっか。んじゃ、メアドは後でも変えられるし、

とりあえず名前と生年月日の組み合わせにしとくか」

「はい」

「小峯の誕生日いつ？」

「12月25日です」

「へー、クリスマスかー……て、もしかしてさ、小峯の名前ってー
……、

“ジングルベル”の“ベル”から取ってる？」

「わかつちやいました？」

「うん、わかつちやった♪」

和泉沢先輩はクスツと笑った。

「やっぱり笑っちゃいますよねー？」

私の名前の由来を聞いた人はだいたいは「安易だね」と笑う。

「でも、俺は可愛い名前だと思うけど？」

(……え)

だけど、先輩は「可愛い」って言うてくれた。

「名前の由来が立派でも、俺みたいに名前負けすることもあるんだし」

「先輩の名前の由来って何ですか？」

「『大地の如く、大きな人間になれ』だってさ」

「全然名前負けなんかしてないじゃないですか？」

「んー、体だけは大きくなったけどな」

「そんな事ないです。心も大きいですよっ」

私がそう言うと先輩は顔を赤くして照れたように笑った。

（先輩ってこういう顔もするんだ？）

今まで見たことない和泉沢先輩の顔にまたキュンとなった――。

「メアドも設定したし、これでスパムもまず来なくなると思うから。

じゃ、実際にメール打って送ってみるか」

和泉沢先輩はそう言うのと今度は自分の携帯を出した。

「今から赤外線通信で俺のメアド送るから」

そう言って何やらポチポチと携帯をいじった後、今度は私の携帯で

一つ一つ説明をしながら赤外線通信のやり方も教えてくれた。

「赤外線通信をすれば、一々自分の携帯番号とかメアドを口で言わなくても

正確に相手の携帯に情報を送る事が出来るんだ」

「ほええーっ、すごい、なんかハイテクですねー」

「ははは、聞いただけだとなんか小難しい感じもするけど、実際には簡単だろ？」

「はい」

「ところで、小峯の携帯番号とメアド、このまま俺の携帯に保存していい？」

「は、はい」

今日はただのレクチャーだから終わったらすぐに消しちゃうんだと思っていた。

でも、私の番号とメアドをメモリーに入れてくれたのはすごく嬉しかった。

「あ、俺の番号とかも保存しといてね」

「はいっ」

先輩の番号もてっきり後で消してくれて言われるかと思っていたのに。

私の携帯のメモリー番号“ 000 ”に和泉沢先輩の携帯番号が登録された――。

第19話 個人授業 一三一

それから和泉沢先輩は、送られてきたメールへの返信や着メロのダウンロードのやり方とか

待受画面の設定、目覚まし時計の設定、後は写メの使い方まで全部丁寧に教えてくれた。

そして気が付くと、かなりの時間が経っていて、結局いつもの帰宅時間と

変わらない時間になっていた。

「先輩、すみませんでした。こんな遅くまで、ありがとうございますました」

「もう携帯の使い方はバッチリ？」

「はい」

「じゃ、今日の宿題。家に帰って寝る前に俺にメール」

和泉沢先輩はそう言うのにやりと笑った。

ちよつとびっくりした。

「わかりました、先生っ」

まさかそんな“宿題”が出されるなんて思ってなかった。

でも、これで先輩にメールする口実ができた。



――夜。

約束通り、私は寝る前に和泉沢先輩にメールを送った。

もちろんタイトルは“先生、宿題です”。

—
—
—
—

こんばんは。

今日は本当に

ありがとうございました。

せっかくの勉強の時間を

邪魔をしてしまつて

すみませんでした。

m () m

先輩のおかげで携帯

使いこなせそうです。

おやすみなさい。

鈴

—
—
—
—

これだけのメールを打つのに三十分掛かった。

メールを打つ事に慣れていないのと、後は何をどんな風に伝えればいいのかわからなかったから。

自分でも下手クソなメールだな……. と思いつつ、これ以上遅くなる
と先輩も寝てしまおうと思い、

とりあえず送った。

すると、すぐに返事が返ってきた。

—
—
—
—

上出来！

なかなか優秀な生徒だよ。

またわからなくなったら、

いつでも聞きにおいで。

おやすみ。

D a i c h i

—
—
—
—

和泉沢先輩から返って来たメールを私はすぐにプロテクトした。

消えてしまわないように……—。



——翌日。

今日は終業式。

昨日とは打って変わって晴れた。

俗に言う“ピーカン”だ。

空を見上げると、とてもきれいな青空が広がっていた。

……チャリラリラ……

私は思わず写メを撮り、そして撮った画像を待受画面にした。

先輩の“個人授業”がなかったらきつとこんな事もまだまだ出来なかっただろう――。

第20話 暑中見舞い ー1ー

――八月、夏休みの真っ只中。

俺達サッカー部も合宿の真っ只中だ。

合宿二日目。

夜、風呂上りに食堂で冷たい麦茶を飲みながらみんなでテレビを見ていると、

俺の携帯が短く鳴った。

メールだ。

――
――
――

合宿頑張ってる？

あたし達は今朝、

合宿終わって帰ってきたよー

画像は昨夜みんなで

合宿の打ち上げを兼ねて

花火をした時のだよ

――――

“暑中お見舞い”のタイトルでメールを送ってきたのは織田ちゃんだった。

メールには画像が二枚、一緒に送られてきていた。

（花火かし、いいな）

メールに貼り付けられているURLをクリックするとキャミソール姿で

花火をしている女の子の画像が出てきた。

「……っ!?!」

俺はその画像の女の子の顔を見て思わず飲みかけていた麦茶を

目の前に座っているシゲに吹きかけそうになった。

「大地、何やってんだ？」

シゲは口から麦茶を零してワタワタしている俺を見てククツと笑った。

「い、いや……ちょっと……」

（こ、小峯？）

花火をしている女の子は小峯だった。

織田ちゃんが思いつきで写メを撮ったのかカメラ目線じゃなく、

楽しそうに他の部員たちと花火をしながら笑っている自然な感じの彼女が写っている。

そしてもう一枚の画像も小峯だった。

今度はばっちりカメラ目線で線香花火を片手にピースサインで笑っている。

（か、可愛い……）

小峯の画像に見惚れていると織田ちゃんからまたメールが届いた。

—
—
—
—

鼻の下伸びてるぞー

（＊、I、）

—
—
—
—

（こんな画像見せられて鼻の下が伸びないわけがないだろっ）

—
—
—
—

伸びてねえしー

（ ㄥ、 ）

D a i c h i

—
—
—
—

—
—
—
—

あれえー？

そうなのー？

じゃ、もう一枚とっておきの

画像あるんだけど送るの

やめようかなー？

（ 3。 ）

—
—
—
—

（なぬっ！？ とっておき？ ）

「……」

なんかまた織田ちゃんの訳のわからんペースに乗せられて結局から
かわれている様な気がするが。

そんな事はこの際どうでもいい。

“とっておきの画像”ってなんだ？

—
—
—
—

見たい？（「」）

—
—
—
—

—
—
—
—

見てやってもいいけど？

（「」）y.。○○

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

—
—
—
—

うわー えらそー

—
—
—
—

—
—
—
—

いいから早く送りなさい

（ l₁ ） y_—・。 o
○

D a i c h i

—
—
—
—

—
—
—
—

はいはい（ ㇿ ）

—
—
—
—

そんなやり取りの後、織田ちゃんがメールに貼り付けて送った来た画像は……

「っ!？」

また麦茶を吹き出しそうになった。

その画像は寝顔だった。

女子テニス部の顧問・佐藤先生の。

ソファアで五十近いおっさんが大口を開けて転寝している姿をこっそり撮ったんだろう。

(やられた……てか、おでこに“肉”って……)

期待して損した。

—
—
—
—

ね？ とっておきだった

でしょ？

(＊、p q) クスクスッ

—
—
—

—
—
—

こんなおっさんの寝顔の

どこがとっておきだよ！

、(、D、)ノ

D a i c h i

—
—
—

—
—
—

あー、ごめん、ごめん

間違えたー

ホントはこっち

――――

織田ちゃんはやっぱり俺をからかっているのか？

俺は次に送られてきたメールに貼り付けられているURLを期待半分……、

いや、それ以下、寧ろ期待する事無くクリックした。

「ぶはっ!?!」

とうとう麦茶を吹き出してしまった。

シゲの方にまで飛ばなかったものの、携帯とTシャツにかかってしまった。

「大地、おまえ、さっきから何やってんだよ？」

シゲは苦笑いしながら傍にあったティッシュをすぐに取り取ってくれた。

「あ？ う、うん……ちよつと……」

ティッシュで携帯を拭き、とりあえず閉じた。

この画像をシゲに見られるとマズい。

だって……

小峯の寝顔だったから。

Tシャツを拭いているとまた織田ちゃんからメールが来た。

――
――
――

どお？ とっておき

だったでしょ？

(o ^ _ ^) b

—
—
—
—

小峯の寝顔は子供みたいに可愛かった。

こんな画像を送られてきた日には口から麦茶どころの騒ぎじゃない。

鼻血が出そうだ。

“暑中見舞い”といって送られてきたメールは俺の心を余計に熱くした——。

第21話 玉子焼き ー1ー

――八月の半ば、サッカー部の合宿が終わった日の朝。

午前十一時半に貸し切りバスで俺達が学校に戻ると一階の調理室で

織田ちゃんが何かしているのが見えた。

「織田ちゃん、何やってんの？」

俺とシゲは窓から中を覗いて織田ちゃんに話しかけた。

「男子テニス部と共同でお昼ご飯作ってるの」

そう言って振り向いた織田ちゃんは、にぎにぎとおむすびを握っていた。

「なんでまた？」

「いつもの『お疲れ様会』」

「あー、アレか」

“アレ”というのは男子テニス部と女子テニス部は毎年、

合宿とその後にある試合が終わると一緒に打ち上げをやっている。

そういえば去年もやっていたっけ。

「今年のメニューは何？」

調理室からは炊き立てのご飯と、後は玉子焼きと出汁系のいい匂いがしていた。

「んーとね、おむすびと玉子焼きと、後メインディッシュは流し素
麺」

「ほぼ炭水化物……」

一体誰がこんなメニューを考えたのやら。

「でも、ちゃんと素麺の薬味にネギとか刻み海苔とか他にもいろいろあるんだよー？」

織田ちゃんが言ったとおり、別の調理台では他の部員達がネギや海苔を刻んでいたり、

手軽に摘めるようにキュウリやセロリ、ニンジンで野菜スティックを作っていた。

「あー、岩井君、摘み食いしちゃダメだよー」

そして、小峯の姿をそれとなく捜していると織田ちゃんの後ろから声が聞こえた。

ちょうど織田ちゃんの体に隠れていて見えなかったみたいだ。

「摘み食いじゃないよ、これは“味見”」

小峯の隣にはまたあの岩井って奴がいた。

（そうだった……あいつ、テニス部だったっけ）

なんであいつがいるんだ？　　と思い、そういえばあいつが男子テニス部だった事を思い出した。

小峯はどうやら玉子焼き担当らしい。

ひたすら玉子焼きを焼いて、それをまな板に移したところで岩井が包丁で切って皿に盛っている。

で、さっき岩井が玉子焼きを一切れ摘み食いしたのだ。

なんか……“仲良くお昼ご飯を一緒に作っている新婚カップルの図”みたいだな。

（俺も小峯の玉子焼き食いてえーっ！）

「……シゲ、行こうぜ」

「あ？ うん」

「じゃーな、織田ちゃん」

「うん、またねー」

俺は織田ちゃんに手を振り、部室棟に向かった。

「大地、なんでそんなスタスタ歩いてんだ？」

「いや、別に」

これ以上あそこにいたら、小峯と岩井がもっと仲良くしているところを見てしまいそうな気がした。

だから自然と早足になったのかもしれない。

第21話 玉子焼き 一 2 一

――二十分後。

合宿で使用したボールやアイシング用品、麦茶用の水飲みタンクやその他の荷物をバスから降ろし、

部室に運び終わると、今日はこれで解散という事になった。

「あ、いた、いたー！」

そして俺とシゲが部室を出て帰ろうとしていると、織田ちゃんが小走りでやって来た。

228

「ねえ、イズミと高津君、もうお昼ご飯食べた？」

「いや、まだ。てゆーか、今日はもう解散だから帰ろうとしてたところ」

「あ、そーなの？　じゃー……これ、いらなかなあー？」

織田ちゃんはそう言う俺とシゲの前にアルミホイルに包まれた何かを差し出した。

「お裾分けに来ただけだなー？」

「お、マジで？」

「お昼ご飯には全然足りないだろうけど」

「いや、それでも嬉しいよ。ありがとう」

「口に合うといいけど。じゃーね♪」

織田ちゃんはそう言うバイバイと手を振ってまた調理室の方へと戻って行った。

俺とシゲはおなかのすき具合もピークに達していた所為もあり、

学食で織田ちゃんから貰った“お裾分け”を食べて帰る事にした。



「っ!？」

アルミホイルの中には梅とおかかのおむすびが一つずつと玉子焼きが二切れ入っていた。

包みの大きさに多分、おむすびが二つくらい入っているんだろうなという事は

予測できたけれど、まさか玉子焼きも入っているとは思わなかった。

(この玉子焼きって……さっき小峯が作ってたやつだよな?)

「んー、うまいっ」

シゲはさっそく玉子焼きに手をつけた。

でも、俺は先におむすびから。

だって、小峯が作った玉子焼きだぞ？ 先に食べてしまうなんても
つたいない。

「大地、玉子焼き食べないのか？」

すると、既に完食しかかっているシゲが楽しみに取っておいた俺の
玉子焼きに視線を移した。

「バカ、食べるに決まってるだろっ」

俺は慌てて玉子焼きを口に放り込んだ。

(……美味しい)

正直、今まで玉子焼きは自分の母親のが一番だと思っていた。

しかし、小峯の玉子焼きは砂糖が入っている甘いやつで、でも甘すぎずちゃんと卵の味もしていて

いくらでも食べられそうな程、俺の中での『美味しい玉子焼き』
二を争う味だった。一

第22話 恋愛か友情か — 1 —

「大地さー、今、好きな子いる？」

織田ちゃんからのお裾分けを食べ終わった後、俺とシゲは駅前のファーストフードに移動した。

そして何を思ったのか、シゲがナゲットを口に放り込みながら言った。

（突然何を訊く？）

「いるんだろ？」

シゲはにやりと笑った。

「まあ……いなくもない」

「どんな子？」

「どんなつてー……」

（『おまえの元カノだよ』とは、言えないよな？）

「まあ……フツー、かな？」

一体何に対して“フツー”なんだ？

自分で言っで自分で疑問を抱いた。

「うちの学校の子？」

「うん」

「へえー、何年生？」

（一年生と答えたら、バレるかな？）

そんな事を思いつつ、素直に答えた方がいいんだろうか？

とりあえず嘘を吐いておいた方がいいんだろうか？　と考えた。

「一年生？」

「え？　うん。あ……」

しかし、シゲの質問に思わず「うん」と答えてしまった。

「ふーん」

シゲはちらりと俺の顔を見た。

「告らないのか？」

「う、うーん……」

“告りたいけど告れない”

それが現状だった。

一つはシゲの事。

多分、シゲはまだ小峯の事が好きなんだろう。

小峯と別れて以来、名前すら口に出さないが、なんとなくそんな気がする。

それでもう一つは、小峯が好きなのはあの岩井って奴だから。

更に言うと岩井も多分、小峯の事が好きなんだろう。

織田ちゃんもそんな感じの事を前に言っていたし。

それでも俺は諦めていないのはどうしてだろう……？

「好きなら告ればいいのに」

シゲはクスッと笑って言った。

でも、目がマジだ。

「なんか、いろいろごちゃごちゃ考えて結局告れないでいるって感じに見えるけど？」

「……えっ？」

「大地の事だから、誰かに遠慮しちゃって言えないでいるとかさ？」

「……」

「サッカーの試合じゃガンガンに攻めてくのに、なんで恋愛の事となるとこうも慎重になるかねえー？」

「う……」

シゲはなかなか痛いところを突く……。

「なあ、シゲ。もしもの話なんだけど……」

「うん」

「もしも、自分と自分の友達が同じ女の子を好きになったら……おまえならどうする？」

「“恋愛と友情、どっちを取るか？”って事？」

「うん」

「そーだなあー、俺なら“友情”を取るかな」

シゲは迷う事無く答えた。

（てことは、俺が小峯に告げたりなんかしたら、やっぱ怒るよなー

?)

「……と言いたところだけど、ホントは“恋愛”を取るかもしれない」

しかし、三秒後、シゲはあっさりと言い直した。

「へ？」

「例えば“俺は友情を取る！”って宣言しても、じゃあそれで本当に好きな子の事を

諦められるのか？　って言ったら必ずしもそうじゃないだろう？」

「うん、まあ……」

「そりゃ、諦められる場合もあるだろうけど……それにしたって簡単じゃないし」

「……うん」

「やっぱり諦められないかもしれない。でも、諦められないからといって誰にも

責められる事はないと思う。だって、好きなんだもん」

「……」

「だからつまりー、自分の気持ちには嘘吐けないんだから、例えラ
イバルが友達だろうと

誰だろうと遠慮しなくてもいいと思う。俺はな」

時々、俺はシゲがものすごく大人に見える。

今みたいに俺がウジウジ考えてることに對してズバツと答えに導い
てくれるような事を

言ってくれた時とか。

「んで？ 大地のライバルって友達なんだ？」

シゲは俺の顔をジッと覗き込むように見た。

「バツ、バカッ、だから“もしもの話”だって、言っただろ？」

俺は思わず慌てて目を逸らした。

「ふうん」

すると、シゲはにやにやしていた。

「大地って嘔吐く時、必ず目逸らすんだよねー」

「……え」

「自分で気付いてた？」

そしてさらに顔を覗きこんでくるシゲ。

「う……」

俺はまた目を逸らそうとしたけれど、やめた。

動揺しているのがバレそうだったから。

てゆうーか、嘘を吐いているのがバレそうだったから。

「ま、今日のところは“もしもの話”って事にしといてやるよ。これ以上追求したら、

なんかおまえが可哀想だから」

シゲはそう言うとかクツと笑った。

“可哀想って何だよ？”

そう言おうとしたけれど、やっぱりやめた。

こーゆうー時の俺はとことん弱い事を自分でも自覚しているから。

（てか……、シゲの奴、もしかして気付いてるのかな？）

第23話 監禁事件? — 1 —

——八月が終わり、あつという間に九月。

新学期が始まったこの日は普通なら始業式の後、午前中で帰れるところだけど

今日は午後もがつつりHRがある。

一ヵ月後にある学園祭の概要説明とクラスで何をやるかを決めるのだ。

体育祭の時と同じ様に男女一名ずつの実行委員を選出した後、みんなから出された意見を纏め、いくつか候補が絞られた。

ソフトクリーム、かき氷、シャーベットの冷たい食べ物系。

うどん、そば、ラーメンの温かい食べ物系。

フライドポテト、から揚げ、チキンナゲットなど揚げ物系。

フランクフルト、焼きとうもろこしの焼き物系。

焼きそば、お好み焼き、たこ焼きのソース物系。

肉まん、シュウマイとか蒸し物系。

後はポップコーン、綿菓子……など。

こうして考えてみれば結構意外と出来そうな物があるものだ。

そして多数決の結果、私達のクラスは簡単そうな肉まんをやる事になった。

しかし……

問題は“普通の肉まん屋さん”じゃないという事。

ただいろんな味を揃えてやるだけだとおもしろくないという事で、チャイナ服を着る事になった。

もちろん女子はチャイナドレスだ。

一体、何故……



そしてH Rが終わり、新学期早々日直だった私が日誌を書いていると、

同じくこの日の日直だった和田君が他の男子達と一緒に帰って行くのが見えた。

（まだ日直の仕事、全部終わってないのに―）

黒板はついさっきまでH Rで決まった内容を学園祭実行委員の二人が書き写していたから

まだ残ったままだし、黒板を消した後はクリーナーで黒板消しをきれいにしておかなくてはならない。

だけど、その後は日誌を職員室に持っていくだけでたいした仕事も残っていない。

だから私は彼を呼び止めなかった。

日誌を書き終わり、黒板も消し終わった後、クリーナーをかけ終わった黒板消しを置いて気がついた。

（あれ？　チョークがない）

白いチョークも赤いチョークもその他のカラーチョークもまともなチョークが一本もない。

全部短いチョークばかり。

チョーク入れの中を見ても教卓の中を探しても予備のチョークがなかった。

きっとみんな面倒臭がって、予備が無くなってるのに気が付いても

先生の所へ

取りに行っていないのだろう。

「先生、教室のチョークがもう無くなっちゃったんですけど」

私は日直日誌を担当の先生の所に持って行き、ついでにチョークが無くなった事を伝えた。

「あー、そうか、そういえば忘れてた。夏休み前にも言われてたんだけど、

つい物品倉庫に行くのが面倒臭くてな」

先生は既に誰かから聞いていたらしい。

（なんだ、面倒臭がってたのは先生の方だったんだ）

「もう全然なかった？」

「はい、予備も切れちゃいましたし」

「そっか……あー、でも、どうしようかなあー？　今から学年会議があるしー……」

先生はそう言うのと私の顔をちらっと見た。

とてもわかりやすい“無言の訴え”。

「……取りに行きましょうか？」

「そうしてくれる？　悪いねえー。あ、物品倉庫の鍵はあそこにあるから」

先生はまるで期待していたかのようにニッと笑い、職員室の奥にある鍵がたくさん掛かっている

ボードを指差した。

（全然、悪いと思ってない……）

だって、学年会議があったって別に取りに行くのは後でもいいわけだから。

第23話 監禁事件? — 2 —

物品倉庫は職員室から離れた一階の一番端にあった。

鍵を開けて中に入ると窓も閉めっ放しでしかも厚いカーテンが引かれていたから

ちょっと埃っぽくて真っ暗だった。

（えーと、電気、電気……）

灯りを点けようとドアの傍にあるはずのスイッチを探す。

しかし、それらしき物がない。

まさかと思い、ドアの外側、つまり廊下の方に目をやるとスイッチがあった。

（これかな？）

スイッチを入れると倉庫の中が明るくなった。

（なんで外側にスイッチが……）

灯りを点けて再び中に入ると一番手前にはコピー用紙やプリント用紙が箱ごと床に積まれていた。

その奥にはファイリング用品、封筒、便箋なんかも箱積みされている。

そしてさらに奥に行くと床から天井まである鉄製の収納棚が人一人やっと通れる位の間隔でずらりと並んでいた。

入口付近に大きな物が置いてあるのは奥にあると運び出すのが難しいからだろう。

倉庫の中は教室二部屋分程で、結構奥まで収納棚が続いていて思ったより広がった。

（チヨークはどこだろう？）

チヨークが置いてある場所を捜しながら奥へと足を進めていると、廊下からジャラジャラと

たくさんの鍵が擦れ合う様な金属音と足音が聞こえてきた。

（……………？）

金属音と足音が物品倉庫の前でピタリと止まり、不思議に思っている……

パチン——、

電気を消された。

(へ?)

「……ったく、誰だよ、電気消し忘れたの」

電気を消した人物はそう言っているとドアに鍵を掛けた。

ガチャン——、

（え？ え？ ええーっ？）

「……」

真っ暗になった倉庫の中。

私は閉じ込められてしまった。

（あ、でもっ）

教室と同じ造りなら中からも鍵が開けられるはずだ。

私はカバンの中から携帯を出してその灯りで足元を照らしながら入口まで戻った。

そして鍵を開けようとして愕然とした。

（ない……）

ドアの内側には何も付いていなかった。

鍵を開けるサムターンやバー、もちろん鍵穴も付いていない。

(嘘……っ)

それでもドアに手を掛けてみたけれど、やっぱり開くはずもなく……。

こうなれば窓から出るしかない。

私は窓に近づき、カーテンを開けた。

すると……

なんと、窓には頑丈そうな面格子が付けられていた。

(嘘でしょっ!?)

完全に閉じ込められてしまった……。

「すいませーん、誰か開けてくれませんかー？」

ドアをドンドンと叩いて助けを呼んでみるけれど、こんな端の倉庫に来る人なんてそういない。

(ど、どうしよう……?.)

第24話 行方不明 — 1 —

「悪いー、ボール取ってー……って、あれ？」

新学期初日、俺はまた性懲りもなく女子のテニスコートにサッカーボールを蹴り込んでいた。

しかし、この日もボールを拾ってくれたのは小峯じゃなかった。

……運が悪い。

サッカーボールを拾ってくれたのは俺と同じ三年で隣のクラスの青田さんだった。

「……」

ムスツとした顔で俺にボールを投げると無言でくるりと背を向けた。

「サ、サンキュー」

俺がそう言っても青田さんは無反応だった。

(うっわー、感じ悪っ)

青田さんていつもこうなんだよなー。

何を考えているのか全然わからないし、俺の事が嫌いなのか一年の時も同じクラスだったのに

まったく話し掛けてくる事もなかったし。

だから俺も彼女には話し掛けなかったけど。

(今日はついてないなー)

「鈴ちゃんじゃなくて残念だったねー？」

そして、溜め息をつきながらグラウンドに戻ろうと踵を上げると、

目の前に織田ちゃんが悪戯っぽい笑顔を浮かべながら立っていた。

「鈴ちゃんなら今日はいないわよ」

「え？ 休み？」

そう言われてみれば小峯の姿が見当たらない。

キヨロキヨロと周りを見回してみてもどこにもいなかった。

「さっき、岩井君にも訊いてみたんだけど学校には来てたって。

部活を休むにしても今まではちゃんと連絡してくれたんだけどね
ー、なんか行方不明」

「ふーん……」

それから俺はグラウンドに戻ってからも小峯の事が気になっていた。

織田ちゃんも心配そうな顔をしていたし。



部活が終わって部室棟に向かっていると女子テニス部と一緒に
なっ
た。

「織田ちゃん、小峯来た？」

「ううん、結局来なかった」

織田ちゃんの答えに俺はちょっと胸騒ぎがした。

特に根拠があるわけじゃないけれど嫌な予感がする。

そして部室で制服に着替えた後、俺はシゲに先に帰ってもらった。

小峯の携帯にかけてみるつもりだからだ。

シゲが部室を出て行った後、カバンから携帯を出すと、部活中に着信があったらしく

不在着信のアイコンが出ていた。

（ん？）

着信履歴を見ると小峯からだった。

俺はすぐに小峯の携帯に掛け直した。

『……もしもし』

数回コール音がした後、小さな声が聞こえた。

「小峯？」

『はい……』

（え？ 泣いてる？）

電話の向こうの小峯の声は震えていた。

「小峯？ どうしたんだ？」

『先輩……助けてください……』

「えっ？」



「小峯っ！」

電話を切った後、俺はすぐに職員室に行って予備の鍵で物品倉庫のドアを先生に開けてもらった。

すると小峯は床に座り込んで泣いていた。

「先輩……っ」

小峯は俺の顔を見た途端、安心したのか子供みたいに泣き出した。

（よっぽど怖かったんだろうな……）

いきなりこんな真っ暗な所に長時間閉じ込められ、助けを呼んでも来ないし、

かと言って出るに出られず、すごく不安だったのだろう。

俺と一緒に助けに来た先生曰く、警備員のおっさんが見回りに来た際、

物品倉庫の電気を誰かが消し忘れたんだと思って、ろくに確認もしないで鍵を閉めてしまい、

それで小峯が閉じ込められたんだろうという事だった。

実は以前にもその警備員のおっさんは同じ様な事をやらかしたらしい。

「もう大丈夫だから」

俺があやす様に小峯の背中を擦りながら抱きしめると、ようやく少しだけ落ち着いてコクンと頷いた。

第25話 一番 11

「先輩、すみませんでした」

小峯が泣き止んで、二人で少しゆっくり歩きながら駅に向かっていく途中、

彼女が申し訳なさそうに言った。

携帯を買って貰ったのが夏休み直前だったから、友達ともまだ番号を交換していなくて

携帯のメモリーには俺の番号しか入っていなかったらしい。

部活中なのはわかっていたけれど、もうどうにもできないと思い、

それで一度だけ掛けたのだとか。

もし……

もしも、小峯の携帯の中に俺以外の番号が入っていたら……どうしていただろうか？

俺に助けを求めないで他の奴に助けを求めたのかな？

例えば岩井とか、大橋とか。

それにシゲとは短期間だけど付き合っていたし、あいつの携帯の番号も知っているはずだ。

今はもう別れてしまったからメモリーには入れていなかったんだろうけれど、

もし、シゲの携帯番号がメモリーに入っていたら……？

シゲに助けを求めたのかな？

「ご迷惑をお掛けして、すみませんでした……」

「別に迷惑だなんて全然思っていないよ」

「でも……」

「なあ、小峯」

「は、はい」

「これから先、おまえの携帯のメモリーの中にどんなに番号が増え
ても俺を一番に呼んで？」

ずっと、一番でいたい」

「……はい」

俺の言葉に彼女は意外にもあっさり「はい」と答えた。

（……て、わかってんのかなあー？）

「あの、さ……どーゆー意味かちゃんとわかって返事してる？」

「え？」

小峯は、キョートンとしていた。

（あー、この顔、絶対意味わかってねえー）

「小峯の中でずっと“一番でいたい”って事」

「……？」

彼女はますます理解不能と言った顔になった。

（遠回しに言い過ぎたかな？）

「つ、つまりー……おまえの事が好きだから……その……いつも、俺を一番に

考えて欲しいって事だったんだけど……」

「……っ!？」

「俺の“彼女”になってくれない、かな？」

「は、はい」

彼女の答えに今度は俺が驚いた。

「え……マジで？」

「……冗談、なんですか？」

「い、いやっ、もちろん、本気だよっ」

（あ、でも、待てよ……）

「もしかして……ホントは嫌だけど、また断れずにいるって事はない、よな？」

「ち、違いますっ。そんなんじゃないありませんっ」

小峯は俺が顔を覗き込むと慌てて首をブンブンと横に振って否定し

た。

「ホントに？」

「本当です」

小峯は真剣な顔で俺を見上げていた。

（信じてもいいんだよね？）

「でも……先輩が好きなのは……」

だけど、次の瞬間、小峯が不安そうな顔で言った。

「織田先輩じゃないんですか？」

（は？ 何を根拠に？）

「織田先輩も、和泉沢先輩の事、好きみたいですし……」

（え？）

「織田ちゃんがそう言った？」

「い、いえっ、ただ、そんな気がただけで……」

（だよな？）

俺は一言も“織田ちゃんの事が好き”だとは言った覚えはないし、
織田ちゃんもそんな事言ってなかったし。

「てか、そういう小峯の方こそ岩井の事が好きなんじゃないのか？」

「え？　　どうしてですか？」

「どうしてって……そんな気がしてたから」

「私が好きなのは……和泉沢先輩です」

しばらくの沈黙の後、思い切ったように彼女が言った。

「……っ!？」

今まで小峯はてっきり岩井の事が好きなんだと思っていた俺は驚きの余り、言葉を失った。

そして彼女もそれ以上、何も言わなかった。

「あの、もしかして、さ……シゲと別れた時に『好きな人がいる』って言ったのって……」

俺? という風に自分を指差すと小峯は小さく頷いた。

「そっか……」

それでもずっと自分の想いを心の中に閉じ込めてきたのは俺とシゲが親友だからだろう。

第26話 決着 ー1ー

「シゲ……ごめんっ！」

翌日の昼休憩。

俺はシゲを屋上に呼び出した。

「んあ？　なんだよ？　突然」

なんの前触れもなく、とりあえず謝った俺にシゲは怪訝な顔をした。

「実は……小峯と、付き合う事になった」

「……」

無言になるシゲ。

（やっぱ、そりゃ怒るよな？）

「大地」

いつもより低い声。

俺は殴られるのを覚悟した。

「……やっとかつついたのかよ」

するとシゲは呆れたような口調で意外な台詞を口にした。

「へ？」

「おまえが鈴の事、好きなのくらいとっくにお見通しだ、バカッ」

（ええっ!?!）

「もっと言うと鈴の好きな奴がおまえだっていうのもとっくに気付いてた」

「な、なんでだっ？」

「鈴から他に好きな奴がいるって言われて、しかも俺も知ってる奴だって聞いた時、

なんかピンと来た。まあ、これでも一応“元カレ”だからな。

俺以外の男と喋ってる時の鈴の目を見ればわかる」

「マジで？」

「でも、態と黙ってた。フラれたばっかなのにすぐに親友とくっつくトコなんて

見たくなかったからな。だから、ちょっとだけ意地悪して黙ってた」

シゲはそう言うと言意地悪そうな顔をしてニヤツと笑った。

「だけど黙ってたなら黙ってたで、俺に遠慮してんのかなかなかくっ

つかねえし……、

傍から見ててすんげえイライラしたぞ?」

「う……」

やっぱり、シゲは気づいていた。

「あげく“もしもの話”とかするしー」

「あうっ」

「全然“もしもの話”にもなってなかったけど」

「もう、言うな……」

「しかも織田ちゃんからのパスも全部おまえスルーしてたし」

「え、織田ちゃんもグルだったのか!？」

「ああ」

ガン……

(んな、アホな……)

「つか、まったく気が付いてなかったって、おまえはどんだけ鈍いんだよ？」

力が抜け、愕然としている様子の俺にシゲはプツと吹き出した。

そして「鈴の事、泣かせたりしたらシバくからな？」と真顔で言った。

「お、おうっ」

しかし、シゲはまたすぐにいつもの顔に戻っていた。

「んで？ 一体、何きっかけで告ったんだ？」

「い、言わねえ」

「このー、もったいぶらずに教えろよー」

そう言うときシゲは俺の脇腹を擦り始めた。

「わー、やめれ、バカーッ」

「バカ？」

「い、いや、バカじゃないです、すいません」

「じゃあ、喋れ」

「嫌じゃ、ボケ」

「ボケ？」

「あ、ごめん、ウソ」

……で、結局その後全部喋らされたのは言うまでもない。

第27話 変化 ー1ー

部活が終わった後、私はまた部室棟の前で待ち合わせをするようになった。

でも、その相手は高津先輩から和泉沢先輩に変わった。

「鈴」

そして、和泉沢先輩が私を呼ぶ時も“小峯”から“鈴”に変わった。

“ただの先輩”から“彼氏”に変わったから。

私は相変わらず“先輩”と呼んでいるけれど。

「待った？」

「いえ、私もさっき来たばかりです」

「そか」

和泉沢先輩はそう言うのと私の手を軽く握った。

私はその手を握り返すと先輩もまた優しく握り返してきた。

すごくドキドキしていた。

……というか、ボーツとしていた。

「そういえば、鈴、昼休憩に俺の教室に来たんだった？」

「えっ？ あ、はい」

だから先輩にそう訊かれてちょっと慌てた。

「昨日は結局、無断で部活を休んじゃったから……」

「あー、それで織田ちゃんのところ？」

「はい」

「なーんだ、俺に逢いに来てくれたんじゃないのかー」

「逢いたかったですけど、先輩居なかったじゃないですかー」

「……あ」

「どこ行ってたんですか？」

「……シゲントコ」

（え……）

「一応、俺達の事、ちゃんと話しておいた方がいいと思って」

「……何か、言われました？」

「シバくって言われた」

「えっ!？」

(そ、それって……)

「先輩、どこか殴られたんですか？ 大丈夫ですか？」

先輩の顔には殴られた様な痕はないけれど、どこか他のところを殴られたのかもしれないと思った。

「大丈夫、大丈夫」

そう言って先輩は笑っているけれど……、

「で、でも……」

「『鈴の事、泣かせたりしたらシバく』って言われたただけだから、殴られてはないよ」

「へ……?」

「びっくりした?」

和泉沢先輩は悪戯っぽい目で私の顔を覗き込んだ。

「もおっつ、先輩の意地悪っ」

（本気で心配したのにー）

「あはは、ごめん、ごめん」

私が怒ったように言うのと泉沢先輩はケラケラと笑いながら私の頭をポンポンと撫でた。

「逆にシゲは応援してくれてた。鈴に『他に好きな人がいる』って言われた時も、

それが俺の事だってわかってたんだって」

（そっか……、だから高津先輩、あの時……）

“鈴がそいつの事、好きなら仕方ない……これからは陰ながら応援するよ”

高津先輩と別れたあの日、泣きながら謝るだけしか出来なかった私にそう言ってくれた。

その時は、ただすんなり別れられる様に言ってくれただけだと思っていた。

でも、高津先輩は本当に私の事も泉沢先輩の事も応援してくれ

たんだ――。

第28話 ファーストキス ー1ー

鈴は俺にからかわれて、ちょっとだけ怒ったように上目遣いで見上げていたけれど、

シゲの事を話すと何かを思い出している様だった。

それがいつの事なのかわからないけれど、そんな鈴の表情を見ると思わず抱きしめたくなった。

「鈴……」

（シゲとの事、思い出すなよ……）

なんとなくシゲと付き合っている時の事を思い出しているんじゃないかなと思って思った。

頭を優しく撫でると初めて触れた彼女の髪は俺が思っていたよりも柔らかかった。

以前の俺なら、こんな風に髪に触れる事も出来なかった。

けれど、お互いの気持ちを確認合って付き合うようになった今、抱きしめてキスをする事だって……

「せ、先輩……？」

頭を撫でていた右手を肩に回して抱くと鈴は驚いた顔で視線を絡ませた。

そして、キスをしようと俺が顔を近づけると彼女がちょっとだけ顔を背けた。

（え……？ 嫌がってる？）

「あ……ご、ごめんなさいっ、つい……」

「……っいっ」

「じよ、条件反射で……」

「……」

（そういえば、鈴って結構反射神経良かったんだっけ？）

「……ごめんなさい」

「嫌？」

「そんな事ないですっ、ただ、ちょっとびっくりしちゃってそれで
思わず……」

「じゃ、目瞑って？」

「？」

「瞑ってたら、条件反射しないだろう？」

「はい」

鈴はそう返事をするとうつくりと目を閉じた――。

鈴と二度目のキス。

でも、今回は前回のような事故的なものじゃない。

「……」

唇を離すと鈴が恥ずかしそうに目を伏せた。

「あのさ……鈴」

「はい」

「ファーストキスっていつ？」

「えっ？」

「いや……なんか気になったから」

「三ヶ月前、です」

「それって、今年の六月って事？」

「はい」

「……もしかして、シゲ？」

俺が知らないだけで実はシゲとはとつくにキスをしていたのかと思った。

しかし、鈴は首を横に振った。

「え……じゃ、誰？」

「え、と……先輩、です」

恥ずかしそうに一瞬だけ横目で俺に視線を移す。

「へ？」

（俺っ！？）

「まさか、体育祭の前の日、テントが風で煽られて倒れた時の？」

「……はい」

「てか、あれを“初めて”にしちゃダメだろ」

「え」

「ちなみにー……なんだけどさ……」

「はい？」

「シゲとはキス、した？」

「いえ、してませんっ」

「そか。て事はさっきのキスが“初めて”か。まあ、それなら、ど
つちにしろ相手が俺だからいいけど。」

「いや、よくねえな。やっぱ、さっきのが“初めて”」

俺がそう言っていると鈴は嬉しそうに頷いた。

第29話 お兄さんと中国少女 ― 1 ―

「ところで、鈴のクラスは模擬店何やんの？」

「『肉まん屋さん』です」

「へー、普通だな」

最近はメイド喫茶だのなんだのと流行っているから、

てっきり鈴のクラスもその類の事をやるんだと思っていた。

実際、俺達のクラスは“そっち系”だし。

だから『肉まん屋さん』と聞いた時はちょっとホッとした。

「でも、衣装が……」

しかし、鈴は顔を引き攣らせていた。

「制服じゃないのか？」

「はい」

「何着るの？」

「チャイナドレスです」

「えっ!？」

（それはラッキー♪）

驚いたけど、正直ちょっと、いや、かなり嬉しかった。

だってこんな企画でもない限り、鈴のチャイナドレス姿なんてそう見る機会なんてない。

他の奴らにも拝ませる事になるけれど、それはまあこの際我慢しよう。

（提案した奴、Good Job!）

「先輩のクラスは何やるんですか？」

「俺らンところは『お兄、お姉喫茶』」

「何ですか？ それ」

「まあ、よーするにメイド喫茶の“お兄さん、お姉さん版”、男子はお兄さんキャラ、

女子はお姉さんキャラをやるわけ。しかも、ちゃんと“ツンデレ”とか

“ひたすらクール”とか“萌え系”とかキャラ設定まであるんだ」

「ほえー、先輩はどんなキャラなんですか？」

「俺は“フツーのお兄さん”、ツンデレとかクールは無理だからな

」

「よかったー、先輩のクラスに遊びに行った時、いきなりクールなキャラだったら

どうしようかと思いました」

鈴はそう言くと、あははっと笑った。



――学園祭初日。

鈴のクラスの模擬店『肉まん買っチャイナ』には開店早々行列が出来ていた。

「つか、『肉まん買っチャイナ』って……」

「ある意味すごいネーミングだな」

「まあ……いいんじゃない？」

そして俺とシゲ、織田ちゃんの三人もその行列の中にいた。

鈴のチャイナドレス姿を拝みに来たのだ。

「いらっしやいま……先輩っ!？」

俺達がイトインコーナーに座ると一人の女の子がオーダーを取りに来た。

「あー、鈴ちゃん」

「「……え？」」

織田ちゃんがその女の子を“鈴ちゃん”と呼んだのを聞いた俺とシゲは顔を見合わせた後、

改めて女の子の顔を見た。

（鈴？）

目の前に立っている女の子は、両サイドの髪を少し残して左右それぞれおだんごにした

可愛い中国っぽい髪型に赤いミニのチャイナドレスを着ていた。

しかも衣装に合わせてメイクもしている。

（か、可愛い……）

いつもと全然違う鈴の姿に俺もシゲもすぐに彼女だとはわからなかった。

第29話 お兄さんと中国少女 ― 2 ―

「鈴ちゃん、可愛いっ♪」

鈴に見惚れてボーツとしている俺とシゲを他所に織田ちゃんはさっそく

携帯のカメラで撮っていた。

チャリラリラーン……、シャコーン、チャラーン……

しかし、よく聞いているといろんなシャッター音がしている。

「げっ」

周りを見回すと他の客も鈴を撮っていたのだ。

「え、と……ご注文、は？」

その事に気がついた鈴は顔を真っ赤にして俯きながら言った。

「あたし、肉まんとおんまんその後、ウーロン茶」

「え、肉まんとおんまんて……どんな組み合わせ？」

シゲはすかさず織田ちゃんに突っ込みを入れた。

「肉まんはフツーにご飯であんまんは食後のデザート♪」

にんまり笑って答える織田ちゃん。

しかし、時間はまだ十一時にもなっていない。

……昼飯にしては早過ぎるだろ。

「イズミと高津君は？」

「んー、俺は豚角煮まんとかレーまんとかウーロン茶」

「俺は海鮮まんとかピザまんとかウーロン茶」

そして俺とシゲもなんだかんだと言って半分昼飯のようなオーダーをした。

「お待たせしましたー」

数分後、鈴がオーダーした物を持って来てくれた。

「すいませーん、オーダーお願いしまーす」

しかし、すぐさま別のテーブルに呼ばれた。

（てか、鈴以外にも手が空いてる奴がいるのに……）

鈴を呼んだ客は俺達と同一年くらいの男二人だった。

私服を着ているという事は別の高校の奴らだろう。

鈴は今、一応“店員”だから仕方がないと思いつつ、他の男と話しているのを見るのは

やはりあまり気分がいいものではない。

「ウーロン茶二つと肉まん二つ。後、一緒に写メいいかな？」

しかも、その男共はどさくさに紛れて鈴と一緒に並んで写メまで撮ろうとしている。

「え……あ、あの……」

鈴は相変わらず“嫌”だとは言えないでただ俯いた。

「おい、大地、いいのか？」

シゲは少し心配そうに言った後、鈴に視線を向けた。

「良いも悪いも……」

店内には“撮影禁止”なんて書かれていないし、さっきもバシバシ写メを撮ってた奴らもいたし。

てか、写メを撮りまくっていた内の一人が俺の目の前に座っているけど。

第29話 お兄さんと中国少女 ― 3 ―

そうして、俺達が固唾を吞んで見ていると鈴が意外な言葉を口にした。

「ごめんなさい……写真は、ちょっと……」

(え……)

「ダメなの？」

しかし、それでも食い下がる男二人。

「ごめんなさい。他に待ってるお客様もいらっしゃるので……えっと、

ご注文はウーロン茶二つと肉まん二つですね？」

鈴はそう言うと、そそくさと模擬店の裏側へと消えて行った。

男二人は怪訝な顔でその後姿を見つめていた。

「鈴、ちゃんと“嫌”って言えるようになったんだな」

「うん、ちょっとびっくり」

シゲと織田ちゃんはそう言っているけれど一番びっくりしているのは他の誰でもないこの俺だった。

以前、変なキャッチセールスから助けた時も「今度から、ちゃんと興味ありません」って

言うんだぞ？」って言っても彼女はなんとなく自信なさそうに「はい」と答えただけだった。

だからその後、一応念の為、逃げる手段も教えておいた。

誰かが居なきゃ……というより、“俺が居なきゃ”断れないかな？なんて思っていたけれど、

鈴は俺が助けに入る前に自分で断った。

鈴がちゃんと“嫌”だと言えるようになった事が嬉しい反面、

“案外、俺が居なくても大丈夫なのかも……？”と思うと、ちょっと複雑な気分だった。



「おっ、鈴、おかえりっ♪」

午後一時、鈴が俺達の模擬店にやって来た。

「おかえり……？」

てっきり俺が『いらっしやいませ』と言うのかと思っていたらしく、鈴は不思議そうな顔をした。

「何、頭の上にクエスチョンマークをいっぱい出してんだよね？」

「な、なんで『おかえり』なんですか？」

「ここは『お兄、お姉喫茶』だから、店の中は“鈴の家”って設定なんだよ。」

そういうワケで鈴は俺の“妹”って事になるから『おかえり』って言ったんだよ」

「は、はあ……」

「ところで、もう一人の“妹”はなんて言う名前？」

鈴は二人で来ていた。

ついさっきも見た記憶がある。

「同じクラスの新井朋美ちゃんです」

鈴にそう言われて思い出した。

二人とも制服に着替えているからよくわからなかったけれど、そういえばさっき鈴と一緒に

『肉まん買っチャイナ』にいたっけ？

「おかえり、朋美」

俺がそう言っていると新井はにこっと笑って「ただいま」と言った。

そして鈴に、まだ『ただいま』って言ってないだろ？ という顔を向けると、

「た、ただいま」

少し遠慮がちに言った。

「あのー……先輩、実はお願いがあるんですけどー……」

鈴はテーブルに着くなり、俺の顔をじっと見ながら口を開いた。

「ん？ 何？」

（なんだろう？ 改まって）

「サッカー部に宮田晃司さんていますよね？」

「ああ、いるけど？」

宮田晃司は二年生のサッカー部員で後輩だ。

「宮田がどうかした？」

「紹介してほしいんですけど……」

「……え？」

俺は自分の耳を疑った。

（今、『紹介しろ』って言った？）

「な、なんで……？」

「なんでってー……えーと、そのー……」

鈴は言い渋るように俯いた。

「紹介してほしいのは、あたしなんです」

すると、鈴の隣に座っていた新井が口を開いた。

「実は、体育祭で初めて宮田先輩を見かけてからずっと気になって……、

それでようやく最近になって名前とサッカー部だっという事がわかったんです。

でも、いきなり話しかけるのもどうかと思って……」

（あー、なるほど。それで俺に紹介しろって言ったのか）

第29話 お兄さんと中国少女 ―4―

「ういっす」

五分後、『お兄、お姉喫茶』に宮田先輩が入って来た。

つい先程、和泉沢先輩が携帯で「お客が少ないから来て」と呼び出したのだ。

「おかえり、晃司」

和泉沢先輩はそう言ってにっこり笑うと、朋ちゃんの隣に宮田先輩を座らせた。

最初は私が朋ちゃんの隣に座っていたのだけれど、宮田先輩が来る前に

私は和泉沢先輩の隣に移動したのだ。

「ども」

朋ちゃんは宮田先輩が隣に座ると顔を赤くしながら会釈した。

「……」

そして宮田先輩も黙ったままだったけれど、朋ちゃんに視線を向けながら軽く会釈をした。

「晃司、鈴の事は知ってるよな？」

「はい、先輩の彼女ですよね？」

宮田先輩とは、何度か和泉沢先輩と一緒に帰っているところを目撃されている。

だから私の事はなんとなく知っていたのだろう。

「そそ、んで、今おまえの隣にるのが鈴のクラスメイトで新井朋美ちゃん。

ちょうど今、来てくれたところなんだよ」

和泉沢先輩はさり気なく朋ちゃんを紹介した。

「よろしく」

「よ、よろしくお願いします」

宮田先輩と朋ちゃんはお互いそう言っていると自然に話し始めた。

「あの二人、結構気が合うみたいだな」

私の耳元に和泉沢先輩が囁いた。

朋ちゃんは明るい性格。

一方、宮田先輩は無口ではないけれど、わりと大人しい方。

だから最初は大丈夫かな？ と、思っていたけれど……、

「そうですね」

朋ちゃんと宮田先輩は、ほぼ朋ちゃんがリードする形ではあるけれど楽しそうに会話していた。

「ところで、織田先輩はどこにいますか？ 先輩と一緒に時間帯に模擬店にいらって

聞いてたんですけど」

「あー、織田ちゃんなら、ホラ、あそこ」

「……え……?」

和泉沢先輩が指差した先には確かに織田先輩がいた。

いたけれど……

「な、なんで織田先輩あんな格好してるんですか?」

「織田ちゃんは“萌えキャラ”っていう設定だから」

「はぁ……」

私の視界の中にはフリフリのメイド服を着て、髪もツインテールに

してリボンを着けた

織田先輩が映っていた。

中学生くらいの男の子二人を相手にニコニコしながら「はい、あゝん♪」と、

オムライスを食べさせてあげている。

「なんかノリノリでやってますけど……」

「うん、織田ちゃん、この日の為に秋葉のメイド喫茶に行って研究してきたらしいよ？」

しかも、オムライスの上にケチャップでハートを描くのも家で練習したって言ってたし」

「す、すごいですね」

意外に織田先輩は完璧主義なのかもしれない……。――。

第30話 ご褒美 ー1ー

「宮田先輩、よかったらこれから一緒に模擬店回りませんか？」

「うん、いいよ」

それからしばらくして、朋ちゃんと宮田先輩は一緒に『お兄、お姉喫茶』を出て行った。

そして、ちょうど和泉沢先輩も“普通のお兄さん”キャラが終わる時間だった。

「鈴、俺、着替えてくるからちょっと外で待ってて？」

「はい」

和泉沢先輩は“普通のお兄さん”キャラをやっている間は私服を着ていた。

初めて見る先輩の私服……

和泉沢先輩と付き合い始めてから先週まで休日はずっとテニス部の試合があったり、

サッカー部の試合があったりですれ違いばかりだった。

だから『お兄、お姉喫茶』に入って私服姿の和泉沢先輩の姿を目にした時、

すっごくキュンときた。

「ねえ、君」

私が和泉沢先輩を待っていると不意に頭上から声が聞こえた。

「？」

（あ……）

顔を上げてみると、目の前に『肉まん買っちゃイナ』で私に写真を撮らせて欲しいと言った

二人組みの男子が立っていた。

「君、さっき肉まん売ってる模擬店にいた子だよね？」

「二人？　てか、制服着てるってコトは今は模擬店関係ないんだよね？」

「……はい」

「じゃあさ、今度こそ一緒に写真撮ってよ？」

（え……）

さっきはなんとか『他のお客様もいるから』と逃げる事が出来た。

その後も結局、私と一緒に入っていた岩井君がこの人達のオーダーを持って行ってくれたから

捕まらずに済んだけれど……

（なんて言って逃げようか？）

「今は模擬店とか関係ないんじゃないだろう？」

「……」

そして、二人が携帯を取り出したその時、

「鈴」

和泉沢先輩が模擬店から出てきた。

「先輩っ」

私は思わず先輩に駆け寄った。

「どうした？」

和泉沢先輩は不思議そうな顔をしていた。

でも、すぐに私の手を握ってくれた。

（よかった……先輩が来てくれた……）

「行こうか」

優しい瞳で私の顔を覗き込む先輩。

「はい」

私は首を縦に振った。

「もしかして、さっきの……鈴の模擬店で写真撮らせてくれて言
ってた奴ら？」

『お兄、お姉喫茶』から離れて校庭に出た頃、和泉沢先輩が徐に口
を開いた。

「……はい」

（先輩、気付いてたんだ？）

「また何か言われてたのか？」

「はい……『一緒に写メ撮らせて』って」

「でも、ちゃんと断ったんだろ？」

「……」

「え……もしかして、一緒に写メ撮ったのか？」

「い、いえっ、先輩が来てくれたから」

「.？」

「私……何も言えなくて、でも、先輩が来てくれたから……」

「でも、肉まん屋で声掛けられてた時はちゃんと断ってたじゃん？」

「それは……先輩が傍に居てくれたからです」

私がそう言うと、先輩はちょっと意外そうな顔をした。

「あの時は先輩が傍にいたから勇気が持てたっていうか……その……」

思い切って言えたんです」

「……そっか」

「先輩が居てくれなかったら、私……」

「でも、鈴はちゃんと自分から断ってただろ？ だから……」

先輩はそう言うのとピタリと足を止めて私の肩に手を置いた。

(……?)

「ご褒美♪」

そして少し強く肩を引き寄せた後、チュッと小さく音を立ててキスをしてくれた。

「っ!？」

かなりびっくりした。

私が放心状態でボーッとしていると、先輩は「ずっと傍にいるから……たとえば、

俺が鈴の傍にいらなくても、心はずっと鈴と一緒に、傍にいるよ」と言
って、

優しく頭を撫でてくれた――。

第30話 ご褒美 ―2―

――学園祭から数日後、

「鈴、今週末も試合あるの？」

部活が終わって和泉沢先輩と帰っている時、そう訊かれた。

「いえ、今週はないです。先輩は？」

「俺等は最後の試合があるかなー」

「それってー……引退試合って事ですか？」

「うん」

とうとう、この日が来てしまった。

引退試合が終わったら先輩達三年生の部員は受験体勢に入るから部活には出なくなってしまおう。

そして、それは私と先輩がこうして一緒に帰る事も出来なくなる事を意味していた。

「……じゃあ、応援に行きますね」

それでも私はなるべく平気な顔をした。

「うん」

（先輩は平気なのかな？）

普通に返事をした先輩の横顔をちらっと見てみた。

「ん？」

その視線に気がついた先輩はどうしたんだ？　という顔を私に向けた。

「あ……えと、試合、どこであるんですか？」

私は慌ててなんでもない顔を作った。

「この間、織田ちゃんと一緒に応援に来てくれた時と同じスタジアムだよ。」

それでさー……鈴にお願いがあるんだけど……」

「？」

（お願い？）

「今度の試合に勝って、もし、俺等がベスト8以内に入れたらさ、ご褒美欲しいな？」

なーんて……」

「……へ？」

（ご褒美？）

「鈴が作ったお弁当食べたいな♪」

先輩の“おねだり”は意外な物だった。

“ご褒美”と言うからには何かもつと大そうな事を言うのかと思っていた。

しかし、問題が一つだけある。

「え……で、でも私、お弁当なんて作った事ないですよ……？」

私はお弁当を作ったことがない。

別に料理が出来ないわけじゃないけれど、いざ“お弁当”となると、
どんなおかずを詰めればいいのか浮かばない。

「あ、中身は玉子焼きさえ入ってれば他は何でもいいから♪」

先輩はそう言うとニッと笑った。

どうやら玉子焼きが好きらしい。

「わかりました。じゃあ、頑張って作りますっ」

「やった♪」

先輩は子供みたいに喜んで小さくガッツポーズをした。

(……可愛い)

「何？　なんで笑ってんの？」

思わず吹き出した私に先輩が不思議そうに言った。

「なんでもないですー」

「えー、そんなワケないだろ？」

「あははっ」

「ホラ、まだ笑ってるしー、言えー、何で笑ってんだー？」

「ホントになんでもないですってばー」

その後、先輩は駅に着くまでずっと私に絡みながら訊いていたのは言うまでもない――。

第31話 夢と現実 — 1 —

「先輩っ、おめでとうございます！」

突然、鈴がそう言いながら抱きついてきた。

「えっ！？ す、鈴……っ？」

「よかったですねー、優勝♪」

「……へ？」

（“優勝”？）

「優勝ってー……、何が？」

（俺は何に優勝したんだろうか？）

「もうー、先輩ったらー……昨日のサッカーの試合ですよー」

今一状況がわかっていない俺に鈴が呆れた顔で言った。

「という訳で、約束のお弁当です」

そして俺の目の前に弁当箱を差し出した。

（昨日のサッカーの試合ってー……あ、そうかって……俺達、優勝したんだ。

えっ？ てことはー……この弁当は……）

それはこの間、“もしも、ベスト8以内に入ったらご褒美ちょうだい”と、

俺が鈴におねだりした弁当だった。

「ありがとうっ、鈴♪」

「先輩の好きな玉子焼き、いっぱい入れちゃいました」

弁当を受け取ると鈴はにっこり笑った。

（あれ？ 俺、鈴に玉子焼きが好きだなんて言っただけ？

……ま、いっか）

「うっわぁー、うまそー♪」

弁当箱のフタを開けると、中身は俺の好きなおかずばかりだった。

玉子焼き、唐揚げ、ウインナー、ポテトサラダ、後はプチトマト。

窮めつけはごはん。

何が窮めつけて……

白いご飯の上に海苔で“LOVE”、そしてさらに明太子でハートまで描かれていた。

想像以上、予想以上、期待以上の弁当だ。

「はい、あ〜ん♪」

鈴は俺の隣に座って玉子焼きを箸で摘んだ。

そして、俺が口を開けると……

……ペシッ——、

誰かに頭を叩かれた。

(……っ?)

ゆっくりと顔を上げると誰かが俺の目の前に立っていた。

(あれ? 紺のスーツ?)

目の前に立っている人物を確認しようとさらに顔を上げると、数学の三ツ矢先生だった。

（げっ）

「こら、寝るな」

三ツ矢先生はそう言いながら腰に手を当てた。

「……すいません」

（なんだ……夢か……）

なんかおかしいと思ったんだよねー？

「はぁー……」

溜め息を吐いて頬杖をつくと、隣からクスクス笑い声が聞こえた。

織田ちゃんだ。

顔を向けて確認はしていないけれど、きっとそうだろう。



「ぬお……っ」

昼休憩、弁当のフタを開けてがっかりした。

夢の中の鈴の弁当とはえらい違いだったから。

(……ピーマン)

しかも俺の嫌いなピーマンが入っている。

さらに他のおかずは全て昨日の夕飯の残り物ばかりだった。

当然、ご飯だって海苔や明太子が乗っているはずもなく……。

（鈴の弁当はまるで夢のようなおかずだったのに……）

本当に夢だったけれど……。

（くっそーっ、こうなりや、意地でも頑張ってベスト8に入ってるっ）

そうすれば今度は夢じゃなくて本当に鈴の弁当が食べられる。

俺は真っ先にピーマンを口に入れ、急いでお茶で流し込んだ。



——その日の放課後。

部活が終わって部室棟の前に行くと、鈴が携帯を見ながらクスクス笑っていた。

「何笑ってんだ？」

「わっ!？」

俺が声を掛けると鈴はメチャメチャ驚いていた。

「な、何でもないですー」

鈴はそう言ったけれど、なんか様子が変わった。

「鈴、正直に言いなさい」

「……」

「鈴ちゃん？」

「……は、はい？」

「その携帯、俺に見せて？」

「え……」

鈴の反応で何か“良からぬ物”が写っているんだと確信した。

そして少しの間、黙ったままで俺の顔を見上げていたかと思うと

「織田先輩の事、怒らないで下さいね？」と言った。

「？」

俺はそれがどういう意味なのか、さっぱりわからなかった。

しかし、その意味は数秒後、すぐにわかった。

「っ、これ……っ！？」

鈴の携帯の画面に映っている画像に思わず目を疑った。

「さっき、織田先輩が送ってくれたんです」

「……織田ちゃんが？」

鈴の携帯の画面に映っていたのは、俺の寝顔だった。

おそらく今日の数学の授業に寝ていた時のだ。

角度的に言っても織田ちゃんの席から撮ったものに間違いない。

織田ちゃんめー、いつの間に……――。

第32話 サイン ー1ー

そして、試合当日――。

スタジアムの控室に入り、ユニフォームに着替えるとバッグの中でメールの着信音が鳴った。

――
――
――

大地様

鈴様よりメッセージカードを

お預かりしております。

下記URLへアクセスして下さい。

――
――
――

「ん？」

携帯を出してメールを開いてみると、グリーティングメールサーバーからだった。

（鈴からメッセージ？）

さっそくメールの中のURLにアクセス。

するとチアガールの格好をした女の子が「フレーツ！ フレーツ！ 頑張って♪」と

応援をしているグリーティングカードだった。

（あはは、鈴らしいなあー）

思わず顔が綻んだ。

「おまえ、何、携帯見ながらニヤニヤしてんだよ？」

突然聞こえた声に顔を上げると、目の前にシゲが立っていた。

「鈴からだろー？」

「う……」

（ちくしょー、すっかりバレてる）

しかし、シゲの後ろに俺と同じ様に携帯を見つめながらニヤニヤしている奴がいた。

宮田だ。

きつとあいつの携帯にも新井からメールが来たんだろう。

――――

メッセージカード

ありがとう。

頑張るよ♪

（＊＾ー＾＊）

ところで、どのあたりに

座ってる？

D a i c h i

—
—
—
—

グリーティングメールの返事を送ると、すぐに鈴からメールが返って来た。

—
—
—
—

二番ゲートと三番ゲートの

間に朋ちゃんと一緒にいます。

鈴

—
—
—
—

今日は新井も一緒に来ているらしい。

もちろん、新井は宮田の応援だ。

—
—
—
—

そういえば、さっき新井も

宮田にメール送ってなかった？

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

—
—
—
—

送ってました。

横でなんて送ろうか

いろいろ悩んでましたよー

(、△、)

鈴

—
—
—
—

—
—
—
—

やっぱり。

さっき宮田が携帯見ながら

ニヤニヤしてた♪

しかも今、携帯片手に眉間に

シワ寄せてるから、

なんて返そうか悩んでるっぽい。

クスッ (m *)

D a i c h i

—
—
—
—

宮田はわりと口数の少ない奴だけれど、新井とは話が合うらしく学園祭の日以来、急接近した。

あんな風に真剣な顔で携帯の画面を見つめながら返事を考えているという事は、

つまりはそういう事なのだろう。

第32話 サイン ー2ー

「朋ちゃん、宮田先輩、メール喜んでくれたみたいだよー」

「ホント？」

「うん、和泉沢先輩がそう言ってる」

「でも、まだ返事来ないんだよねー……」

朋ちゃんはそう言うと、握り締めている携帯に視線を落とした。

……RR、RR、RR……――、

それからしばらくして、朋ちゃんの携帯にメールが届いた。

「……あ、宮田先輩からだ♪」

朋ちゃんはメールを開くと、とても嬉しそうな顔をした。

そして、私の携帯にも和泉沢先輩からメールが来た。

—
—
—
—

今からコートに出るよ。

また後で（^ー^）

D a i c h i

—
—
—
—

ふと顔を上げると、さっきまでフィールド上にいた十数人の整備スタッフは

いつの間にか居なくなっていてすっかり整備が終わっていた。

私と朋ちゃんは携帯をマナーモードにしてバッグに仕舞った。

すると、監督兼顧問の小川先生を先頭に部長の高津先輩に続いて和泉沢先輩達が出て来た。

いよいよ、始まる……和泉沢先輩の高校最後の試合。

（どうか、ベスト8に入れますように……）

そう祈りながら和泉沢先輩を見つめていると、先輩もこちらに視線を向けていて

目が合った気がした。

（先輩、私がどこにいるのか気が付いてくれたのかな？）

間もなくしてスタメンの和泉沢先輩達が軽い柔軟やストレッチで体を解し始めた。

「宮田先輩、スタメンじゃないんだ……」

ユニフォームの上にジャージを着てベンチに座っている宮田先輩に視線を移した朋ちゃんが

がっかりしたように呟いた。

「でも二年生だし、ベンチに入ってるって事は後で交代するのかもしれない？」

だって、一年生はベンチにも入っていない人もいるし」

交代メンバーにもなっていない一年生はベンチのすぐ後ろの観客席にいた。

ベンチに入っている一年生もいるけれど、先輩にタオルやドリンクを用意したりとほとんど

雑用係みたいなものだった。

ストレッチの後、小川先生からメンバー全員に集合が掛けられた。

「ほら、宮田先輩も小川先生の指示を聞いてるって事は交代メンバーなんだよ」

「うん、そうだね」

嬉しそうな顔で宮田先輩の姿を見つめる朋ちゃん。

そうして――、

小川先生の話が終わった後、部長の高津先輩がみんなを集めて円陣を組んだ。

（和泉沢先輩、頑張ってください……っ！）

第32話 サイン ―3―

二番ゲートと三番ゲートの間に視線をやると、すぐに鈴の姿を見つ
ける事が出来た。

淡いブルーのカットソー、隣には新井らしき人物がいる。

顔の表情まではわからないけれど、あれは絶対、鈴だ。

（これが、高校最後の試合になるかもしれない……）

目標はもちろん“優勝”。

今日の試合に勝てばベスト8に入るし、来週も試合があるから引退
がちよっとだけ延びる。

そうすれば鈴からの“ご褒美”もゲット出来るし、あと一週間だけ
一緒に帰れる。

（頑張らないとっ）



そして、キックオフ――。

主審のホイッスルの音がスタジアムに鳴り響き、試合が始まった。

スタメンの俺とシゲにはさっそくぴったりとマークが貼り付いた。

（うぜえー）

相手チームはかなり俺達の事を研究しているらしい。

しかし、俺達も当然相手チームの事は研究している。

今日の相手は力量としては五分五分のチーム。

ただ、俺達と違うのは対戦するチームの事を徹底的に研究して緻密な作戦を立ててくる事。

一昨年はそれでベスト4にまでなった高校だ。

まあ……逆を言えばこっちが今までと違う動きをすれば作戦が崩れるわけだけど。

いつもなら俺達はフォワードに入っている。

しかし、今日は相手チームの裏をかく為にミッドフィールダーに入っていた。

それでも相変わらずマークはされているけれど……。

だから、俺もシゲもシュートよりもパスを回す事に専念していた。

シュートすると見せかけてパスを出したり、パスが回ってきてもすぐに他のメンバーに

パスを回したりー。

全てのシュートを他の奴に任せるが、なかなかゴールが決まらずもどかしかった。

小川先生からは「前半はパス回しに専念して様子を見ろ」と指示が出されているから、

シュートを打つ体勢も取れない。

だから自分で打ちたいのもあるが、何よりマークがうざすぎてパスを受けて回すのが精一杯だった。

(くっそ……っ)

心の中で呟く。

「大地」

すると、シゲが俺の肩を軽く叩いた。

気が付くと俺は眉間に皺を寄せて唇を噛み締めていた。

「悪い」

(イラ立ってるのが顔に出てたのか……)

俺は一度大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせた――。

第32話 サイン ー4ー

「どうやら今日はシュートを打たせて貰えないっぽいな」

ハーフタイム、シゲが軽く苦笑いしながら言った。

小川先生の俺とシゲに対する指示は「後半もパスを回して行け」だ。

（せっかく鈴が応援に来てくれているのになー）

後半戦、どうせなら俺のシュートで先制点を取りたいところだ。

だが、後半戦からは宮田がフォワードに入る。

当然マークはされるだろうが、こいつはこの間の試合には出ていない。

だから宮田のデータがない分、相手チームは分析出来ていないはずだ。

その分、シュートを決めやすいだろう。



oooooooooooo、

後半戦が始まると相手チームは俺達が思った通り、宮田の登場に焦っていた。

マークに付いた奴も宮田の動き方がわかっていないから振り回されている。

後半戦、残り後十分――。

0
vs
0

両チームともまだ得点はない。

元々、宮田はディフェンダーだ。

もちろん部活ではシュート練習もやっているから今回フォワードに入った訳だけど。

しかし、やっぱり練習と実戦では違う。

パスを出してもなかなか練習通りにシュートも決まらない。

そしてそれは、宮田以外のフォワードにも言える事だった。

ベンチに視線を移しても小川先生からはまだ何も作戦変更のサインは出ていない。

（まだ様子を見るつもりなのかっ？）



後半戦、残り後三分――。

ゴール手前、相手チームが出したパスがタッチラインを割った。

俺達のチームのスローイン。

スローアーはシゲだ。

シゲは審判からボールを受け取ると、そのボールを高めに放り投げ
てから三回バウンドさせた。

（っ！？）

それはシゲから俺に向けられたサインだった。

“攻めるぞ”

ポジションや指示に関係なく“攻め”の合図。

一年の時に練習試合の前日に二人で決めたサインだった。

スローインで再びコートの中に戻ってきたボールは宮田の前に転がって行った。

宮田がそのボールを受けるとすぐにシゲが「大地！」と叫んだ。

そして宮田が俺にパスを回してきた。

「大地っ、打て！」

シゲの声が聞こえ、俺はゴールの左上をめがけて思いっきりシュートした――。

第32話 サイン ―5―

「あ、朋ちゃん、宮田先輩出てきたよ？」

前半戦が終わり、ハーフタイムに入ったところで宮田先輩が出場メンバーの輪の中に加わった。

試合を夢中になって観ていたから前半戦の終わりぐらいから宮田先輩がアップに入ったのに

気付かなかった。

「誰かと交代したのかな？」

朋ちゃんは嬉しそうな顔で宮田先輩を見つめていた。

前半は両チームとも無得点で終わった。

今日は和泉沢先輩も高津先輩もまだシュートさえ打っていない。

それにパスが回ってきてもすぐにまた誰かにパスを回している。

この間の試合はこの二人が中心になってシュートを打っていたのに。

（この間とは違う作戦なのかなあ？）

和泉沢先輩と高津先輩はこの間はフォワードだったけど、今日はどう少し後ろの

ポジションのミッドフィールダーの位置にいる。

我が俤なのはわかってはいるけれど、やっぱり和泉沢先輩がシュートを決めるところが見たいなー。



「あ、宮田先輩、フォワードだよ♪」

ハーフタイムが終わって後半戦が始まる前、両チームのメンバーがそれぞれポジションに就くと、

隣から朋ちゃんの嬉しそうな声が聞こえた。

フォワードの位置に宮田先輩がいる。

（和泉沢先輩は……）

前半と変わらず高津先輩と同じミッドフィールダーの位置にいた。

だけど、とにかくシュートさえ決まれば……

（和泉沢先輩、高津先輩、宮田先輩……みんな頑張ってくださいっ！）

ピーーーーッ……、

そして、後半戦が始まった――。

後半戦は宮田先輩の他にフォワードのメンバーがもう一人代わっていた。

それだけに前半戦よりもパスが通っている気がする。

「宮田先輩、行けーっ！ シュートッ！！」

朋ちゃんは宮田先輩にパスが回される度、叫んでいた。

だけど、なかなかシュートが決まらない。

「あーん……、また外したー」

がつくりと肩を落とす朋ちゃん。

「今回、和泉沢先輩と高津先輩はいつもとポジションが違うみたいだから、

もしかしたら宮田先輩もいつものところじゃないのかも？」

「なのかなあ……？」

そんな会話をしているうちに試合時間は残り三分になっていた――。

第32話 サイン ー6ー

「あ、宮田先輩にパス回っ……て、あれ？」

高津先輩のスローインで宮田先輩にボールが回ってきた。

しかし、そのボールはすぐに和泉沢先輩にパスが出された。

朋ちゃんが隣で不思議そうな顔をしている。

そして次の瞬間、彼がシュートを打った――。

和泉沢先輩が打ったシュートは見事にゴールネットを揺らした。

(……決まったっ！？)

沸きあがる歓声、周りの人達も立ち上がって喜んでいる。

「鈴ちゃんっ、和泉沢先輩やったね♪」

「うんっ」

私と朋ちゃんがハイタッチをしていると和泉沢先輩と目が合った。

すると、先輩は右手で軽く前髪を掻き上げ、親指で鼻の頭を撫でた。

(……あ)

“シュート決めたら、鈴にだけわかるサイン送るから”

昨日、先輩が私にそう言った。

私と先輩だけにわかるサイン。

私は小さく手を振って応えた。

……ピッ……、

しかし、審判のホイッスルが鳴り、コートにいる先輩達からも笑顔が消えて

表情が険しくなった。

「え……何？」

「？」

私と朋ちゃんもよくわからない。

ただ、ざわつき始めた周囲から落胆の声とともに“オフサイド”と言う言葉が聞こえてきた。

「朋ちゃん、オフサイドだって」

「えー……」

私と朋ちゃんもがっかりした。

（せっかく先輩がシュートを決めたのに……）

オフサイドを取られた和泉沢先輩は微妙な位置にいた。

しかし、判定が覆ることはなく、相手チームの間接フリーキックになった。

「でも、まだ時間あるし、大丈夫っ！　ねっ？　だから、応援しよう？」

朋ちゃんは私と違って前向きだ。

「……うん、そうだね！」

コートの中では既にプレイが再開されていた。

「先輩ーっ！　頑張ってー！ーっ！ー！」

試合も終了間近になって興奮に包まれたスタジアムの中に響く大歓

声。

私の声など彼に聞こえるはずもない。

それでも私は必死で叫んだ。

悔しそうな顔を浮かべて、ボールを追っている彼に向かって一生懸命に叫んだ――。

だけどオフサイドで精神的ダメージが大きかったからか、先輩達のチームは

相手チームの選手が放った間接フリーキックに上手く立ち回れていなかった。

そしてあっさりとゴールを許してしまい、それがそのまま決勝点になった。

残り時間が僅かだったし、焦っていたのもあるだろう。

そうしてゴールが決まった三秒後、主審のホイッスルが試合終了を告げた――。

第33話 MVP — 1 —

「や、やっぱり……私、行かない方がよくないかなあ……?」

私は和泉沢先輩達の控室に行くのを躊躇していた。

「もおー、 “彼女” の鈴ちゃんが行かなくてどうするの?」

誰が和泉沢先輩を元氣付けてあげられるのよ?」

「う、うん……でもおー……」

試合が終わってかれこれもう一時間近くが経過している。

それでも私が控室のドアをノック出来ないのは試合が終わった後の

和泉沢先輩の後姿がとても声を掛けられる雰囲気じゃなかったから。

観客席から見えた和泉沢先輩はコートから出た後、俯いてタオルを顔に押し当てながら

控室に戻って行った。

そんな姿を目にしたら、とても声なんて掛けられないと思った――。

……ガチャッ……――、

不意に控室のドアが開いて私と朋ちゃんは中から出てきた人物と目が合った。

(あ……)

高津先輩だ。

高津先輩の後ろからは次々と他の部員達も出てきて、最後に宮田先輩が出てくると

ドアをパタンと閉めた。

「宮田先輩っ」

朋ちゃんはすぐに宮田先輩に駆け寄って行った。

（あれ？ 和泉沢先輩がいらない）

控室から出てきた部員達の中に和泉沢先輩の姿はなかった。

（まだ中にいるのかな？）

「鈴」

すると、高津先輩が近づいてきた。

「お疲れ様でした。あ、あの……和泉沢先輩はー……」

「……まだ中にいる」

「そうですか……じゃあ、ここで待ってます」

「いや、あいつ出て来ないと思うよ。」

「えっ？」

「鈴が行ってやらないと多分、出て来ないかも。だから行ってや
て？」

ものすごく落ち込んでるから」

「で、でも……」

「中にはもう大地一人しかいないから」

高津先輩はそう言う。「んじゃな、大地の事は任せたから、後よろ
しく」と

手を振りながら帰って行った。

（和泉沢先輩、そんなに落ち込んでるんだ？）

そんな事を言われるとますます中に入り辛い。

しかし、そんなに落ち込んでる先輩を放って帰るのもどうかと思うし。

(ど、どうしよう……高津先輩に「任せた」って言われちゃったし……)

私はドアの前でしばらく考え込んだ――。

第33話 MVP — 2 —

シゲ達が帰った後、俺はまだユニフォームも脱がずに座っていた。

「……………あの……………先輩……………」

すると不意に後ろから声がした。

（鈴……………？）

慌ててタオルで頭と顔をガシガシ拭いて振り向くと、

控室のドアが少しだけ開いていて鈴が顔だけを覗かせていた。

「……………」

鈴は俺の顔をじっと見たまま、入って来ようとしなない。

だから俺が手招きすると、ようやく控室の中に足を踏み入れた。

「……お疲れ様でした」

そして俺の隣に座ると、缶コーヒーをそっと目の前に差し出した。

その缶コーヒーを受け取ると、じんわりとその温度が伝わってきた。

「あったかい……」

「冷たい方がよかったですか？」

「ううん、そんな事ないよ。ありがとう」

そう言って缶コーヒーを開けて口をつけると鈴は小さく笑った。

温かいコーヒーは汗が引いて冷たくなりかけていた体の中に沁み込んでいる。

変に言葉をいろいろ掛けられるよりも、今はこうしてただ黙って一緒に

あったかいコーヒーを飲んでくれる事がすごくありがたかった。



「あゝあ……結局、ベスト8に入れなかったなあー」

コーヒーを飲み終わって気持ちが落ち着いた頃、思わず溜め息が出た。

「でも、力は出し切ったんですよね？」

「うん」

「だから、カッコよかったです」

(……え?)

鈴の口から出た意外な言葉に俺は驚いた。

「一生懸命頑張ってる先輩、すごくカッコ良かったです」

鈴はちよつと顔を赤くした。

その言葉がすごく嬉しくて、でも、なんだか照れてしまって俺も顔が赤くなった。

「……そ、そろそろ着替えないとな」

だから誤魔化すように急いでユニフォームを脱いだ。

すると鈴の悲鳴が聞こえた。

「きゃっ!..?」

「へっ?」

「せ、先輩っ、いきなり脱がないでくださいーっ」

鈴はそう言っていると両手で顔を覆いながら背中を向けた。

「……そ、外で待ってますっ」

そして俺に背中を向けたまま逃げるように控室を出て行った。

「う、うん」

(ぶっ、可愛い♪)

耳まで真っ赤になっている鈴。

それがすごく可愛くて、思わず吹き出してしまいそうになった――。

第33話 MVP — 3 —

——翌日、三時限目が終わった休憩時間。

「イズミ、鈴ちゃん来てるよ」

織田ちゃんにそう言われ、教室の入口に視線をやると珍しく鈴が来ていた。

わざわざ教室にまで来るという事は何かあったのだろうか？

「何かあった？」

「あ、あのー……」

「？」

「こ、これっ、よかったら……」

鈴はそう言いながら小さな紙袋を俺に差し出した。

（なんだろう？）

不思議に思いながら受け取ると、鈴は「いらなかったら誰かにあげてください、それじゃっ」と

言って走って行ってしまった。

「え……鈴？」

鈴はあっと言う間に見えなくなった。

逃げ足が速いというか、なんというか……。

取り残された俺は徐に謎の紙袋に視線をやった。

わりと重みがある。

とりあえず席に戻って中を見ると、弁当箱が入っていた。

「っ!？」

(これって……)

間違いなく弁当だよな？

しかも、ひよっとして鈴の手作り？

じゃなきゃ、鈴がわざわざ持って来るはずがない。

(でも、ベスト8に入れなかったのに、なんで……?)



そして、四時限目が終わって昼休憩――。

「なあ、井上、今日弁当持って来た？」

俺はだいたいいつも学食に行っている奴に声を掛けた。

「いや」

「お、じゃあ、ちょうどよかった♪ 俺の弁当食って？」

「え？　なんで？」

「まあ、ちょっと……」

「……？」

俺が弁当を差し出すと、怪訝な顔をしながらも井上は

「なんかよくわかんねえけど、とりあえずサンキュー」を受け取った。

(いやいや、こっちこそ♪)

だって……

“いらなかったら誰かにあげてください”

鈴はそう言ったけど……

（あげるわけないでしょー？）

席に戻り、鈴に貰った弁当を出すと意外にもシンプルで大きな弁当箱だった。

決してお世辞にも“女の子らしい”とは言えない物だ。

（こ、これは……鈴の弁当箱？ いやいやいや、絶対違うな）

だって、どう考えても“女子高生”の趣味とは思えない。

鈴はどっちかと言うと所謂“少女趣味”。

携帯に付けているストラップも、カバンやラケットカバーに付けている

ファスナーマスコットも全部ちっちゃくて可愛い『ハローキティ』だ。

第33話 MVP — 4 —

しかし、弁当箱に“先制パンチ”を受けた後、フタを開けた俺はさらにやられた。

玉子焼きはもちろん、俺の大好きな唐揚げが入っていたからだ。

それに加え、きんぴらとウインナーまで入っている。

しかも“タコさんウインナー”。

ご飯はというと、小さ目のサッカーボールのおむすびがたくさん入っていた。

海苔で模様が描いてある。

（今朝も朝練があつたはずなのに……）

鈴は今週末、また試合に出る予定だ。

だから最近はずっと朝練があつて早起きをしている。

弁当を作る暇があるなら少しでも寝ていたかっただろうに。

（いただきますっ）

まずは唐揚げ。

お弁当サイズの少し小さめの唐揚げは冷めているのに全然硬くなくて柔らかかった。

タコさんウィンナーの足もちゃんと八本ある。

（細かいなー）

俺の母親の弁当なんて焼いただけのウィンナーがそのまま入っているのに。

鈴の弁当はサッカーボールおむすびの具もそれぞれ違っていて手が込んでいた。

タラコだったり、おかかだったり。

後は梅と鮭、昆布とか。

しかし、ここで俺はふと思った。

（これ、また夢じゃないよな？）

味だって、食感だってある。

なんとなく、周りを見回してみると、みんなも弁当を食べているし。

という事は夢じゃない。

（やべえっ、俺、今日死ぬんじゃないのか？）

帰りに事故に遭うとか？

もしくは今夜寝ている間にぽっくり？

逝っちゃう的な？

あまりに幸せ過ぎて、ついそんな事を考えてしまう。

でも、鈴の弁当を最期に食べて死ぬるならそれもいいかも……て、

そしたら鈴に会えなくなるじゃんつ。

美味しい弁当はある意味俺の思考回路を狂わせる……。。



——放課後。

H Rの後、鈴が部活に行ってしまう前に彼女の教室に行った。

「鈴」

「あれ？先輩」

「コレ、ありがとう。美味しかったよ」

空になって、すっかり軽くなった弁当箱が入った紙袋を鈴に返すと、顔を赤くしながら受け取った。

「全部、鈴が作ってくれたの？」

「いえー、実はきんぴらと唐揚げはお母さんなんです」

「そうなんだ？ でも時間掛かったんだろ？ それに結局、

ベスト8入ってないのに……ありがとな」

そう言いながら鈴の頭を撫でた。

すると鈴はにっこり笑って「MVPです」と、言った。

(MVP……)

「全然豪華な賞品じゃないですけど」

「そんな事ないよ。……てか、アレ、誰の弁当箱？」

「あ、お父さんです。最初は私のお弁当箱に詰めようと思ったんですけど……、

私のは先輩のお弁当箱よりきっと小さいし、キティちゃんだから……」

「あはは、やっぱりな」

鈴のその答えを聞いてホッとした。

正直「私ですけど、何か？」と、言われたらどうしようかと思っていた――。

第34話 クエストと報酬 その1 — 1 —

俺は今、とても困っている。

事の発端は昨日の事。

最後の部活として一昨日の試合の反省会をした後、部室棟の前で鈴と合流して

一緒に帰っている時だった。

「今週末の試合はどこでやるんだ？ 応援に行くから教えて？」

鈴の応援に行こうと試合が行われる会場を訊くと、予想外の言葉が返ってきた。

「え……ダメですよ」

「は？ なんで？」

「だって、先輩は受験生なんですよ？ 応援なんかに来ちゃダメです」

「えー、大丈夫だよ」

「ダメですよー、だってもう今、十月の半ばなんですし、ちゃんと受験勉強しないと」

……で、結局鈴はその後もどこで試合があるのか教えてくれなかった。

（ま、いっか。どーせ明日、織田ちゃんに訊けばわかる事だし）

なんて思っていたら甘かった……。

今朝、朝一で織田ちゃんに訊くと「あ、その事なら鈴ちゃんに口止めされてるんだよねー」と

あっさり言われてしまった。

（くっそー、もう手が回っていたか……）

そんなワケで俺は今、どうやって鈴の試合会場を突き止めようか悩んでいる。



「んで？ おまえは鈴の応援に行きたくても行けなくて悶々としてるんだ？」

シゲは俺の目の前でニヤニヤしていた。

「鈴も意外とやるもんだなあー」

「笑い事じゃねえよ……」

「いや、笑ってない、笑ってない♪」

「思いつきり笑ってるし……」

お互いサッカー部を引退し、かと言っていきなり“どっぷり受験生”にはなれず、

二人で帰りにファーストフードに寄ったのはいいけれど……、

俺が鈴の事を話すとシゲはプツと吹き出した。

「てか、おまえももうちょっと頭使えよー、鈴と織田ちゃん以外からでも情報は得られるだろ？」

「でも、俺、他に女子テニス部に知り合いねえし」

「直接じゃなくても間接的にだよ」

「新井にも訊いたけどダメだったし」

「んじゃ、サッカー部の二年生部員のクラスに女子テニス部がいるかどうか、

そこからまず調べてみれば？」

「その後は？」

「その後は、そのサッカー部の奴にそれとなく訊き出して貰えばいいべ？」

「あー、なるほど」

シゲはなかなか悪知恵が働く。

この分なら、鈴の試合会場を突き止める“クエスト”は案外楽勝で

クリアできるかも？

第34話 クエストと報酬 その1 — 2 —

——週末、日曜日。

「ねえ、鈴ちゃん、あれってー……」

私達女子テニス部が試合会場に着き、管理棟から出ると、私の隣を歩いていた

同じ一年生部員のノリちゃんが不思議そうな顔で前方を指差した。

「へ?」

ノリちゃんが指差した方に目を向ける。

すると……

「はろお〜♪」

「……えっ？　せ、先輩っ!？」

ここにいるはずのない人物が私の目の前に現れ、満面の笑みで手を振っていた。

和泉沢先輩だ。

「『はろお〜♪』……て、なんでここにいるんですかあっ?」

「通りすがりー」

絶対、そんなワケはない。

なぜなら学校を基点としても、この会場と先輩の家とでは正反対の方角だ。

近所ならともかく、こんな場所をうろついているはずがない。

しかも、今は朝の九時半だ。

私達部員ですら会場に着いてまだ一時間も経っていないのに……。

「どうしてここがわかったんですか？　てか、誰に聞いたんですか？」

私は和泉沢先輩には試合会場も開始時間も知らせていなかった。

一番に訊きそうな織田先輩にも、朋ちゃんにも、宮田先輩にも、

そして念の為、岩井君にも口止めしておいた。

先輩は受験生だから私の応援よりもお家で勉強していて欲しかったから。

（「絶対来ちゃダメです」って言ったのにー）

「いや、たまたまこの前を通りかかったらさー、ちょうど鈴に似てる子がいたから

来て見たんだけど、いっやあー、まさかホントに鈴だったとはー」

先輩はにやりと笑った。

「……」

「世の中こんな偶然であるんだなー？　いやいや、ホントトびつく

り♪
」

(ないない、あるワケがない)

「せっかくだから試合見ていこっと♪」

和泉沢先輩はそう言うのと私達と一緒に歩き始めた。

「……」

あからさまな小芝居に私はもう怒る気にもなれなかった。

……なんて――、本当はものすごく嬉しかった。

思わず顔が綻ぶ。

でも、私はそのふやけた顔を先輩には見せないようにした。

だって、見せてしまうと彼はこれから先も私が「来ちゃダメです」と

言っても応援に来てしまいそうだったから――。

第34話 クエストと報酬 その1 — 3 —

「やほー、来ちゃった♪」

午前十時過ぎ、織田ちゃんが試合会場に来た。

「おいつす」

「やっぱ、イズミも来てたんだ？」

織田ちゃんは俺の顔を見るなりニヤツと笑った。

「当たり前だろ〜？」

「鈴ちゃんに怒られなかった？」

「んー、てか、呆れてたっばい」

「あはは、そーなんだ？　で？　誰に教えて貰ったの？」

「まあ、いろいろと伝を使って」

「ふーん」

「……て、織田ちゃんこそ応援なんかに来てていいのか？」

「同じ受験生で、しかも授業中よく寝てるイズミには言われたくないけど？」

「いや、俺はホラ、“やればできる子”だから♪」

「“やればできる子”ねえー？」

織田ちゃんはそう言うとププッと笑った。

「つーか、鈴の試合が気になって、家で大人しく勉強なんかできねえつーの」

「確かに」

「なんだ、織田ちゃんも同じなんじゃん」

鈴は夏休みが終わってからほぼ毎週、大会の予選で試合があった。

そして、その予選を順当に勝ち進み、今日の第一試合に勝てば全国でベスト16位以内に入る。

だから織田ちゃんも気になっていたのだろう。

しかし、鈴はそんな俺と織田ちゃんの想いを知ってか知らないでか、午前中に行われた第一試合になんなく勝って全国でベスト16の中に入った。



「小峯、落ち着いて行け」

「鈴ちゃん、頑張って！」

「ファイトッ！」

午後一時三十分、第二試合の開始時刻。

監督兼顧問の佐藤先生と部員達はコートに入る鈴に向けてエールを送った。

「はいっ、行って来ますっ」

鈴はビシッと右手で敬礼をした。

そして踵を返す瞬間、俺の方に視線を向けた。

「鈴、頑張れよ！」

ホントは声に出してそう言いたかったけど、みんなの前だから鈴が赤面して

集中力が切れてしまっただけなのではないかと思った。

だから目だけで“頑張れよ”と言うと、鈴は少しだけコクツと頷いてコートに入った。

それからすぐに試合が始まった。

相手は前回の大会で負けた高校の一年生だ。

（鈴、苦手意識を持ってなきゃいいけど……）

鈴の表情はまだ落ち着いている。

最初のサーブ権は対戦相手だ。

いきなりサービスエースとか取られなきゃいいけれど。

それは俺以外のみんなも同じ思いだった。

（頑張れ、鈴！）

乾いた音をコートに響かせて鈴は相手のサーブをレシーブして、そこからしばらくラリーが続いた。

最初にポイントを先取したのは鈴だった。

相手の甘い返球に素早く反応してネットぎりぎりのショットを打ち、そのボールの速さに相手は手を出せなかった。

（ナイスショット！）

「意外と落ち着いてるな」

「鈴ちゃんは集中力もあるし、それなりに試合経験もあるからね」

織田ちゃんが言ったとおり、少しだけ悔しそうに顔を歪ませた相手に対し、

鈴は表情を崩す事無く、次のサーブに備えてレシーブ位置に戻ってラケットを構えた。

試合は完全に鈴のペースになったように見えた。

しかし、一年生とは言え、さすがに相手も強豪高なだけあってそれからすぐに鈴の弱点を見抜いた。

「さっきからずっとバックショットの方を狙われてるな」

「んー、鈴ちゃんの弱点を見抜かれたみたいね。実はあの子、バックショットが弱いよ。」

「どうも苦手なのかいまいち威力に欠けるんだよねー」

「ふーん……」

相手の選手は容赦なく鈴の弱点を鋭く突いて来た。

それでも試合はまだ五部五部といったところだろうか。

ゲームを落としても鈴はあの強烈なサーブで確実にゲームを取り返していた。

そして最終ゲーム……――。

第34話 クエストと報酬 その1 — 4 —

「しかし、全国でベスト16ってすごいなー」

「そんな事ないですよー、だって今回の大会は新人戦だから選手はみんな一年生でしたし」

「いや、それでもすごいって」

第二試合、鈴は負けてしまった。

しかし、前回みたいな負け方ではなく、最後のゲームでは何度もデュースを繰り返して

惜しくも破れた。

だから試合直後は悔しそうな顔をしていたけれど、俺と二人きりになった時、

鈴は「悔し過ぎて涙も出ません……」と、謎な事を言った。

そんなワケで俺の“慰め役”は不発に終わった。

鈴以外の一年生は先々週の予選で敗れたり、今日の第一試合で負けていた。

鈴が第二試合で負けた事でうちの学校が出場する試合が全て終了し、今日はその場で現地解散になった。



帰りの電車内――、

運よく二人掛けの座席が空いていた。

その座席に二人で座ると鈴は「ふうっ」と軽く息を吐き出した。

「疲れた？」

「はい、ちょっとだけ」

「駅に着くまで寝ててもいいぞ？ 着いたら起こしてやるから」

「いえ、大丈夫です」

鈴はそう言ったけれど口数も少なくなっているから結構疲れているのかもしれない。

だから俺も必要以上に話し掛けることもしなかった。

……トン………。

それから数十秒後、俺の左肩に“何か”が当たった。

（ん？）

その“何か”を確かめるべく視線をやるとそれは鈴の頭だった。

(え?)

鈴の方からこんな風に甘えてくるなんて……。

やっぱり、試合に負けたのが悔しくて俺に慰めて欲しいっていうサインなのかな?

「鈴、よく頑張ったな」

鈴の肩に手を回して頭を撫でながら顔を覗き込むと、目を閉じていた。

「あ、れ……?」

鈴は俺の肩に寄りかかって眠っていた。

(やっぱり、疲れてたんだな……)

鈴の寝顔は以前、織田ちゃんの“暑中お見舞い”メールと一緒に送られてきた画像で

見た事はあった。

けれど、今俺の真横でスゥー、スゥー、と微かに寝息を立てて気持ち良さそうに眠っている

鈴の寝顔はあの画像よりも“生”で見る分、ものすごく可愛かった。

（クエストの報酬はこれか♪）

第35話 初めてのケンカ — 1 —

——翌日、昼休憩。

私と和泉沢先輩は三年生の校舎の屋上で待ち合わせをしていた。

和泉沢先輩が部活を引退して、放課後一緒に帰れなくなったから

昼休憩に会っているのだ。

「先輩」

私が声を掛けると先輩は軽く手を挙げて小さく笑った。

「さっき、宮田が一年生の校舎の方に行ってたのが見えたけど、もしかして新井と？」

「はい、朋ちゃんと宮田先輩付き合う事になったみたいです」

「てか、あの二人まだ付き合ってたんだ？」

「なんか朋ちゃん曰く、宮田先輩、試合の事で頭がいっぱいだろうから、

終わってからちゃんと告白しようと思ってたみたいです」

「それってこの間の俺等の引退試合？」

「はい、それで実は宮田先輩も同じ様に試合が終わったら……って考えてたみたいで、

あの日の帰りに宮田先輩の方から朋ちゃんに言っただみたいです」

「へえ」

朋ちゃんと宮田先輩は和泉沢先輩達の引退試合の日から付き合い始めた。

だけど朋ちゃんは帰宅部。

部活でいつも遅くなる宮田先輩とは一緒に帰れない。

だから私と和泉沢先輩が昼休憩に会っているように、朋ちゃんと宮田先輩も

昼休憩に会っている。

「でも、朋ちゃん達、昨日さっそく初喧嘩したみたいです」

「なんで!？」

「昨日、朋ちゃんバイトが入っていない日だったから、宮田先輩と会う約束を

してたらしいんですけど、それが急遽バイト先の店長さんに

呼び出されちゃったらしいんですよ。もちろん、予定があるから無理ですって

断ったらしいんですけど、どうしてもって店長さんに拝み倒されて

それで宮田先輩に『ごめんなさい』って連絡したら先輩が怒っちゃったみたいで……」

「ふーん……でも、宮田の気持ちもわかるなあー。だって、普段は昼休憩に会えるって言っても

時間が限られてるし、部活があるからゆっくり会えるのは日曜日くらいだからー」

「そうですねー」

「て、それは俺達も同じなんだけどなー？」

和泉沢先輩はそう言うのと私の顔をちらりと横目で見た。

「う……」

私と和泉沢先輩も今は学校でしか会っていない。

それは先輩が受験生だから。

私だって、そりゃあ日曜日くらいはゆっくり先輩と会いたい。

でも、そうすると先輩の勉強時間が減ってしまう。

だから我慢している。

第35話 初めてのケンカ ―2―

「あ……でも、宮田先輩が朋ちゃんのところに行ってたって事は仲直りしに行ったのかもしれないですねー？」

鈴は誤魔化すように笑った。

「俺も日曜日、鈴に会いたいなー？」

「……」

「毎週じゃなくてもー、隔週とかー」

「……」

「せめて一ヶ月に一回とかー」

そこまで条件を落としても鈴は頑として首を縦には振らずに黙って

いた。

（むー……意外と頑固だな）

「鈴は俺に会いたくないの？」

この話題が出る度、もう何度も俺は同じ質問を繰り返している。

「そんな事ないですよー」

で、鈴は決まってこう言う。

「鈴に会いたくて勉強が手に付かないー」

「私はそんな先輩の事が心配で夜も眠れません」

「禁断症状が出そうー」

「一日くらいなんとか我慢して下さい。月曜日にはこうしてまた会えるんですから」

これもいつものパターン。

「はあー……俺が受験生じゃなかったらなあー」

「受験が終わるまでの辛抱です」

そして毎回、鈴のこの台詞で終わる。

「受験が終わったら、いっぱい会ってくれる？」

「はい」

鈴はにっこり笑って答えた。

そんな彼女のあどけない顔を見てみると自分の感情が抑え切れなくなってくる。

「……っ」

突然、肩を抱いてキスをした。

すると、鈴は大きく目を見開いて声も出せないまま驚いていた。

「なんか可愛かったから、つい……」

「誰かに見られたらどうするんですか」

鈴は怒るのかと思っていたら、頬を赤く染めながら苦笑いした。

「大丈夫だろ。それに、見られてても俺は平気♪

だって、鈴は俺の“彼女”だって全校生徒に知れ渡るからいいじゃない

やゝん」

（そうすれば、岩井だって迂闊に鈴には手を出さないだろ）

「えええっ！？ そんなあっ」

「今度はもっと濃厚なキス、してみる？」

「だ、駄目です、駄目ですっ」

鈴は両手をピンと伸ばして俺の体を押した。

「そんな嫌がらなくても……」

「せ、先輩とキスするのが嫌なんじゃないです……ただ……その、ここでは……」

「て事は、誰にも見られないんだったら“濃厚なキス”していいんだ？」

俺は態と意地悪な言い方をしてみた。

すると、鈴は意外な事にコクコクと頷いた。

「えっ!？　い、いいのっ？」

逆にこっちが驚いた。

「あっ、いえっ、いいって言うか、悪いって言うか……そのっ」

「も、もしかして……また“嫌”って言えなかっただけ……とか？」

「……はい」

（ああ……やっぱり、そーゆーオチだったかぁー……）

第35話 初めてのケンカ — 3 —

——数日後、久しぶりに雨が降った。

——
——
——

雨降ってる。

(＊。１。)。。。。。(今日は

一緒に帰れるかなあ？

D a i c h i

——
——
——

五時限目が終わった休憩時間、和泉沢先輩からメールが来た。

——
——
——

どうですかねえー？

止まなかったら部活も

中止になって帰れるかもです。

(、A、)

鈴

—
—
—
—

今日は朝から空がどんよりしていた。

だから昼休憩に会った時も先輩は「雨降らないかなー？」と空を見上げていた。

—
—
—
—

(二人) 雨乞い！

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

—
—
—
—

じゃあ、私も！

(≡人≡)

鈴

—
—
—
—

雨が降ってテニス部の部活が無くなれば和泉沢先輩と一緒に帰れる。
このまま降り続けてくれればいいけれど――。



六時限目が終わり、H Rの最中に窓の外に目を向けるといつの間にか雨が上がっていた。

「……」

(雨乞い……効かなかった……)

—
—
—
—

もきゅ、、、部活

出ますー

(p | q)

鈴

—
—
—
—

H Rが終わって和泉沢先輩にメールを送ると嘆きのメールが返って

来た。

—
—
—
—

一人で帰る！。

(T
A
T)

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

そして、翌日もそのまた翌日も降ったかと思うと、六時限目あたりで止むという

思わせぶりの雨が続いた——。



「今日も夕方には雨止むのかなぁー？」

中途半端に降る雨の所為で一緒にも帰れない、屋上にも出られない
日が二、三日続いた翌日。

和泉沢先輩は恨めしそうに空を見上げて溜め息を吐いた。

「どうですかねー？ どーせ止むんなら晴れてくれればいいのにー」

「ホントだよ。てか、“降れ降れ坊主”でもぶら下げとくかな」

（降れ降れ坊主？）

「何ですか？」

「“照る照る坊主”の逆バージョン」

「あ、なるほどー。でもそんなのどうやって作るんですか？」

「簡単だよ。照る照る坊主を逆さにして吊るすだけ」

「そんなので効き目あるんですかー？」

「それがあるんだよ。小一の時にさ、遠足の前の日に照る照る坊主を作って

ぶら下げといたんだけど、寝てる間に頭が重くて逆さになったんだ。

それで、朝起きて見たら土砂降りになってて大泣きした憶えがあるよ」

「強烈な効き目ですね」

「だろー？ よっし！ 今日帰ったらさっそく特大の作ろっと♪」

先輩はまるで、翌日の遠足の為の照る照る坊主を作る子供みたいに言った。

第35話 初めてのケンカ — 4 —

——翌日。

あまりの大きな雨音で目が覚めた。

カーテンを開けて窓の外を見ると物凄い土砂降りだった。

(うおっ)

テレビの天気予報も今日は一日中雨の予報だ。

降水確率も90%。

昨日、学校から帰って作った“特大降れ降れ坊主”が効いたみたいだ。

土曜日の今日は授業も四時限で終わる。

これなら鈴と一緒に帰れる確率も高い。



そして、四時限目が終わっても雨はまったく止む気配を見せず、
“特大降れ降れ坊主”は寧ろ効き過ぎる程の効力だった。

H Rが終わって鈴を迎えに昇降口に行くと、ちょうど鈴が二階から
下りてきた。

「あ、先輩」

鈴は俺を見つけるとにこっと笑った。

だが、しかし……一つだけ気になる事が。

「ちわっす」

一緒に岩井が下りてきたのだ。

「……おう」

（なんで、こいつが……）

といっても、鈴と岩井は同じクラスなんだから別に一緒に昇降口まで下りて来る事くらい

おかしい事じゃない。

たまたま教室を出るタイミングが一緒になっただけだろう。

「じゃ、小峯さん、明日一時に」

岩井はそう言うとき鈴に手を振って帰って行った。

明日は日曜日。

岩井と何か約束でもしたんだろうか。

「明日、岩井とどこかに行くの？」

「はい、今度テニス部のユニフォームとチームジャージを新しく作り直すことになったんで、

そのカタログ集めを明日岩井君と一緒に行く事になったんです」

「ふーん……」

でも、二人で行く事ないじゃん。

「……俺も鈴と会いたい」

ちょっと拗ねた言い方をしてみた。

すると鈴はクスッと笑った。

「岩井君とはデートじゃないですよ?」

「わかってるけど」

「それに二人だけって訳じゃないですから」

「え、そうなの？」

「はい、同じ一年生の磯川君とノリちゃんも一緒です」

鈴はそう言うただから心配しないでという風に笑った。



――翌日。

最近ずっと勉強ばかりしていたから気分転換に外へ出た。

“特大降れ降れ坊主”をぶら下げたままなのに青空が広がっている。

昨日の土砂降りが嘘のようだ。

（あー、なんでこんな天気の良い日に俺一人で歩いてんだろ？）

特に何か買いたいわけでもないけれど街をぶらぶら。

しかし、その隣に鈴はいない。

そして、何気なく道路を挟んだ反対側の歩道に目を向けると、
鈴と岩井が二人で歩いていた。

（あ？）

だが、昨日一緒に行くと言っていた磯川達の姿がない。

鈴と岩井の前にも後ろにも、テニス部の他の部員達はいなかった。

（なんで……？）

四人で行くって言っていたから安心していたのに。

鈴、嘘付いたのかな――？

第35話 初めてのケンカ ―5―

「なあ」

翌日、週明けの月曜日。

昼休憩、屋上に行くと和泉沢先輩はいきなり不機嫌そうに口を開いた。

「はい？」

ちよつとびっくりした。

今まで先輩がこんな風に不機嫌顔で私に接した事はないからだ。

「昨日、二人だけじゃないって言ってなかった？」

「？」

「カタログ集め」

「はい、二人だけじゃなかったですよ？」

「だったら、昨日の三時頃、岩井と二人で歩いてたのはなんでなんだ？」

「え？　もしかして、先輩とどこかですれ違いました？」

「なんでなんだよっ？」

先輩の苛立った声が頭上から聞こえた。

（先輩、どうしたんだろう？）

「なんで嘘付いたんだよ？」

「あ、の……」

いつも優しい先輩が怒っている。

私は驚いて“なんで嘘付いたんだよ？”と言った先輩に「誤解なんです」と

否定するのも忘れていた。

「……」

先輩は険しい表情で私を見つめている。

「せ、先輩……？」

「……」

しかし、先輩は結局、それ以上何も言わずに私を残して屋上から出て行った。

（先輩……）



教室に戻った私は、先輩にメールを打とうかどうしようか迷っていた。

もしかしたら、ものすごく怒っていたからメールさえ見えてくれないかもしれない。

そう思い、開き掛けた携帯を閉じる。

（でも、誤解されたままなのは嫌だな……）

嫌だけれど、さっきの様子ではきつと話を聞いてくれそうにない。

と言うより、怖くてちゃんと話せるかどうか自信がなかった。

“どうしたらいいんだろう……？”

午後の授業の間、そればかりを考えていた。

おかげで授業の内容がさっぱり頭に入っていなかった。

（こんな事になるんなら、磯川君と行けばよかったな……）

『後悔先に立たず』とはよく言ったもので、私は昨日の自分の行動を激しく後悔していた。

しかし、後悔だけしていても仕方がない。

（……よっし！ 今日、帰ったら先輩に電話しよう！

勉強の邪魔になっちゃうかもだけど、そんな事、言ってられないもん！）

そう決意した私はHRが終わると同時にカバンを持って立ち上がった――。

第36話 イライラモヤモヤ ー1ー

(なんで何も言わねえんだよ)

昨日、岩井と二人で歩いてたのが何か理由があるんなら言えばいいのに

鈴は何も答えないで黙っていた。

俺は鈴を屋上に残し、教室に戻った。



「あれ？ 大地、鈴と会ってたんじゃないかったのか？」

教室に戻ると何故か織田ちゃんのところにシゲが来ていた。

「……」

「どうしたんだ？ 不機嫌そうな顔して。鈴とケンカでもしたのか？」

俺が無言で席に座るとシゲが冗談っぽく笑った。

「……」

ケンカというか……なんというか……。

鈴が何も言わないから俺が勝手に怒ってるだけっぽい気がするが。

「え……まさか、ホントにケンカした？」

「ウソッ、どうしたの？」

すると織田ちゃんも首を突っ込んできた。

「……昨日さ、鈴が岩井と二人で歩いてるところを見かけたんだ」
自分の中だけでモヤモヤした気持ちを抱え込んでどうにか出来る自

信がなかった。

だから俺はシゲと織田ちゃんに話を聞いてもらう事にした。



「イズミの話を聞く限りじゃ、別に鈴ちゃん悪くないと思うけど？
テニス部のチームジャージとユニフォームのデザインを新しくする時は

毎回男子と女子で合わせてるから、鈴ちゃんと岩井君が昨日一緒にいたのも

変じゃないと思うよ？」

「そうなんだけど、土曜日に鈴から聞いた話だと他に一年生部員が二人一緒に行くって言ったのに、その二人がいなかったから……それに……」

「それに？」

「アイツ、時々鈴と一緒に帰ってるみたいだし」

「アイツって岩井君？」

「うん」

俺がそこまで話すとシゲが呆れた声で「おまえは何をそんなに心配してんだよ……」と言った。

「岩井と鈴と一緒に帰ってるからって別に二人っきりってワケじゃないんだろ？」

「うん……多分」

「だったら問題ないじゃん。それともナニか？　鈴が岩井と浮気するとも思ってるのか？」

「べ、別にそういうワケじゃないけど……ただ……ちょっと」

「ちょっと？」

「なんかモヤモヤ……什么的な？」

「要するにおまえは鈴と一緒に帰れないし、日曜日も会えないからイライラしてたトコに

鈴と岩井が仲良く歩いてるところを目撃してモヤモヤしてるんだろ？」

「……うぐ」

まったくもってシゲの言う通りだった。

第36話 イライラモヤモヤ ―2―

「そう言う高津君だって、モヤモヤしてたじゃない」

「う……」

すると今度は織田ちゃんの言った事にシゲが言葉を詰まらせた。

「高津君も鈴ちゃんと付き合ってた時に、駅で別れてから仲良さそうに

山手線のホームに歩いていくイズミと鈴ちゃんの後姿を見ながら

『鈴、大丈夫かなあ?』って毎日言ってたじゃない」

(え……)

シゲがそんな事を思っていたなんて全然知らなかった。

「イズミに鈴ちゃんを取られちゃうんじゃないかって心配してたよね?」

「……て、てか、あの時一緒に帰ってくれて言ってきたのシゲじやんか」

「いや、そうなんだけど……だからあの後、しばらくして俺、おまえに明日から二人で帰るからって電話したじゃん」

「えーっ、アレってそういう裏があったのか？」

「まあ、な。……っーか、俺はホントにおまえに取られたけど」

「……」

何も言えなかった。

（そうか……だからシゲは別れた時に鈴の好きな奴が俺だって見抜いたのか）

「それより、シゲ、おまえなんでここにいるんだ？」

「あー、おまえに日本史の教科書借りようと思って来たんだけど、そーいや鈴とデート中だったなーて思い出して、そいで織田ちゃんに

借りようとしてたらおまえが超不機嫌モードで帰って来たんだよ」

「あ、そ」

（“超不機嫌モード” ってそんなに顔に出てたのかな？）

「という訳で日本史の教科書貸してくれ。大地んトコはもう日本史の授業終わったんだろ？」

「ああ、三時限目だった。……あいよ」

机の中から日本史の教科書を出してシゲに渡すところちょうど予鈴がなかった。

「サンキュー、“モヤモヤ君”♪」

そしてシゲは人を“モヤモヤ君”呼ばわりして教室を出て行った。

(……何が“モヤモヤ君”だ。“モジモジ君”みたいな言い方しやがって)

……と、そんな事を思っていると、

「イズミ、余計なおせっかいかもだけど、鈴ちゃんは平気で浮気なんて出来る子じゃないよ?」

織田ちゃんが俺に視線を向けていた。

「高津君と付き合ってる時も別れる直前はね、すごく辛そうな顔してたの。」

あの時は、どうしてかわからなかったけど……今にして思えば、あれって多分、

イズミの事が好きなのに高津君と付き合ってるのが苦しかったんだと思うんだよね」

「……」

（そうか……、織田ちゃんは鈴の事を近くで見ている……）

「だから、やっぱり今回の事はイズミの誤解だと思うよ？

鈴ちゃんが何も言わなかったのは、多分、イズミが怒ってるのを見て怖くて

何も言えなかったんじゃないかな？」

「……怖くて？」

そりゃあ、確かにさっきはものすごく怒っていた。

昨日の事も鈴に訊けばすぐに答えると思っていた。

だけど、鈴は何も答えなかった。

……いや、答えられなかった？

「鈴ちゃんの性格、忘れたの？ 高津君が告った時も怖くて断れなかったくらいなのよ？」

「あ……」

「自分が思っている以上に“怖い顔”を鈴ちゃんに見せちゃったのかもよ？」

「う……」

織田ちゃんの言葉がずっしりと俺の心に押し掛かった。

俺はどうやら鈴に“悪い一面”を見せてしまったらしい――。

第37話 まさか……S? — 1 —

「鈴」

HRが終わって教室を出ると和泉沢先輩が待っていた。

「……先輩っ!?!」

昼休憩、和泉沢先輩は昨日私が岩井君と二人でいた事を怒っていたみたいだから、

まさか教室の前で待っているなんて思っても見なかった。

「ど、どうしたんですか……?」

私はすごく嫌な予感がしていた。

“ 別れよう ”

そんな言葉が和泉沢先輩の口から出てきたらどうしよう……。。

私と岩井君の事を何か誤解して、それで私の事を嫌いになったのかも？

大きな不安が頭を掠める。

私はギュッと目を閉じて俯いた。

「…………え、と…………さっきは…………ごめん」

だけど、先輩は予想外の言葉を発した。

ハッと顔を上げる。

「あ、いえ…………」

屋上にいた時とはまるで違うその表情にとりあえず、そう答えたけれど…………

「なんか、ちょっと、イライラしてて…………」

「？」

何か嫌なことでもあったのだろうか？

普通にそう思った。

だけど、先輩のイライラの原因は予想外な事だった。

「ずっと受験勉強ばっかで鈴とゆっくり会えないしさ……でも、

あいつはよく鈴と一緒に帰ってるって言うし、昨日も二人で歩いてたし……、

鈴の彼氏は俺なのにして思ってた……で、つい……」

和泉沢先輩はそう言うとはつが悪そうな顔をした。

（あ、そっか。だから先輩……）

私と先輩は付き合っているとんでも、休みの日に会う事はしていなかった。

それは先輩が受験生だから。

今までずっと部活を一生懸命やってきた人だから、これからは第一志望の大学に

受かる為に勉強を頑張って欲しくて会わないと決めていた。

どんなに会いたくても、我慢しようと思った。

先輩の為に。

それが今回、裏目に出てしまったようだ。

「鈴、怒ってる……?」

「いえ、全然怒ってなんかありません」

寧ろ、先輩の方が怒ってて、もう私の話なんて聞いてくれないんじゃないかって

思っていたくらいだ。

だから、こうしてわざわざ私の教室まで来てくれた事がすごく嬉しかった。

「ホント?」

「はい」

私が即答すると先輩は安心したように笑った。

そしてすぐに「んでき、なんで昨日はあいつと二人だったの？」と訊いてきた。

そこはやはり気になっていたみたいだ。

第37話 まさか……S? — 2 —

「昨日は四人で待ち合わせして、それからスポーツショップを回る
ことになってたんですけど、

意外に店舗数が多くて二手に分かれて行く事になったんです」

「それであいつと二人で？」

「はい」

「そっか……ごめんな、勝手に怒って」

「いえ……」

鈴とあいつが二人でいた理由は実に単純だった。

鈴は別に嘘をついていた訳じゃない。

（俺ってやっぱりバカ……）

「て、それより鈴っ」

「は、はいっ？」

「部活の時間……」

「あ、今日はちょっとお休みさせてもらったんです」

「えっ？　なんで？　どっか具合でも悪いのか？」

顔色は特に悪そうでもない。

けれど、もしかして風邪でもひいたのかと思った。

「なんか最近、膝が痛くて」

「膝？」

「佐藤先生が言うには多分、成長痛じゃないかって」

「あー、それ俺も中学の時になったなあー」

「先輩ですか？」

「うん、でもそれって身長が伸びてる証拠だよ」

「ホントですかっ」

「俺の場合は病院行くのが面倒臭くて放っておいたけど、母親が『家庭の医学』とかいう

やたら分厚い本で調べてさ、子供の成長期によく見られる症状なんだって言ってた」

「じゃあ、私も身長が伸びてるんですかね？」

「うん、だと思うよ」

「やったあー！ 毎日牛乳飲んでた甲斐がありました♪」

「毎日飲んでるのかっ？」

鈴が身長のことを気にして牛乳を飲んでいたのは知っていた。

しかし、まさか毎日飲んでいたとは……。

「はい、毎日、朝昼晩に飲んでます」

「そ、そんなに？」

しかも、朝昼晩て。

「変ですか？」

「い、いや……すごいなあーと思って」

牛乳が大嫌いな俺にはとても真似出来ない。



——翌日、昼休憩。

屋上で鈴を待っていると、なにやら紙袋を手に彼女がやって来た。

そして開口一番、「先輩、イライラするのはきつとカルシウムが足りないからなんだと思うんですよ」

と言った。

「へ？」

俺はかなり啞然とした。

（いきなり何を言うのかと思えば……）

「という訳で……コレ、飲んでください」

鈴はごそごそと紙袋の中を探り、俺に何かを手渡した。

「んっ!？」

びっくりした。

「それを飲めばカルシウムはもうバッチリですから」

「ちょ……鈴」

彼女がくれた物……それは俺の大嫌いな牛乳だった。

（もしかして昨日の逆襲かーっ？）

「ささ、一気に♪」

そう言ってにんまりと笑った鈴を見て実は意外と“S”なのかもしれない……そう思った。

「あう……鈴うっつ、昨日はごめんてば、もうあんな事で怒んないから……だから、

マジ、これだけは許して？」

「先輩、そんなに牛乳ダメなんですか？」

「うん……」

「しょうがないですねえー……じゃあ、こっちと交換してあげます」

すると、牛乳のかわりに今度は紙袋ごと俺にくれた。

「?」

中には俺がいつも学食で飲んでいるコーヒ―牛乳と意外な物が入っていた。

淡いピンクの花柄の可愛いペーパーカップの中にクッキーが詰めてあって

透明なギフトバッグとピンクのリボンでラッピングがしてある。

これは間違いなく手作りだ。

「これ、鈴が作ってくれたの?」

「はい、先輩、牛乳嫌いだって言ってたからチーズクッキーならどうかなー?」

と、思ったんですけどー……チーズ嫌いでした?」

少し上目遣いに俺の顔を見上げた鈴。

「ううん、チーズは好きだよ」

(……鈴、俺の事、そこまで考えてくれたんだ?)

「よかったー、チーズならカルシウムがいっぱい入ってると思って」

鈴はそう言うのとホッとしたように小さく笑った。

さっきまでの“Sな鈴”とはえらいギャップだ。

もしかしたら、さっきのSっぽいあの言動は照れ隠しで、態なのか
もしれない。

いや、多分きつとそうだろう。

そうに決まってる……そういう事にしておこう。

俺は自分の中で自己解決した。

「ありがとう。てか、俺も鈴にプレゼントがあるんだ」

「えっ」

「昨日は鈴に悪い事しちゃったからそのお詫びに。はい」

それは昨日、鈴と病院の前で別れた後、一人でこっそりと寄り道して買った物だった。

「そ、そんなのいいですよー」

鈴は俺が差し出した小さな袋を拒むように両手と首をブンブン振っていた。

「いや、全然たいしたモンじゃないから」

俺のプレゼントは本当にたいした物じゃない。

値段だって全然“プレゼント”にしてはお粗末だ。

だけど“気持ち”を伝えたかった。

俺がもっと大人だったら……、もっと……もっと豪華な何かをプレ

ゼント出来ただろう。

「で、でもー……」

それでも遠慮している鈴。

「まあまあ、いいから、いいから」

そう言ってちよつと強引に気兼ねしている鈴の手に渡した。

すると、鈴はやつと「あ、ありがとうございます」と言って受け取ってくれた。

掌に乗っている小さな小袋をじっと見つめる鈴。

そして、鈴は丁寧に着脱を解いていった――。

第37話 まさか……S? — 4 —

「あー、キティちゃんだあ♪」

和泉沢先輩からのプレゼントはハローキティのリストバンドだった。真っ白でフワフワなコットン生地に薄いピンクの刺繍でハローキティの顔が

小さくワンポイントで入っている。

「それだったら部活とか試合の時にも使えるかなーっと思って」

「はい、ありがとうございます……て、先輩、もう食べてるんですかっ?」

私が顔をあげると和泉沢先輩はさっそくチーズクッキーを食べていた。

「うんっ、おいひい♪」

モグモグとクッキーを食べる先輩はまるで子供みたいに可愛かった。

昨日、あんなに怖い顔で怒ってたのが嘘みたいだ。」

「先輩、お弁当食べたんですよね？」

「ああ、食ったよ。でも、デザートは別腹ってよく言うじゃん？」

「それって、女の子ならわかりますけど……。それに先輩って甘い物好きだったんですね」

「ケーキはあんまり食べないけどチョコとかクッキーはわりと食べるよ」

「じゃあ、今度また作って来ますね」

そう言う先輩は嬉しそうに「うんっ♪」と笑って頷いた。

「あ、そういえば膝大丈夫か？」

「はい、昨日病院で貰った薬を塗ったら、ちょっと楽になりました」
先輩は昨夜、病院から帰った後も心配して電話をくれた。

いつもは電話もメールも勉強の邪魔になっちゃいけないと思って控えているから

電話をくれた時はすごく嬉しかった。

嬉しくて胸がいっぱいになった――。

「今日は部活出るのか？」

「はい、病院の先生からは球拾いくらいなら大丈夫だって言われたので、

部活には出ようと思います」

「そっか、出ないなら一緒に帰れると思ったんだけどな……残念。

でも、無理はするなよ？」

心配そうな顔をした先輩。

「はい」

私がそう返事をする和泉沢先輩はまた柔らかい笑みを浮かべて優しく頭を撫でてくれた。

その感触にものすごく安心感を覚える。

（このまま時間が止まってくれたらなあ……）

そんな事を思っていると……、

「あー、ずっと鈴と一緒にいたいなー。時間止まんねえかなあー？」

先輩も同じ事を考えていた。

それがなんだがとっても嬉しかった――。

第38話 偶然と勘違い — 1 —

——十二月、冬休みに入ってから数日後。

彼方此方でクリスマスソングが流れる中、俺は隣にいる人物と歩調を合わせるように

少しゆっくり歩いていた。

気分は非常に憂鬱だ。

なぜって……

隣にるのが鈴じゃないから。

鈴と会えないから。

学校がある平日なら昼休憩に鈴と会える。

しかし、冬休みに入ってしまったって鈴は毎日部活があるし、

相変わらず日曜日也会ってこないからだ。

しかも今日はクリスマスイブ。

今日と明日は部活も休みだと言っていたのにまだ会う約束すら出来ていない。

「ねえ、大地君、プレゼント何がいいかなあー？」

そして今、俺の隣を歩いているのは十一月から俺の家庭教師をやってくれている

女子大生の加藤美夏さん。

クリスマス前だというのに三日前、彼氏と喧嘩をしたらしい。

それで仲直りも兼ねて明日クリスマスプレゼントを渡しに行こうと
考え、

そのプレゼント選びに俺は付き合わされているのだ。

「てか、俺、美夏さんの彼氏がどんな人なのか全然知らないしなあ
ー」

とか言って、実はこの時、俺は鈴のプレゼントの事で頭がいっぱいだった。

だって、明日は鈴の誕生日。

本来なら他人の彼氏のプレゼントを選んでいる場合なんかじゃないのだ。

「どんな彼氏かと言われればー、そうねー……」

しかし、美夏さんはそんな俺の心中をまったくわかっていない。

俺がどんな人かわからないと言ったもんだから、周りを見回して彼氏と同じ様な感じの人を捜し始めた。

（捜さなくていいっつの）

「あ、あの人。ホラ、今ちょうどあそこのブランド店の前にいる

カップルの男の人みたいな感じ」

そして数メートル先のブランド店の中に入っていくカップルを指差し、

「……て、剛史っ!？」美夏さんはその男が知り合いだったのか、驚いた顔をしながら二度見した。

「知り合い？」

「し、知り合いとゆーか……まさに彼氏。てか、知らない女の子と一緒にだ」

美香さんは眉間に皺を寄せた。

知らない女の子と一緒にとは、これはまた穏やかじゃない感じ？

しかし、次の瞬間、俺の心も穏やかじゃなくなった。

(鈴っ)

美夏さんの彼氏と一緒にいた女の子は鈴だった。

第38話 偶然と勘違い ー 2 ー

（何故？ どうして？ なんで鈴が？）

「いくら喧嘩したからって当て付けみたいにあんな中学生みたいな子と

遊ぶことないのにー」

美香さんは怪訝な顔で彼氏と鈴を見つめて……いや、睨んでいた。

（中学生じゃなくて高校生なんだけどな……て、そんなコトはどうでもいいか）

「もしかして、もう新しい女を見つけたとか？」

「いやいや、それはないでしょ」

だって相手の女の子は俺の“彼女”なんだし。

それにだいたい喧嘩したと言ってもまだ別れた訳じゃないのに。

「そんなに心配なら確かめてみればいいんじゃないっすか？」

「えー、どうやって？」

「フツ―に声を掛ける」

美夏さんの彼氏と鈴がどうして一緒にいるのか気になるし、

美夏さんの誤解を解く為にも俺は二人がいるブランド店に向かって歩き始めた。

「ちょ、ちょっと……大地君っ!？」

「まあまあ、黙って付いて来て♪」

「声掛けるって、一体なんて？」

「いや、だからフツ―に」

「“フツ―”て何よぉ？」

「そりゃ、まあ『よお』とか、『やあ』とか」

「はあゝっ？」

「じゃ、このまま遠くから眺めて悶々してる？」

ピタリと足を止めて振り向く。

「も、悶々て……」

すると美夏さんも立ち止まって彼氏と鈴がいる方にちらりと目をやった。

「だって、悶々としてたよー？」

「う……で、でも、ちょっとだけ心の準備をさせて。」

だって、声を掛けて本当に新恋人とかだったりしたら……立ち直れないから」

「大丈夫だと思うよー？」

「もおっ、他人事だと思ってー」

いや、俺にとっても全然他人事なんかじゃないんだけだな。

だって、ねえ？

ここであっさり『一緒にいる可愛い子は俺の彼女だよ』とバラしてもよかったのだが、

プレゼント選びに付き合わせている“罰”として、もう少し黙っている事にした。

「……よ、よしっ、行こうっ」

しばらくして美夏さんは両手に握り拳を作りながら顔を上げた。

（だから、そんなに気合いを入れなくても大丈夫だって）

俺は思わず笑ってしまいそうになった。

第38話 偶然と勘違い — 3 —

「なあ、女の子ってやっぱプレゼントは、こーゆーブランド物の方が嬉しいのかな？」

そうやって今、私の隣でちょっと高そうな指輪を見つめているのは、先日、うっかりクリスマス直前に彼女と喧嘩をしてしまったという義兄の

佐竹剛史君だ。

でも、喧嘩した後になんと言い過ぎたかと反省したらしく、

明日は謝りに行って一緒にクリスマスを過ごそうと、こうして一生懸命

プレゼントを選んでいるのだ。

「どうかなー？ 別にブランド物じゃなくても心がこもってればなんでも嬉しいと思うけど」

「えー、そんな事言われたら余計何をあげたらいいのか、わかんない

くなるじゃん」

だから電話で「私じゃ役に立たないかも」って言ったのに。

それなのに半ば強引に一人で選ぶよりはマシだからと呼び出したのは剛史君の方だ。

「鈴」

そして私も和泉沢先輩のクリスマスプレゼントは何にしようかと考えていると、

後ろからまさにその和泉沢先輩の声が聞こえた。

「あ、先輩」

「……ん？ 美夏っ!？」

先輩の声に振り向いた剛史君は和泉沢先輩の後ろから付いて来ていた女の子を見て驚いた。

「剛史君、お知り合い？」

「うん、えっと……彼女」

（という事は、この人が先日喧嘩した彼女さん？ でも、なんで和泉沢先輩と

一緒にいるんだろう？）

「大地君、この女の子と知り合いだったの？」

「うん、彼女」

「大地君の？」

「そそ」

「もう、なーんだ、そういう事？」

目の前で話している和泉沢先輩と剛史君の彼女さんはなんだかとても親しそうだった。

「……て、なんで大地君の彼女が剛史と一緒にいるの？」

「鈴ちゃんは俺のアニキの嫁さんの妹、つまり俺の義理の妹だよ」

「「へっ？」」

剛史君が私とどういう関係なのかを答えると、和泉沢先輩と剛史君の彼女さんは同時に声をあげた。

「そういう美夏の方こそ、鈴ちゃんの彼氏とどういう関係？」

すると今度は剛史君がちょっと“何か”を疑っているみたいに彼女さんに質問した。

「大地君は私の教え子よ」

「あー、カテキョの？」

「うん、十一月から教えてる子」

なるほど。

そういえば、和泉沢先輩が十一月から週に三日、家庭教師が来ているんだと言っていた。

「てか、なんでこんな時間に教え子と一緒にいるんだ？ カテキョのバイトは夕方からだろ？」

しかし、剛史君はまだ“何か”を疑っていた。

「そ、それはー……」

彼女さんもどうにも歯切れが悪い。

そんな反応をされると“先生と教え子”という関係以外なにかあるのかと疑ってしまう。

「あのー、とりあえず立ち話もなんなので場所移りませんか？」

そして気まずい雰囲気の中、そう口を開いたのは和泉沢先輩だった。

第38話 偶然と勘違い ー4ー

「先輩、剛史君と美夏さん、喧嘩中みたいなんですけど大丈夫ですかね？」

時間はちょうど十二時。

一緒にお昼ご飯を食べる事になった私達四人は前列を剛史君と美夏さん、

その後ろを私と和泉沢先輩が歩いていた。

「知ってる。でも、彼氏が一緒にいるのに俺と美夏さんで歩くのになー」

「そうですけどー」

目の前の二人に視線を向けるとビミョーな距離を保ちつつ会話もな
いまま歩いている。

「そういえば、鈴と剛史さんは買い物？」

「はい。と言っても剛史君のお買い物に付き合わされてたんです」

「?」

「剛史君、美夏さんと仲直りしようと思って明日プレゼントを渡すつもりで

選んでたんですよ。でも、一人じゃ選べないからって私が付き合
わされてて……」

「なんだ、じゃあ、俺と一緒になんじゃん。俺も美夏さんに頼まれて
一緒に剛史さんのプレゼント選んでたんだよ」

「あはは、そうだったんですかー」

「そうとも知らずあの二人は……」

和泉沢先輩はそう言うのと、私達とは違って手も繋がらないで歩いてい

る剛史君と美夏さんに

視線を移してククッと笑った。

「あの二人って、付き合ってどれくらいなんだろうな？」

「私が聞いた話ですと、大学一年の夏かららしいですよ？　だから二年半くらいですかね」

「どうりで喧嘩して仲直りするのも同じ方法を考え付く訳だ♪」

「ふふ、そうですね」

（喧嘩はしても仲直りしたい気持ちやプレゼント選びに一生懸命になれるなんて、

素敵なカップルだな……）

付き合ってまだ三ヶ月ちよつとの私と和泉沢先輩。

剛史君と美夏さんみたいに素敵なカップルになれるといいな……—
—。

そういえば、和泉沢先輩と付き合い始めてこんな風に一緒に街を歩くのは初めてかも。

今まではお互いの試合があったし、先輩がサッカー部を引退してからは

受験勉強に専念して欲しくて、日曜日にも会わないようにしていた。

改めて考えると“デートらしいデート”なんてした事がなかった気がする。

私がそんな事を考えていると、

「鈴、腕」

先輩が繋いでいた手を放して、私の手を自分の腕に絡ませた。

さっきまでよりも私と先輩の距離が近づく。

「この方があったかい♪」

先輩はが柔らかに微笑む。

「はい」

だから私もその笑顔に応えるように笑みを返した――。

第38話 偶然と勘違い — 5 —

イタリアンレストランに入った俺達四人は俺と剛史さんが並んで座り、

その向かい側に鈴と美夏さんが並んで座った。

「……」

「……」

「……」

「……」

美夏さんは俺といった理由をどう話そうか考え、剛史さんはそれをちょっとムスツとした顔で待ち、しかしそれがまた余計に話しくくしていた。

そして俺と鈴はそんな二人の様子を固唾を吞んで見守っていた。

「つ、剛史君、そんな怖い顔してたら話し難いよ……」

しばらくの沈黙の後、見兼ねた鈴が口を開いた。

「え、あ……うん」

すると、剛史さんはちよつとだけ表情を崩した。

「てか、鈴ちゃんは気にならないの？」

「何が？」

「彼氏君と美夏が一緒にいた理由」

「それならもう先輩に聞いたから」

「い、いつの間に？」

「さっきここに来る途中に」

「え」

剛史さんは美夏さんの事で頭がいっぱいだったのか、俺達が後ろを歩きながら

話していた内容がまったく耳に入っていなかったらしい。

そんなに距離をとっていなかったからもしかして聞こえてたかも？
って、

思っていたんだけど、そんな事はなかったようだ。

「先輩と美夏さんが一緒にいたのって剛史君と同じ事考えてたみたいだよ？」

鈴がそう言うのと剛史さんは驚き、美夏さんに視線を向けた。

「そ、そうなの？」

「え……てか、同じ事って？」

美夏さんは“同じ事”と言われてもピンと来なかったのか不思議そうな顔で

剛史さんを見つめ返した。

まさか剛史さんが自分とまったく同じ様に明日仲直りしに会いに行こうと

考えていたなんて思っていなかったからだろう。

「剛史さんも美夏さんと仲直りしたかったって事だよ」

「……そ、そうなんだ」

美夏さんは俺がそこまで言うと言った気が付いた。

その後――、

美夏さんと剛史さんはその場では「ごめん」とは言わなかったけれど、

普通に笑いながら自然に話し始めた。

すっかり仲直り出来たみたいだ。

それにレストランを出る時も剛史さんは「この間は俺も言い過ぎたからここは俺が」と言っ

て美夏さんにサイフすら出させなかった。

て、俺達にもサイフを出させてくれなかったけど――。

第39話 Happy Birthday — 1 —

——翌日、十二月二十五日。

今日はクリスマス……と、私の誕生日。

（先輩と会いたいなあー……）

でも、和泉沢先輩とは昨日も会ったばかりだ。

予期せぬ偶然だったけど。

受験勉強の邪魔になるってわかっているけれど、やっぱり誕生日くらいは会いたいって思う。

それにクリスマスだし。

（これってやっぱり我が俤かなあー）

……と思いつつ、携帯に手を伸ばす。

電話を試してみようか、どうしようか。

だけど先輩はきつと勉強してるだろうし、昨日も何も言っていなかったし。

（でも、クリスマスプレゼントを渡すだけなら……）

そして携帯の画面を見つめたまま悶々としていると突然、着メロが鳴った。

「あっ」

“和泉沢先輩”

画面に映った着信表示に思わず目を疑った。

気持ちを落ち着かせる為に大きく深呼吸をして通話ボタンを押すと

和泉沢先輩の優しい声が聞こえてきた。

『俺』

「は、はいっ、こんにちは」

でも、全然落ち着けてなかった。

『……？　　なんか、今忙しい？』

和泉沢先輩も私の声がどこか不自然に聞こえたらしい。

「あ、いえ」

『ちょっと、時間ある？』

「はい」

『じゃあ、今から会わない？ 夕方までだけど』

「……は、はいっ」

（やったーーーーっ！！）

和泉沢先輩からのお誘い。

私は嬉しくて声が裏返りそうだった。



——電話を切った後、急いで仕度をする。

夕方までの数時間とは言え、ちゃんと待ち合わせをして会うのは初めてだ。

服はこれで大丈夫かな？

髪は変じゃないかな？

クリスマスプレゼントはちゃんと持ったっけ？

玄関の姿見で全身を映して確認した後、髪を手櫛で整える。

そして、私は自転車のペダルを勢い良く漕ぎ始めた――。

いつもと同じ駅までの道のり。

なのに、すごく長く感じる。

でも、不思議と寒さはまったく感じていなかった。

“一秒でも早く先輩と会いたい……っ！”

そう思って自転車のスピードを上げるけれど、なかなか進まない。

気持ちばかりが焦って空回りしている感じだ。

こんな時、空が飛べたらいいのにな――。

第39話 Happy Birthday — 2 —

俺と鈴は駅前のコーヒーショップの前で待ち合わせをした。

駅までは自転車で十分くらい。

だけど、早く鈴に会いたくて全速力で自転車を漕いでいるのに、いつもよりやけに道のりが遠く感じる。



「はあ、はあ……鈴っ」

コーヒーショップの前には既に鈴の方が先に来ていた。

そういえば鈴の家は駅から自転車で五、六分だって言ってたっけ。

「どうしたんですか？　そんなに息を切らして」

「はぁ、はぁ……早く会いたかったから、人生MAXの力で……漕いで来た」

「もうー、また先輩ったらー」

鈴はそう言っているとキャハハッと笑った。

（いや、マジなんだけどっ）



コーヒーショップに入ると中は意外と混んでいた。

クリスマスだからか、カップルばかり。

どちらかというと俺達みたいな高校生とか大学生が多かった。

「それにしても昨日はびっくりしたよ。まさか美夏さんの彼氏が

鈴の義理のお兄さんだったなんて。てか、鈴ってお姉さんいたんだ？」

「はい。後、兄もいます」

「え、何人兄妹？」

（まさか大家族？）

「三人です。一番上がお姉ちゃんでその次がお兄ちゃんが一番下が私です」

「へえー」

確かに鈴は“末っ子タイプ”。

というか“妹タイプ”と言った方が正解かな？

「先輩は何人兄弟なんですか？」

「俺は一人っ子、だから兄弟がいる人が羨ましいって思う時があるよ」

「でも、何でも買って貰えるからいいじゃないですか。私なんて子供の頃は

全部お姉ちゃんのお下がりばかりでしたし。

たまにお兄ちゃんのお下がりまで回ってきてました」

「お下がりなら俺もあるよ？ 親戚の兄ちゃんもちよっただけサッカーやってたから

大きくなってサイズが合わなくなったサッカーウェアとかスパイクとか貰ってたし。

小学校の頃はだいたいお下がりを使ってたよ」

「えー、なんか意外です」

「だけど流石に兄弟喧嘩とかはした事がないな」

「私も兄弟喧嘩はあんまりないです。お姉ちゃんは十歳も上だし、お兄ちゃんも六歳上だから喧嘩になるような事がなかったんですよ。」

「というか、相手にされてないって感じでした」

「あはは、それは相手にされてないんじゃないかと、それだけ歳が離れてたら」

テレビのチャンネル争いにしても、おやつの取り合いにしても

可愛い妹に譲ってあげようって気になるよ」

だって、鈴は妹じゃなくても本当に可愛いもん。

第39話 Happy Birthday ―3―

「お待たせ致しました。五十五番の番号札をお持ちのお客様―」

コーヒーショップの店員さんの声が店内に響くと和泉沢先輩が

「取りに行ってくる」と立ち上がった。

ここはセルフサービスのお店だけど、今日は混んでいるから

オーダーした時に番号札を渡されたのだ。

先輩がテーブルに戻ってくるとトレーにはキャラメルラテとエスプレッソ、

苺のショートケーキが二つ乗っていた。

「あれ？先輩、このケーキ……」

私がオーダーしたのはキャラメルラテだけだ。

先輩も普段はあまりケーキを食べないって言ってたし。

「今日は鈴の誕生日だろ？　だから。それにクリスマスだし」

和泉沢先輩はニッと笑うと私の目の前にケーキを置いた。

「ありがとうございます」

お店に入った時に「先に席に座ってて」と言ったのは、きつとこっそり

苺のショートケーキをオーダーしようとしたからだろう。

「後、クリスマスプレゼント」

そう言って和泉沢先輩が私にくれた物はちよつと大きくて重さもそれなりにあった。

(????)

私は中身が何なのかさっぱり見当が付かない。

クリスマスらしい赤くて可愛いラッピングを丁寧に剥がしていくと中に入っていた物は

真っ白なジュエリーボックスだった。

「わぁー、可愛い♪」

そしてさらに中を開けてみると、紺のフリルリボンがかかった小さなプレゼントがもう一つ入っていた。

(……え?)

「こっちは誕生日プレゼント♪」

(うそっ!?)

私はまさかクリスマスプレゼントと誕生日プレゼントが別々にあるだなんて

思ってもみなかった。

紺色のリボンがかかったプレゼントの中身は、トップパーツが赤いベネチアンガラスで出来た革紐のチョーカーだった。

「うわぁー、きれいーい」

「気に入ってくれた？」

「はい、ありがとうございます」

「よかった。今はまだこんなおもちゃしか買えないけど、俺がもっと大人になったら」

このジュエリーボックスの中を本物の宝石でいっぱいにするかな♪」

和泉沢先輩はそう言うと言いつつピースサインをしてニカッと笑った。

「鈴、着けてあげる」

そして、先輩がチョーカーを手に取った。

「はい、お願いします」

髪を手で纏めて軽くあげると先輩が私の首元に手を回して顔を近づけて来た。

……ドキーンッ……、

「誕生日、おめでとう」

先輩の優しい声が耳元で聞こえ、私の胸の高鳴りはMAXに達した。

「……あ、ありがとうございます」

顔が赤くなったのが自分でもわかった。

彼に心臓の音が聞こえてしまうんじゃないかと思い、余計にドキドキして、

震えそうな声になり、誤魔化す様に俯くと先輩に「鈴、顔上げて」と言われた。

「は、はい……」

……と、返事をするけれど顔が上げられない。

すると、和泉沢先輩の大きな手が私の頬をそっと包み込んで、顔を上に向かせた。

「可愛い♪ よく似合ってる」

「……っ」

先輩にじっと見つめられ、私はますます顔が赤くなった――。

第40話 Happy Merry Christmas — 1 —

「……あ、そ、そだっ、私も先輩にプレゼントがあるんですっ」

チョーカーを着けた後、あまりに似合っていて可愛すぎる鈴に見惚れていると、

今度は鈴が俺にプレゼントがあると言った。

「クリスマスプレゼントです」

「わぁ、ありがとう」

（……て、デカッ）

鈴からのプレゼントは思ったより大きいものだった。

会った時からなんか大きなショッピングバッグを持っているなと思っていたけれど、

まさかそれが俺へのプレゼントだとは思わなかった。

鈴から貰ったどこかの雑貨屋らしきピンクのショッピングバッグの中には

赤と白のストライプのリボンでラッピングされた物とは別に、もう一つ紙袋が入っていた。

それは俺もよく知っている有名なスポーツ用品店の物だ。

(え? 二つ?)

スポーツ用品店の紙袋の中はいつもと違ってクリスマスプレゼント用に

ラッピングされた物が入っていた。



「い、これって……っ」

プレゼントの中身はサッカーチームのユニフォームだった。

「先輩が好きな選手の人ってその背番号でよかったですか？」

「う、うん。まさにこれだけど、よく手に入ってたなあー？」

「それがですねー、昨日、私がお店に行った時にたまたま

入荷したばかりだったですよー」

「マジで？」

「はい、それで確か先輩が好きだって言ってた選手がいるチームじゃないかなあー」

「と思って。でも、選手の名前もよく覚えてなくて店員さんに聞いたら

「これじゃないかな？　って教えてくれたんです」

「す、すごい幸運……」

「なんか店員さんも運が良かったねって言ってたんですけど……、

これってそんなに手に入らないものなんですか？」

「うん、このユニフォーム、今、ショップでもなかなか手に入らないし、

ネットオークションでも高額で取引されてるんだよ」

「えー、そうなんですかー？ 全然知らなかった」

鈴はこのユニフォームがどんなに入手困難な物かまったくわかっていなかったみたいだ。

「すごいよ、鈴、ありがとうっ！」

「えへへ、喜んで貰えてよかったです♪」

鈴は嬉しそうに笑うと、

「後、こっちはおまけです」

もう一つの赤と白のリボンの方を指差した。

（おまけ？）

リボンを解き、ギフトバッグの中を覗くとモコモコした物が見えた。

「お？」

（ぬいぐるみ？）

そのモコモコした“何か”を出してみるとそれはサッカーシューズのぬいぐるみスリッパだった。

「あはは、スパイクだー。ちゃんとマイキのマークも入ってるー」
うけた。

思わず笑ってしまった。

「勉強する時とか、コレ履いてたら暖かくていいかなー？　と思っ
て」

確かに『頭寒足熱』って言うもんな。

足元が冷えないように暖房をつけてたら頭がボーツとしてくるし、
かと言って我慢してたら寒すぎて勉強が捗らない。

「うん、コレいいかも」

俺が風邪をひかない様に考えてくれたのかな？

しかもスパイクをチョイスするあたりが鈴らしい。

「ありがとう、鈴」

そして店内だという事も忘れ、俺は思わず鈴にキスをした――。

第41話 クエストと報酬 その2 — 1 —

——年が明けて、一月。

いよいよ本命の大学の試験日が近づいてきた。

いつもは夕方から来る家庭教師の美夏さんも、今日から三日間、最後の追い込みで昼から来てくれる事になっている。

そして俺の部屋に入るなり、美夏さんは開口一番

「大地君、君にクエストを与えようっ」と、腕組みをした。

「は？ クエスト？」

（また訳のわからん事を……）

「今度受ける大学に絶対合格する事！」

「え……そんなクエストにしなきゃいけない程、俺、やばいんすかっ？」

「報酬は、なんと……っ」

（あ、スルー？）

「鈴ちゃんの超レア画像！」

「っ!？」

（なにっ）

「お？ 食い付いた？」

美夏さんはにやりと笑った。

「てか、なんで美夏さんがそんなの持ってるの？」

「ふふん、私の彼氏が鈴ちゃんの義理のお兄さんだっていう事を忘れたのかしら？」

（入手経路は剛史さんか）

「いや、それより今度受けるトコ、俺やばいの？」

学校の先生には大丈夫だろうって言われたんだけど」

「んー、ちょっとギリギリかも？」

「マジっすか……」

そして俺は三日間、それはもう人生で初めて今まで以上に死に物狂いで猛勉強をした。



おはようございます。

—
—
—
—
—

試験、頑張ってくださいっ！

鈴

—
—
—
—
—

試験日当日の朝、ホテルの部屋を出た時に鈴からメールが届いた。

—
—
—
—
—

おはよう。

メールありがと。

頑張るよ。

D a i c h i

— — — —

本当は一週間くらい前まで“やっぱり別の大学に願書を出せばよかった”

なんて思っていた。

試験を受けるのをやめようかな……とも。

実は今日受験する大学は都内じゃなくて県外で家からも距離がある。

だから前日からホテルに泊まっていたのだ。

しかし、もし合格すれば本命だから当然ここに通う事になるし、

家を出て一人暮らしする事になるかもしれない。

そうならば鈴と毎週会うのは難しくなるわけで……そんな訳で俺は四日前まで

既に合格通知が来ている滑り止めで受けた都内の大学に行こうかとも考えていた。

鈴にもその事は詳しく言っていなかったし。

第41話 クエストと報酬 その2 — 2 —

だけど五日前、鈴から『五秒だけ会って貰えませんか?』と電話があった。

そして待ち合わせ場所のすぐ近くの公園に行くと、鈴は

「邪魔じゃなかったら持って行って下さい」と小さな白い封筒を俺に渡して、

本当に五秒だけで帰ってしまった。

俺はしばし啞然とし、渡された封筒に目をやった。

すると、それは湯島天神のお守りだった。

俺の為にわざわざ湯島天神まで行って来てくれたのだ。

鈴がこんなに応援してくれているのに本気を出さない訳にはいかない。

しかも、美夏さんからのあのクエスト。

報酬は剛史さん経由で手に入れた鈴の超レア画像とか言っていたけれど……、

一体、どんな画像なんだろうか？



大学まではホテルから歩いて十分程だった。

試験会場に入ると、かなり早く着いたはずなのに既に何人かの受験生が席に座っていた。

カバンから受験票と筆記用具を出して、そして鈴から貰った湯島天神のお守りを

制服の内ポケットに入れた。



――数日後。

今日は先日、受験した本命の大学の合格発表の日だ。

「先輩、行きますよっ」

そうやって俺の手を引きパソコンルームに向かってズンズンと足を進める鈴。

大学のwebサイトでも閲覧出来る合格発表を昼休憩に一緒に見よう

俺の教室に迎えに来たのだ。

「落ちてたらちゃんと慰めてね？」

「大丈夫ですよー。きっと受かってます」

「いや、でもなー……美夏さんにギリギリだって言われたし……」

問題自体は自分でも結構出来た方だと思う。

しかし、ここで余裕をぶっこいて落ちていたら立ち直れない。

「先輩、到着しましたよ」

鈴はそう言っているとパソコンルームのドアをガチャリと勢いよく開け、

一番奥のパソコンの前に俺を座らせた。

「……鈴、俺が大学のサイトまでアクセスするから合格してるかどうか、

見てくれる？」

「はい」

鈴は俺の隣に腰掛けると祈るようにパソコンのモニターを見つめた。

「せ、先輩……っ」

鈴はしばらくパソコンのモニターを見つめた後、少し焦ったように口を開いた。

（鈴のこのリアクション……もしかして、落ちた？）

「あ、あのっ」

「鈴、遠慮しないでハッキリ言ってくれ」

「は、はい、えーと……」

「……」

俺はごくりと息を呑んだ。

第41話 クエストと報酬 その2 — 3 —

「受験番号がわかりません」

「……え？」

鈴が言った言葉に拍子抜けした。

かなり。

「先輩の受験番号、何番ですか？」

そういえば、まだ何番か言っていなかった気がする。

「あー、えーと……2166番」

「了解しましたっ」

鈴はそう言うと、再びモニターに視線を移し「2166番、216

6番……」と

小声でブツブツ言いながらびっしり並んだ数字の中から俺の受験番号を捜し始めた。

そして数十秒後――、

「あっ」

「っ!？」

鈴の声に反応して思わずビクリとした。

「先輩、ありましたっ」

「えっ」

「2166番ですよね？　ほら、ここ。私の目が節穴じゃなければ

間違いなく2166番ですっ」

そう言ってモニターを指す鈴。

俺はその指先にある数字を恐る恐る顔を上げて確かめた。

(あ……)

「……あつた」

俺の受験番号・2166番があつた。

(受かった……っ)

合格だ。

「先輩っ、おめでとうございますっ」

「ありがとうっ、鈴のおかげだよ」

「先輩が一生懸命頑張ったからですよ」

「そりゃ、俺だって頑張ったけど鈴だっていっぱい応援してくれたし、

それにお守りがなかったらきっと俺、頑張れなかった」

というより、きっと手を抜いていた。

合格したのは嬉しい。

第一志望の大学だったし、鈴もすごく喜んでくれているし。

でも、これで俺が卒業したら鈴と中距離恋愛になる事が確定した。

嬉しいやら、哀しいやら。

ちょっと複雑だ……。



—
—
—
—

U大学、合格したよ！

(
△、
)
v

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

その日の放課後、美夏さんにメールした。

—
—
—
—

本当？

おめでとうっ！

M i k a ♪

—
—
—
—

—
—
—
—

やれば出来る子だから♪

(1,)
v

D a i c h i

—
—
—
—

—
—
—
—

ふふふ、これで時給が

上がる。

（「」）にやり

M i k a ♪

—
—
—
—

（……え？）

—
—
—
—

実は教え子の合格率で

時給が上がるから、

大地君なら全然余裕で

受かると思ってたんだけど、

念の為危ないって

言っただよねー。

てへっ ♪

(※
ダ
※)

M
i
k
a
♪

—
—
—
—

美夏さんのレスに思わず啞然とした。

—
—
—
—

・
・
・
(
ダ
)

D
a
i
c
h
i

—
—
—
—

—
—
—
—

まあ、無事に合格

出来たんだし、

よかった、よかった♪

(^▽^)

Mika♪

—
—
—
—

そりゃ、まあ、そうだけど……

—
—
—
—

じゃあ、約束通り

ご褒美あげる。

(^ー^)

Mika♪

—
—
—
—

そして、美夏さんから返って来たメールには添付画像が三枚。

（鈴の超レア画像……）

俺はドキドキしながらメールに貼り付けられたURLをクリックした。

（ふおおっ!?!）

その三枚の画像はどれも俺が見たことない鈴だった。

—
—
—
—

今年のお正月、

剛史の家に鈴ちゃんの

家族が年始の挨拶に

来た時のなんだったー。

せっかく可愛い格好

してるから大地君に

見せようって言って、

剛史が写メ撮ったみたい。

M i k a ♪

— — — —

三枚の超レア画像はどれも振袖姿の鈴だった。

薄いピンクと黒の暈し染めの桜模様で、それが鈴の可愛らしいイメージと

またぴったりだった。

一枚目の画像は剛史さんの家の前、二枚目は剛史さんの家族と

鈴の家族と一緒に初詣に行ったと思われるどこかの神社。

さらに三枚目はアップにした髪にうつすらとメイクした鈴の笑顔だった。

今回の報酬は確かに超レア画像だった。

第42話 大人な彼女 — 1 —

——三日後。

U大学の合格通知が家に届いた。

その日の夜、両親と俺とで家族会議。

議題はもちろん、大学の事だ。

……とは言え、本命だったU大学に合格した今、話し合う事と言え
ば、

『U大学に通うにはどうするか?』の一つだけ。

家からU大学までは電車で片道三時間弱。

頑張って家から通ったとしても往復で六時間もかかる。

そんな訳で自ずと実家を出て一人暮らしという事に決定した——。



——翌日、昼休憩。

「先輩、どうしたんですか？　どこか具合でも悪いんですか？」

鈴はすぐに俺の様子がおかしい事に気が付いた。

「いや、大丈夫……」

「……」

そう答えても鈴は黙ったまま心配そうな顔をしていた。

（鈴にちゃんと言わなきゃ……）

でも、言ったら鈴はなんて言うかな？

何ヶ月も会えない程遠距離ではないにしろ、今までみたいに
会いたい時にすぐ会えるわけじゃない。

もしかしたら、俺とはもう付き合えないと言うかもしれない。

「……鈴」

それでも、言わなきゃ……。

「はい」

「俺、四月から一人暮らしする事になったんだ」

「そう、ですか」

鈴は意外に驚く様子もなかった。

「大学まで通うのに実家からだとか道三時間くらい掛かるから……」

「……」

「だから、もしかしたら……いや、多分毎週会えないと思う」

「……はい」

「ごめん……今まで、ちゃんと言わなくて……」

「……」

鈴はやっぱり怒っているのか黙っていた。

しかし、しばらくの沈黙の後、

「なんとなく、そういう事になるんじゃないかなって思っていました」

と言った。

(……っ?)

「先輩が受ける大学の事、実はちょっとだけ調べてみたんです。

そしたら、通うのに三時間くらい掛かるってわかって……だから
きつと

合格したら大学の近くで一人暮らしする事になるのかなー？
っ
て、思っていました」

「……そっか」

鈴はわかっていた。

わかってて俺が第一志望の大学に合格出来るようになって応援してく
れていたんだ。

(鈴……ごめんな。でも、俺、鈴とは別れたくない……っ)

第42話 大人な彼女 ― 2 ―

それから和泉沢先輩は少し間、考え込んでいた――。

私はその先輩の横顔に不安を覚えた。

「鈴はやっぱり毎週会えないと嫌？」

すると、思い切ったように先輩が言った。

そりゃあ、会えるなら毎日だって会いたい。

だけど、それは無理な話で。

それがわかっているから、今まで受験勉強の合い間に先輩が

「会いたい」と言ってもなるべく会わないように我慢してきた。

先輩が本命の大学に受かって一人暮らしするようになった時の為に。

我慢出来るように……。

「大丈夫です」

だから、そう答えるのが精一杯だった。

「……先輩、は？」

でも、先輩はどうなんだろうか？

「俺は……」

すぐに返って来ない返事。

面倒臭くなるのが目に見えてるから別れよう……とか言われちゃうのかな？

「毎週は会えないかもしれないけど、鈴とは別れたくない」

だけど、和泉沢先輩は私の目を真っ直ぐに見つめて言った。

(っ!?)

「メールだって電話だってするし、鈴に会いになるべく帰って来る」

(先輩……)

「……ダメ、かな?」

私は首を横に振って答えた。

「私も会いに行きます」

全然ダメなんかじゃない。

「だから、先輩の新しいお家、ちゃんと教えてくださいね?」

そして私がそう言うと、先輩は「うん」と笑ってくれた。

「私……先輩からもう付き合えないって言われたら、どうしようか
と思ってました」

「ええー、俺がそんな事言う訳ないじゃんつ。

てか、逆に俺は鈴の方が嫌だっと思うかと思ってた」

「そ、そんな事言いませんよー。そりゃ、会えないのは寂しいし、

辛いですけど……三時間電車に乗ってれば会えるんですし、

思い切ってお互い一時間半くらいの間地点で会うのも有りだと
思うんですよ」

「ちゅ、中間地点……?」

先輩は何だか変な顔をした。

「あ、あれ？ 駄目ですか？」

「駄目じゃないけど、それはー……どうなんだろう？」

「だって、三時間後じゃなくて半分の時間の一時間半後に会えちゃうんですよ？」

「まあ、そういう意味では有りっちゃ、有りなのか。」

んー……そうだなー、例えばお互いあんまり時間が作れない時とかは

そういうのも視野に入れた方が会う回数が増えるもんな？

じゃあ、中間地点でなるべくゆっくりデート出来そうな所、今度調べとくかな」

先輩はそう言うのにっこり笑った――。

第43話 モテ期? — 1 —

「あの、和泉沢先輩っ」

卒業式の前日。

放課後、帰宅しようと駅に向かって歩いていると、後ろから女の子に声を掛けられた。

俺の事を“先輩”と呼んだという事は後輩か？

とりあえず足を止めて振り向くと二人組みの女の子達が近寄ってきた。

「先輩、第二ボタンくださいっ」

「は?」

「先輩の第二ボタンが欲しいんです」

(……ウソだろ?)

目の前の女の子達は信じられない事に俺の第二ボタンをくれと言ってきた。

しかし、俺が第二ボタンを貰って欲しい女の子は一人だけだ。

「ごめん、もう先約がいるから」

「そうですか」

女の子達は意外にあっさり引き下がった。

一体、なんだったんだ？



そして、翌日――。

卒業式の当日も数人の女の子から同じ様に第二ボタンをくれと言われた。

（ひょっとして……まさかのモテ期か？）

「おはよう、イズミ。どうしたの？　にやにやして気持ち悪い」

教室に入ると、いきなり織田ちゃんに言われた。

「おいっす。てか、気持ち悪いって……失礼な」

「だって、無言でにやけた顔しながら教室に入って来るんだもん。怖いよ」

「俺、そんなににやけてた？」

「うん、なんかいい事でもあったの？」

「いやー、なんかよくわかんねえんだけど、俺、モテ期みたい♪」

「はあ〜？」

「昨日から数人の女の子に『先輩、第二ボタンください』って言われてさー」

「へえー、それで鼻の下伸ばしてんだ？」

「伸びてねえし」

「伸びてたよー、その証拠ににやにやしてたじゃん」

「し、してない」

そりゃあ、誰だってこんな状況、悪い気はしないだろう。

鼻の下だって多少は伸びる……事もあるだろう。

「鈴ちゃんに言いつけちゃおっと♪」

「っ！」

それはマズい。

「いや、別に俺、第二ボタンはまだ誰にもあげてないし」

「当たり前でしょ？ そんな子達にあげてたら、それこそホントに鈴ちゃん泣くよ？」

織田ちゃんはそう言うのと呆れたように溜め息を吐いた。

「あのさ、イズミは何にも知らないみたいだから教えてあげるけど、その声を掛けてきた子達って多分、全員“第二ボタンコレクター”だよ」

「え……何、それ？」

「要するに卒業生の第二ボタンを誰彼構わず集めて何個集めたか自慢するのよ」

「へ？ 意味がわからん」

「つまり、早い話がイズミはモテ期なんじゃなくてただの“カモ”」

「カ、カモ〜？」

（マジか……）

「そーゆー子達はどれだけ第二ボタンを貰ったかを競って遊んでるだけなんだから、

絶対あげちゃダメよ？」

「お、おう」

「まあ、イズミは大丈夫だとは思ってたけど、でも、さっきのやけ様だと危なかったねー？」

織田ちゃんはそう言うとき意地悪そうにププツと笑った。

少しでも浮かれた俺がバカだった……。

しかし、その“バカな男”は俺だけじゃなかった。



「おいつすー♪」

卒業式の後、シゲが俺達の教室にやって来た。

「おい、シゲ……おまえ、第二ボタンどうしたんだ？」

超ご機嫌顔のシゲの学ランには第二ボタンがなかった。

「あ、気付いちゃった？」

（ま、まさか……）

「さっき、その廊下でさー、数人の女の子達に囲まれてもう大変♪

俺の第二ボタンを巡って争奪戦があったんだぜー？」

で、にやにやしながら答えるシゲ。

「「……」」

俺と織田ちゃんは顔を見合わせた。

「大地、俺、もしかしてモテ期なのかなあ？」

「さ、さあ？」

やばい……笑いが出る。

横を見ると織田ちゃんも必死で吹き出しそうになっているのを堪えていた。

「この後、女の子に囲まれて告白合戦とかになったらどうしよう？」

「知らねえよー」

駄目だ。

可笑し過ぎる。

「俺を巡って女の子達が喧嘩になったら困るしな？」

(くうく、も、もう駄目だ)

「「ぎゃっはははははーっ」」

そして、とうとう俺と織田ちゃんは同時に吹き出した。

「何だよ、二人ともー」

「い、いや、なんでもないっ」

「そうそう、なんでもない、なんでもない♪」

「もしかして俺がモテ期だから羨ましいのかー？」

シゲよ、もうやめてくれっ。

笑いが止まらん。

「シゲ、おまえって幸せな奴だなー」

世の中、知らない方が幸せな事もある。

こいつは俺よりバカだった――。

第44話 第二ボタン ー1ー

卒業式が終わって部室棟の前で和泉沢先輩を待っていると、しばらくして昇降口から先輩が出て来た。

（あゝあ……こうして和泉沢先輩の制服姿を見るのも今日で最後なんだ……）

私は遠くから段々と近づいてくる先輩の姿を目に焼き付けておこうとじっと見つめていた。

和泉沢先輩とは、これからまたしばらく会えそうもない。

引っ越しと大学へ通う準備で忙しいから。

私も春休みの間はずっと部活があるし。

だから会えなくても寂しくならないように、我慢出来るように……。

そして後、十数メートルまで近づいて来たところで先輩は数人の女の子達に

声を掛けられていた。

私は思わず部室棟の影に隠れた。

（……あ、別に隠れる必要なかったかも）

そんな事を思いつつ、先輩と女の子達が気になり、部室棟の影からちょっとだけ顔を出して見た。

すると、女の子達はすぐにいなくなった。

（あれ？　なんだったんだろ？　卒業祝いのプレゼントを渡しただけだったのかな？）

「鈴」

先輩が呼ぶ声がして部室棟の影から私が顔を出すと、

「何してんの？」

先輩は首を傾げた。

「かくれんぼデス」

「誰と？」

「先輩と」

「なんで？」

「ファンの女の子達に囲まれてたからです」

「ファンじゃないよ」

先輩はそう言って私に手招きをすると、柔らかい笑みを浮かべた。

「さっきの女の子達、なんだったんですか？」

「コレクターの皆さん」

「？」

（何それ？）

「第二ボタンコレクター”って知らない？」

「名前に第二ボタンを集めてる人ですか？」

「うん、そう」

（へえー、そんな子達がいるんだ？）

「織田ちゃんが言うには、そういう子達はどれだけ第二ボタンを集めたか競って

楽しんでるんだってさ」

そう言った和泉沢先輩の学ランには、もう第二ボタンがなかった。

「っ」

最悪だ。

（うそおー……第二ボタン、貰いたかったのに……）

こんな事なら事前に“予約”でもしておけばよかったと私は激しく後悔した。

「シゲはまんまとその子達に第二ボタンをあげちゃったみたいだけど」

「……」

（先輩だって、あげてるじゃない）

「しかし、第二ボタンばっか集めて自慢して、その後はどうするんだろうなー？」

そう言いながら正門に向かって歩き始めた和泉沢先輩。

「……」

私は無言でその後を追った。

そして、正門の手前で今度は別の女の子達が近づいてきた。

「先輩、第二ボタンくださいっ」

「残念ながら、もうない」

和泉沢先輩がそう答えるとコレクターらしき女の子達は「次っ」と言って、さっさと離れて行った。

「……」

（先輩、あんな子達にあげちゃったのー？）

第44話 第二ボタン 一 2

「鈴、どうしたんだ？」

正門を出てから鈴と手を繋ごうとすると、どうも彼女の様子がおかしかった。

なんとなく元気がない。

「……」

というか、さっきからずっと無言だし、何も答えようとしない。

「鈴？」

顔を覗き込んでみると、ちょっと不機嫌そうな顔をしていた。

（俺、なんか怒らせるような事言っただけな？）

「……なんか、怒ってる？」

「いえ……」

(……? 怒ってないとするばなんなんだ?)

手だって全然握り返してきてくれないし。

「体調悪いとか?」

(風邪でもひいたのかな?)

その質問にも鈴は首を横に振った。

(怒ってもない、体調も悪くない……じゃあ、後はなんだ?)

もしかして、そんなに待たせたつもりはなかったけど部室棟で
かなりの時間待っていたんだろうか?

それで本当は怒ってるのか?

（いや、でも俺が手招きして呼んだ時は嬉しそうな顔で駆け寄って来てたしな―）

いくら考えても思い当たる節がない。

ここはどこかゆっくり落ち着ける所で話すしかない。

「鈴、まだ時間ある？」

「はい」

「じゃあ、ゆっくり話したいからどこかに入ろう」

そう言うと鈴はコクンと頷いた。

それに渡したい物もあるし。

俺は鈴の手をいつもより少し強い力で握り直した――。

彼女と一緒に駅に向かって歩いている間も“コレクター”達が横断歩道や

コンビニの前で“カモ”を待ち構えていた。

彼女達はみんな小さな紙袋を手を持っていた。

おそらく、その中に第二ボタンを入れているんだろう。

（一週間後にはあれが全部ゴミと化して燃えないゴミ行きになるんだろうな！）

第45話 Calling — 1 —

私と和泉沢先輩が手を繋いで歩いていると、途中で“第二ボタンコレクター”の人達が

卒業証書を持っている男子生徒に声を掛けているのを何度か見掛けた。

だけど、先輩にはもう声を掛けて来ない。

胸元を見ても第二ボタンがなくなっているのが一目瞭然だからだ。

「あっちは周りが騒がしいから、こっちの店に入ろう」

駅前に着くと、和泉沢先輩はいつものファーストフードを指差して苦笑いすると、

その隣にある喫茶店に入り、一番奥にあるL字型のソファアに腰を掛けた。

喫茶店の中はすごく静かで隣のファーストフードとは客層が全然違

っていた。

「ハァー……」

和泉沢先輩は少しの沈黙の後、徐に溜め息をつき、膝の上に置いていた私の手を握った。

「？」

私は思わずハッとして顔をあげた。

「やっぱ、今から卒業証書、返してこようかなー？」

すると、先輩は頬杖を付きながら私の顔をじっと見た。

「え……」

「自主留年」

「も、もう、先輩何言ってるんですかー」

「だって、やっぱり鈴と離れたくないもん」

頬を膨らませて拗ねたように言った先輩の顔がすごく可愛かった。

だから、今の今まで第二ボタンの事で拗ねていた私もつい笑ってしまった。

「そんな事言って、大学はどうするんですか？」

「来年また受ける」

「そしたら、またもう一年受験生ですよ？」

「う……」

第45話 Calling — 2 —

「ハア……俺が後一年遅く生まれてたらなあー……、そしたら鈴ともう一年一緒に居られたのに」

「そうですね。でも、先輩、来年になったらまた同じ事言いそう」

鈴はクスクス笑いながら宥めるように空いているもう片方の手で俺の手の甲を撫でた。

「あはは、確かにそうかも」

鈴は俺より二歳も年下なのに、時々俺より年上なんじゃないかと思うくらい冷静に答える。

……て、そもそも“自主留年”なんて子供っぽい事を言う俺自体がガキなんだけど。

でも、鈴の表情はちょっと寂しそうだった。

「なあ、鈴」

「はい」

「鈴の中で俺は今、何番？」

「一番ですよ」

鈴がそう答えるのはわかっていた。

そして鈴も聞かなくてもわかってるでしょ？　という風に小さく笑った。

さっきまで何か怒っているような顔をしていたけれど、

今は柔らかい笑みを浮かべている。

「じゃあさ、一番ならー……“先輩”じゃなくて“大地”って呼んで欲しいなー？」

俺が大学に通うようになれば今みたいにこうして顔を見ながら話すことも少なくなる。

だから、少しでも鈴を近くに感じられるように、鈴との距離がもつと縮まるようにしたかった。

「今日は卒業式だったんだし。“先輩”も卒業って言うのはどう？あー、ついでに敬語も」

突然の提案……というか要求に鈴はちよつと驚いていた。

「えっと……ご、五百万歩譲ったとして“大地君”じゃ、ダメですか？」

数秒考えた後、鈴はなんだかおとぼけた事を言った。

「ごひやくまんぽ？」

「百歩譲る以上に頑張るって意味なんですけど……」

（そーゆー事ね♪）

俺はおかしくてちよつと吹き出してしまった。

「そんなに頑張ってくれるんなら、“大地君”でいいよ♪ あ、でも、

ちゃんとタメ語にしてね？」

「は、はい、頑張ります」

「後、鈴に受け取ってほしい物があるんだけど」

「はい？」

「……これ」

制服のポケットに入れておいた物、それを鈴の手にそっと握らせた。

すると彼女は不思議そうな顔をしながら掌の中にある物を確かめるように

ゆっくりと視線を落とした。

「……え、これ……」

「俺の第二ボタン」

「っ!？　　コ、コレクターの子にあげたんじゃないんですか？」

鈴は俺が“第二ボタンコレクター”の子にあげたと思っていたのか、
メチャメチャ驚いていた。

「えーっ？　　そんなワケないじゃん。鈴に貰ってほしくて取っておいたんだよ」

俺がそう言うのと鈴は嬉しそうな顔で掌の中の第二ボタンを見つめていた。

そして、この時初めて鈴が俺の名前を呼んだ――。

「ありがとう……大地君」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371q/>

Calling

2011年1月23日18時48分発行